



案山子二〇二五（冬）



新潟大学文芸部



目次

案山子二〇二五 冬	
案山子二〇二五 冬号	3
目次	5
二〇二六 通常作品	7
一瞬。／あけぼの	9
失われた愛を求めて／南快	16
閏年騒動／李藻桃藻桃野内	21
フリードリヒ戦記／ランス・フォン・ポーターiv世	26
未熟の果実／小笠生依	38
冷笑／杜若	43
二〇二六 お題作品「映」	

二〇二六 お題作品「映」	53
網目 / 杜若	
網目 / 杜若	55
いつかあなたの隣で / 李藻桃藻桃野内	
いつかあなたの隣で / 李藻桃藻桃野内	60
季節性映病 What You reflect isn't everything. / 井上哲也	
季節性映病 What You reflect isn't everything. / 井上哲也	68
魚影 / 夕立実	
魚影 / 夕立実	75
パレキドリア / 星屑なつき	
パレキドリア / 星屑なつき	82
paranemoia / 今泉とびる	
paranemoia / 今泉とびる	94
はゆる日々に / 田村美結	
はゆる日々に / 田村美結	101
はゆる日々に / 田村美結	
はゆる日々に / 田村美結	101
ビリーヴメント / 南快	
ビリーヴメント / 南快	106
ビリーヴメント / 南快	
ビリーヴメント / 南快	106
むつきくん / 釉南	
むつきくん / 釉南	114
むつきくん / 釉南	
むつきくん / 釉南	114
奥付	
奥付	118

案山子二〇二五 冬

案山子二〇二五 冬号

案山子二〇二五 冬号

目次

目次

目次

二〇二六 春号 通常作品

一瞬。／あけぼの

失われた愛を求めて／南快

閨年騒動／李藻桃藻桃野内

フリードリヒ戦記／ランス・フォン・ポーターiv世

未熟の果実／小笠生依

冷笑／杜若

二〇二六 春号 お題作品「映」

網目／杜若

いつかあなたの隣で／李藻桃藻桃野内

季節性映病 what You reflect isn't everything. / 井上哲也

魚影／夕立実

Paranoia / 今泉とびら

はゆる日に／田村美結

パレキドリア／星屑なつき

ブリーヴメント／南快

むつきくん／柚南

奥付

二〇二六 通常作品

二〇二六
通常作品

二〇二六
通常作品

一瞬。
／ あげぼの

一瞬。／あけぼの

一瞬。

あけぼの

0

一人暮らしを始めてからめっきりテレビを見なくなった。だから僕がそのニュースを初めて知ったのはたぶん、SNSのトレンド欄とかだったと思う。最初それを見た時はあまりの現実感のなさにまたよくある陰謀論か何かだろうと思って無視していた。でもそのニュースは一週間経ってもトレンドの一位に居座り続けていた。近所のコンビニが二十四時間営業ではなくなった。隣の部屋からあわただしくスーツケースを転がす音が聞こえるようになった。やかましくてたまらなかった酔っぱらった大学生たちの馬鹿騒ぎが、最近ほぼったり止んだ。何かがおかしい。嫌な予感がした。この予感はおそらく正しい。ようやく僕はテレビをつけた。そこにはでかでかと真っ赤なテロップでこうあった。『半年後に世界が滅亡!?! 地球に急接近している隕石の正体とは』と。予感的中した。

1

どうしようもない終わりが目前に迫ったとき、人の本当の弱さが発露する。善き隣人は悪人になり、ものを盗み人を殺す。そういう類の創作物は山ほどある。それに倣って僕の眼前には荒廃した廃墟のような街が広がっている——と言うことはなかった。街はいつも通りの日常を演じていた。

もちろん最初は混乱もあった。公共交通機関などのライフラインの停止。強盗や殺人、テロ未遂なんかも起こった。しかしそれらは日常を決定的に破壊するほどの威力を持ってはいなかった。公共交通機関は三日以内に回復。テロも「未遂」で終わったし、強盗や殺人もすぐに犯人が捕まって解決した。秩序に対する反抗。ある意味で強烈な現実逃避だったのかもしれない。世界が終わるといふ現実から目を逸らし、自分の欲望にだけ目を向ける。それは確かに魅力的だ。都合がいい。しかし痛みを伴う。人は痛みが嫌い。だから多くの人は現実を見つめ、そして諦めた。この終わりは避けられないものだど悟った。普段通りに善く生き、緩やかな終わりを迎える。それこそが今自分たちがするべきことだと、最善だと認めた。耄碌した死にかけの老人が最後の一日だけ思い出したように生氣を取り戻すような。つまりこれはそういう平穏だった。危うく、誰かが息を吹きかければすぐにでも消えてしまうような秩序だった。

僕は地元に帰ってきていた。進学で上京してから一度もこちらに戻ってきていなかったから、実に二年ぶりの帰還と言うことになる。

九州の小さな県の小さな町。海と山のお膝元で僕は育った——と言えば聞こえはいいが、実際はそんなに

いいものでもない。山が道をふさいでいるせいで電車は通らないし、海だって緑色に濁った、どちらかと言えば入るのを憚るようなものだ。噂はすぐに広まるし治安もそんなに良くない。閉鎖的だし封建的だし、嫌なところやダメなところを挙げればきりがない。それでも僕はここに戻ってきた。最後に時間を過ごす場所としてここを選んだ。

待ち合わせの時間までまだ少しある。せっかくだから少し寄り道をしよう。

僕は目的地の二駅ほど前でバスの降車ボタンを押す。整理券と運賃を入れて外に出ると、潮風が前髪を揺らした。一年もたっていないというのにバス代はまた値上がりしていた。田舎では少子化の流れが極端だ。バスの需要も年々減少し、採算が取れなくなってきているのだろう。つまらない話だ。こんなことは。どっちにしろ半年後に世界は終わるのだから、そんなことは考えなくてもいいのだ。

閑散とした公園を抜けると、一気に視界がひらけた。そこは防波堤だった。かつては釣り人たちの車であふれ、彼らからのおこぼれを期待した猫たちが我が物顔で歩いていた防波堤。しかしそんなにぎやかさはすでに失われていた。コンクリートの隙間から除く枯れた雑草を一つ何の気なしに引っっこ抜いて、海に投げる。

どうして僕はここに来たのだろう。何を期待してここに来たのだろう。

2

先輩は愉快な人だった。いつも彼女は愉快そうに笑って、愉快そうにはしゃいだ。嘘みたいな人だった。僕はそんな先輩を見ているといつも安心した。もしかすると将来に不安なんか一ミリもなくて、大抵のことは何とかなって、苦しみもちょっとしたスパイスで、挫折なんてありえないんじゃないかと思えたから。

「先輩は卒業したらどうするんですか」

いつだったかそう尋ねたことがあった。場所はこの防波堤で、池島も一緒だった。僕たちはみんな写真部に入っていた。といっても具体的な活動なんてほとんどない、ただ部室に集まってだべるだけの適当なものだったのだが。放課後僕たちはよくこの防波堤を訪れた。そして日が暮れるまで何の益体もない話をした。

先輩は両腕をいっばいに広げてテトラポットの上を歩いていた。あまりに危なっかしいから何度もやめるように言ったのだが、彼女は聞く耳を持たなかった。

「分かんないよそんなこと」

「順当に行けば地元の大学に進学して、卒業して、働くんだろうね。もしかしたらその間で結婚するかもしれないし、子どもだって生まれるかも」

「先輩と結婚する人は災難だな」と池島が茶化す。先輩は笑顔のまま履いていた靴を奴の方に蹴飛ばした。靴は池島のおでこにクリーンヒットし、情けない悲鳴が上がった。いつもの流れだった。

「でも明日突然死ぬかもしれない。ここからの帰り道、数秒後、数瞬後。いきなり私は死ぬかもしれない。未来に絶対はない。だからそんなこと考えるだけ無駄だよ」

「でもそれは言い訳じゃないですか。だってそんなことはほとんどありえない。きっと先輩は明日も明後日も十年後も生きてる。そういう現実から目を逸らすための言い訳でしかないじゃないですか」

「かもね。でもそれでもいいじゃない。私は今生きてる。今楽しい。将来は分からないけど、今この瞬間は確かに楽しい。それだけで十分でしょ？」

先輩はそう言って、僕に何かを放った。それはカメラだった。上等な一眼レフでも何でもなし。安っぽくデジタルカメラ。

「だから私はそれが好き。写真は一瞬を切り取れる。その先もその後もない。ただ今を切り取れる。私を撮ってよ月町くん。夕日が映えて結構きれいだよ。せっかくなんだから、精一杯『映え』るように撮ってよね」

僕は苦笑しながらシャッターを押した。そしてカメラを先輩に向けて放り返す。彼女は品定めするように僕が撮った写真を見ると、「上出来!」と言った。そして続けて

「月町くん。もし」

3

「痩せたなあ、月町」

待ち合わせ場所に指定されていたある公園。そこで池島は僕を見るなりそう言った。

「そういうお前は何にも変わってないな」

僕が半ばからかうようにさういとうと、池島は「ありがとな」と言って笑った。別に褒めたつもりはなかったのだが、しかし彼にさういう皮肉が通じないのもまたいつも通りと言えはいつも通りだった。会食をする居酒屋までは少し距離があるという。僕たちは並んで夜の街を歩きだした。

「にしても良いのか？ 居酒屋なんて。お前は良いにしても、僕はまだ未成年だ

「大丈夫だって。ここは年確ないから。もうあと半年で世界が終わるんだぜ？ そんな小さなことに気にするなよ」

「お前な」

「苦言を呈そうとしたところで店員がオーダーを取りに来た。池島はこなれた感じでよくわからない酒の名前を口にした。僕もメニュー表にある中で一番アルコールが入ってなさそうなものを注文する。

「にしてもわざわざこんなしけたとこに帰ってこなくても良かったのに。物好きだよな。お前も」

「別にそうでもないだろ。最後にいる場所は故郷が良いっていうのは結構普通な感情だと思うけどな」

「そうか？ でもここに先輩はいない。この土地が先輩を殺したんだ。未来が見えないこの土地が、先輩を自殺に追いやった。こんなところの何がいいんだよ。なあ月町、お前は戻ってくるべきじゃなかったよ」

「池島お前」

そこで注文していた酒が来た。彼は透明なそれをグイッと半分ほど飲み、笑った。

「って、お前に行ってもどうしようもないのにな。いや実際俺もうれしいんだ。お前と会えたのは。本当に。でもここにいるとな、やっぱりだめだ。俺は先輩のことが忘れられないんだ。今でも。もしかしたら何かしてやれたんじゃないかって、もっと早く、何か」

先輩は死んだ。僕が大学一年目の冬を迎えた頃に。死因は自殺だったというのが詳しいところは分からない。親族がなぜか警察の介入を嫌がったとか、そんなきな臭い話も聞いたが、ありもしないゴシップが広まることなど日常茶飯事だ。あんまり信用はできない。いや、そもそもそんなことはどうでもいい。重要なのもう先輩がここにいないというその事実だけだ。彼女が卒業してから一度も彼女と会ったこととはなかった。メールやラインなんかも繋がっていなかったから、連絡は一切取っていなかった。彼女と僕の関係は希薄で、はたから見れば無いようなものになってしまっていた。しかしそれでも、僕は彼女の死を知らされた時、泣いた。悲しかった。どうしようもなく悲しかった。彼女がもう笑えなくなってしまうことが。もう彼女が笑う姿を、二度と、見るできないことが。でも。

「どうしようもできなかったよ。きっと」

「……やっぱりそうか」

彼女はそういう生き方をしていた。いつかは絶対にこの世界の重さに潰されてしまう、脆い生き方をしていた。彼女はそれを貫いたのだ。そしてその結果死んでしまった。僕たちが介在する余地は、きつとなかった。これはどうしようもない話なのだ。誰も何も変えられない。ただ起こるべくして起きた、ただそれだけのことなのだ。

4

店を出たのは零時を回るころだった。田舎は終電が馬鹿みたいに早い。バスも電車もすでないので仕方なくタクシーを呼ぶことにした。

まばらに通る車と下品にビカビカ光るパチンコ屋の光をぼんやり眺めながら待っていると、不意に池島が封筒を差し出してきた。

「後で見てください。べつに怪しいものじゃない。中身を見た後で返す必要もない。ただ俺はもうそこには戻れない。だからお前に渡す」

彼はそれだけ言って去っていった。歩いて帰るのだという。

手持無沙汰になった僕は封筒の中身を見ることにした。粘着力が弱まったセロハンテープを爪ではがし、中を探る。入っていたのは一枚の写真だった。

「本当にここでいいんですか？」と訝しがる運転手を適当にいなして、タクシーを降りる。そこはあの防波堤だった。

冷たい風。潮のにおい。あたりは真っ暗でなにも見えない。街灯を頼りに進む。手元には一枚の写真がある。それはあの時撮った先輩の写真だった。テトラポットの上で両手を広げて、愉快そうに笑っている先輩の写真。

——大体このあたりだろうか。

防波堤のへりに手をかけ、体重をかける。あの時よりも体が重い。それとも腕の力が衰えたのだろうか。なんとかよじ登って、冷たいコンクリートの上にへたり込む。

黒い海が広がっていた。何も見えない暗黒がそこにあった。あの時みたいなきらめきは、もうそこにはなかった。だって先輩はもういない。池島もここにはいない。僕は一人だ。将来のことを考える必要はもうない。そんなことを考える間もなく、世界は半年後に終わってしまうのだから。

僕はその景色に写真を重ねた。切り取った一瞬を重ねた。

「月町くん。もしこの先未来が見えなくなったら。何も見えなくなってしまうたら、このことを思い出してね。今この一瞬だけを楽しく生きる。無計画で刹那的で、あんまり褒められたことじゃないかもし

れない。でも私は結構素敵なことだと思っただ」

僕は写真を封筒にしまった。そしてテトラポットの上に飛び乗った。「おわっ」と情けない声が出た。これはなかなか難しい。一生懸命両手を広げてバランスをとる。体いっぱい潮風が吹きつける。自分の輪郭がはっきりとわかる。今、僕はここにいる。

失われた愛を求めて
— 南快

失われた愛を求めて / 南快

失われた愛^{きみ}を求めて

南快

人は誰しも愛に飢えています。誰かの愛でしか、自分の存在を確かめられない。人は愛のために、そして愛のおかげで生きているんだと思っています。そう思うことでしか、もう私は私を肯定出来ないんです。

私にそんな愛を教えてくれたのは真白くんでした。

成人式の後の同窓会で真白くんを見かけた時は本当にびっくりしました。あんまりこういう集まりは好きじゃないと思ってましたから。彼を見つけた瞬間に在りし日の2人の思い出が一気に回想されました。

昔から、私はあんまり自分のことを肯定することができない人間でした。お兄ちゃんもお姉ちゃんも優秀な人だったから、両親はすぐに2人を引き合いに私に小言をぶつけてきました。「ああ、そうか。私は出来が悪い子なんだ」幼いながらに私はそう察して、自分にレッテルを貼って生きていました。

そんな私に対して真白くんはいつも優しく接してくれました。「桃華、すげーな」「桃華、ありがとう」真白くんはいつも私にそんな言葉をかけてくれました。彼からしたら何気ないことなのかもしれないけど、少女桃華にとってはそれは何よりも大切なものでした。両親がお兄ちゃんとお姉ちゃんにだけ与えていたものを、彼は私にも与えてくれました。

真白くんと付き合うことになって初めて、私はこの世界に肯定されたような感覚になりました。どんな困難があろうと私には真白くんという味方がいる。そんな事実だけで十分でした。

だから、感染症のせいで私たちの関係が断絶されたときは本当にこの世の終わりのような感覚でした。真白くん、きつと失望してたでしょうね。一方的に別れをきり出されて。きつと、関係を続ける術はいくらでもあったと思います。けど、私は感染症を、お母さんの仕事を言い訳に、会えない不安から逃げてしまいました。だからもう、私は彼には関わる資格がない。そう思っていました。

真白く人を失った私は再び誰かの愛を欲しました。大学に入ってからも何人かとお付き合いしましたが、誰とも長い付き合いにはなりませんでした。それでもなお私は渴望していました。もはや私にとって、愛なんてものは自分の存在を繋ぎ止めるための消耗品でしかなかったんですね……

「ああ、桃華か」

ああ……知っている真白くんの声でした。

「お久しぶり、元気そうだね、真白くん」

「久しぶり……」

「うん、真白くん変わらないね、あつ、もちろんいい意味でね。見たらすぐ分かっちゃったよ」
分からないわけありません、私にとって大切な人なのですから。

「そういう桃華はだいぶ、変わったな。その……なんていうか……大人になったというか」

「ふふ、どうもありがとう」

話している時、真白くんはどことなくよそよそしい雰囲気を漂わせていました。そうですよね、彼にとって私はもう過去の人間ですもんね……

「やっぱり……2人とも変わっちゃったな」

つい、心の声が漏れてしまい、焦ってしまいましたが、真白くんは特に気にしている様子もありませんでした。

「あつ、それじゃあ……」

そう言って彼はそそくさと去って行きました。少し話ただけで分かりました。私、避けられてましたね……
真白くんに会えて嬉しいという気持ちと同時に、会わなきゃ良かったなって後悔が私の心に生まれま
した。昔の、美しい記憶のままであって欲しかったですね。

その後いろんな子と思い出話を花を咲かせていましたが、ふとしたタイミングで真白くんのことを目
で追ってる自分がいることに気づきました。話も一区切りついたタイミングで、私は勇気を出してもう
一度真白くんの元に行こうとしました。

「あれ？ 春日井さんだよな？」

不意に後ろから声をかけられました。ああ、高森くんですね。私たちの学年一のモテ男です。

「久しぶりだね、と言っても僕らあんまり関わりなかったか」

「あはは、そ、そうだねー」

特に話すこともなく、とってつけたような返答しかできず、私は気まずさでいっぱいでした。もじもじしている私のことを高森くんはじっと見つめてきました。

「やっぱり、春日井さん可愛いよね」

……

……

え……？

一瞬頭がフリーズしてしまいました。あの高森くんからそんなことを言われるなんて

「いや、全然そんなことないよおー」

「ははっ、謙遜しなくていいのに。あんまりクラスの中心に立つタイプじゃなかったけど、僕は春日井さんがクラスで1番可愛かったなって思ってたよ。他の男子もそうなんじゃないかな」

さっきまで真白くんを追うことに必死だったはずなのに、高森くんの甘い言葉に私はついついとしてしまいました。私のことをここまで肯定してくれる人がまだいたと言うことに私は形容し難い安心感に包まれました。高森くんがそうやって私を肯定してくれる存在だと分かったからか、その後は気まずさもなく、楽しくおしゃべりすることができました。

同窓会が終わり、みんなはそのまま二次会に行こうと言う流れになっていました。私も参加しようと思ったところ、急に高森くんに声をかけられました。

「ねえ、2人でこの後飲まない？」

突然の誘いにドギマギしてしまい、周りをキョロキョロと見てしまいました。そしたら、遠くにいる真白くんと目が合いました。でも、彼はすぐに顔を背け、1人で集団を離れてどこかへ歩いて行ってしまいました。

「うん、いいよ」

どれだけ飲んだか覚えていませんが、私は気付けばホテルのベッドの上で寝ていました。ぼんやりとした意識の中、視界の端では、間接照明の妖艶な光が揺らめいていました。シャワー室の扉が開き、バスローブを着た高森くんが出てきました。彼は、部屋で冷やしていた缶チューハイを取り出し、一つ私に差し出し、私たちは再び乾杯をしました。そうして、私たちは互いの体温を確かめ合うように、静かに距離を失っていきました。それが愛なのかどうか、考える余裕もありません。

結局、彼との夜の中に、私の求める愛はありませんでした。最初強く抱きしめられた時、自分は愛の中にいると安心できたはずなのに、それはただの幻想でした。一方的な性欲の発散、場の空気を取り持ったためのまやかしの絶頂。一晩中、彼は私の名前と愛の言葉を囁き続けました。彼にとっては立派な性行為かもしれませんが、私からしたら単なるごっこ遊びでした。ある時、私は泣き出してしまいました。それが嬉しきなのか悲しきなのかわからないまま。彼からの愛をたくさん注がれたはずなのに私の中には何も残っていませんでした。

ふと、真白くんの顔が頭によぎりました。彼だったらもっと私のことを満たしてくれたでしょうか。男に抱かれた直後にまた別の男を考えるような、己の軽薄さが私には卑しく思えました。でも、今はもう真白くんのことが頭から離れないんです。そのまま私はホテルだけを置いて、疲れて眠る高森くんを一人残して部屋を去りました。着込んだ服にはまだ僅かにお酒の匂いが残っていました。

明朝、人気の少ない街を私は一人で歩いていました。周りには誰もいません。愛で満たしてくれる人も、私を肯定してくれる人も。ふと、真白くんに会いたくなりました。でも、会うのがとても怖かった……私は本当に真白君のことが好きなのか、それとも単に私の心にポツカリと空いた穴を埋めたいだけなのか、もう分かりませんでした。

ねえ真白君。

これは恋なの？

それとも、私が私であるための逃げ道？

答えは教えてくれなくていいの……ただ、私に愛を教えてください……

真白くん、真白くん、真白くん……

私は携帯のトークアプリを開きました。触れる人差し指は震えながらも彼にメッセージを送りました。程なくして既読がついた。それだけで私は救われたような気がした。溢れる笑いを隠すように私は口元にスマホを当てた。

閏年騒動／李藻桃藻桃野内

閏年騒動 / 李藻桃藻桃野内

閏年騒動

すもももももものうち
李藻桃藻桃野内

「ヘエエエエジェルウー!!! お前、もう少しで誕生日じゃないか! おめでとう!」

鐘人が突然奇声をあげたため、ヘージェルは肩をびくつと揺らした。それでも内容のため、ヘージェルはいつものように怒らずに微笑む。

「ちょっと早いけど、ありがとな。鐘人。お前が人の誕生日を覚えていられるという事実が嬉しいよ」

鐘人はどこの学部にも属しているのかは分からない。しかし何か研究・開発をする学部にも所属しているらしい。どうやら時間を研究していて、将来はタイムマシンを開発するんだと、いつも意気込んでいる。そんな研究にしか興味のない彼でも、ヘージェルの誕生日は何にもまして重要なことだ。ヘージェルの誕生日である二月二十八日は二週間も先のことだが、鐘人は早くも意気込んでいる。

「いやー、嬉しいぜ。ヘージェルにはいつもお世話になってるし、盛大に祝ってやらないとな! どうせだったら『レイドギイメンIIアサガリテ語』の今縫寛斗先生、呼んじゃうか! プレゼントも用意しなきゃだし、しばらく忙しくなるぜ!」

ヘージェルは、鐘人が自分の事のように喜んでくれるのを見ている。鐘人の姿を見ると、今まで巻き込まれてきた事件も自分の誕生日のスパイスのように思えてくる。そして、ついヘージェルは事件が巻き起こりそうな言葉を、ぼろつと口走ってしまう。

「まったく、鐘人がこんなに喜んでくれるなんて。俺の誕生日が毎日繰り返されればいいのになあ」

すると鐘人は目を大きく見開く。顎に手を当てて、ぶつぶつとつぶやいている。ヘージェルが嫌な予感がした直後、鐘人が手を大きく叩きながら叫ぶ。

「なるほどな! 閃いたぜ、ヘージェル! お前の誕生日プレゼントがな!」

目を輝かせた鐘人は、そこにヘージェルを残し、大急ぎでその場から立ち去ってしまった。日本史を学ぶために、ドイツからN大学に留学しているヘージェルは、大きく肩を落とす。毎度毎度、鐘人の作った道具によって、様々な騒動に巻き込まれてしまうのである。ヘージェルは日本製フロックコートのポケットに手をつっ込み、一人さみしく留学生寮に帰っていった。

二週間後、ちょうどヘージェルの誕生日の二月二十八日である。朝早く、突然ヘージェルの部屋のドアがノックされた。まさかと思い、ドアを開けると、鐘人がいた。

「ハッピー~~~~~~~~バァァステェェェイ! ヘージェルウウウウウウ……」

全く寝てないのだろうか。お祝いの言葉を言って、玄関に入り込み、倒れこんでしまった。ヘージェルはため息をついて、鐘人を部屋の中に引きずりながら連れ込んであげた。

「これは俺が創った発明品、『潤ループ』だ！」

五時間ほど寝て、シャワーを浴びた後に完全復活した鐘人は、ヘージェルに言う。すると鐘人は胸元のポケットから、スポイトに入った液体を取り出した。自慢げに見せてくる鐘人に、ヘージェルは聞く。

「なんだ、それは。またわけの分からないものを作ったのか。いったいどんな効果があるんだ」

鐘人は鼻を鳴らし、得意げになりながら説明を始める。

「『潤ループ』っつー名前は、自分の好きな日を何回も繰り返し、心が潤うって意味を込めたんだよ。まあ、それはいい。時間っていうのは、実は互いに飽和しあっていて…（中略）…と、いうわけなんだ。つまりこの『潤ループ』に入っている液体を、空中に垂らせば、今日がもう一度繰り返し返されるってわけだ」

ヘージェルは、難しい説明に狼狽していた。しかし要点だけはつかめる。一日をループさせ、もう一度同じ日を過ごせる道具だという。あまりにも常識とかけ離れている話のため、にわかには信じられない。すると、鐘人は言う。

「これはヘージェルの誕生日プレゼントに作ったんだ！　ヘージェルの好きなだけ、誕生日を繰り返ししてくれ！」

ヘージェルはそれでは誕生日の意味がないだろうとツッコみたくなったが、鐘人の好意を無下にはできない。ましてや、ヘージェルもいったい何が起こるのか興味がある。

「じゃあ、鐘人。一回だけ、誕生日をループさせてみてくれないか」

鐘人は、にやりと笑い、『潤ループ』についたスポイトの先の蓋を取る。続けて鐘人はスポイトに入った液体を垂らす。すると、何が起こったのだろうか。地面にしばらく落ちず、途中できらきらとはじけ、消えてしまった。

「これでヘージェルの誕生日の二月二十八日は、明日にも来る。明日は三月一日じゃない。二月二十八日なんだ。まあ、明日まで待ってみよう。面白いことが起こるぜ」

ヘージェルは少々心配になりながらも、待つことにした。スマホを見ると、画面の上部に表示された日付は、二月二十八日だった。すると突然、インターホンが鳴った。鐘人の計らいで、お祝いのごちそうがヘージェルの部屋に届いたのだ。チキンやケーキ、シャンパンなどまれに見ないほどの豪華さである。二人でそのままパーティを開き、一通り楽しんだ後、二人で寝落ちしてしまった。

ヘージェルが目を覚ますと、まだ暗かった。スマホを開いてみると、朝の四時である。寝落ちしたまま朝まで眠っていたようだ。寝ぼけ眼でスマホを見ると、衝撃の事実に気づき、眼が覚めてしまった。スマホのロック画面の上部に表示されている日付。これが二月二十八日になっていたのだ。ヘージェルは急いで鐘人の肩をゆすって起こす。ヘージェルのスマホのロック画面を見た鐘人はにやにやしながらいう。

「おお！　実験は成功だな！　これで、ヘージェルの誕生日はループした！　今日は二月二十八日だぜ！　それにしても『潤ループ』、すごい発明だぜ。休日とかで使えば何日も休むことができる、な

んて素晴らしいものを作ってしまったんだ！」

鐘人はげらげらと悪魔のように笑っている。自分の才能にほれぼれしているようだ。ヘージェルはそんな鐘人を見ていると、突然昨日ペットボトルのごみを出し忘れていたことに気が付いた。ヘージェルはペットボトルの詰まったゴミ袋に手を伸ばす。大きな割には軽かった。そして、二十八日がペットボトルの回収日か確認するために、玄関に貼ってある収集日のカレンダーを見る。するとヘージェルはある違和感に気づく。

「二十八日が二つ……？」

赤く塗られた『ペットボトル』と書かれたマスが連続している。ヘージェルの住む地区では、ペットボトルは週に一回しか回収されないはずだ。その二つのマスの左上には、どちらも『二十八』と書かれている。印刷ミスだろうかと思いつつ、嫌な予感がした。スマホを開き、カレンダーを確認する。すると、ヘージェルは青ざめてしまった。急いで部屋の中のカレンダーを見る。あまりに切迫していたため、鐘人が心配しながら聞く。

「おい、どうしたヘージェル。なんか出し忘れた課題でもあったか？ 単位なんて一回くらい落としても……」

「違う、違うんだ鐘人。二月二十八日が、二つあるんだ。どのカレンダーを見ても！」

鐘人は訝しげにヘージェルが部屋中からかき集めてきたカレンダーたちを見る。去年のカレンダーには二月二十八日は一つしかない。しかし今年の中のカレンダーにも、二月二十八日が二つあるのだ。

鐘人は去年のカレンダーと今年のカレンダーを見比べながら、じっと考えている。するとおもむろに懐から『潤ループ』の設計図を取り出す。頭の中で緻密な計算が繰り返されているのだろうか、一言も発しない。すると顔が真っ青になり、ヘージェルに話しかける。

「へ、ヘージェル……。ミ、ミ、ミミミミミ、ミスってるんだ……。設計ミスなんだ……。元々俺が想定していたのは、二十八日の繰り返しだ。二十八日のうちで、とどまり続けるようにしたはずなんだ。だけれどこの設計だと、ちょっと変わるんだ！ 二十八日を繰り返すんじゃない……。二十八日が新しく創造される。つまり、二十八日が増えることによって、もう一度二十八日が来るというシステムになってしまっているんだ！」

ヘージェルも鐘人も焦りが止まらない。おそらく世界は大混乱だろう。怖くてテレビのニュースやSNSを見ることができない。どうすればいいのだろうか。

すると鐘人が何かを閃いたような顔をした。そして、ヘージェルを置いて、一目散に外に出て行ってしまふ。ヘージェルは鐘人のことを信じるしかない。そのため、外の暗さに不安を覚えながらも鐘人のことを待ち続けた。

すると十五分後に、ヘージェルの部屋のドアが開いた。何かを持った鐘人である。ヘージェルはその手に携えた物を見て、言う。

『織星彦姫』……。まだ残っていたのか……」

「織星彦姫」とは、短冊型の鐘人の発明品である。そこに願い事を書けば、なんでも叶うという代物だ。

「まあ、前に作った時のやつが一枚残ってたのでな。設計図も処分したし、トラウマで使わない予定だったんだが……」

二人は顔を見合わせる。そして鐘人は言った。

「今回ばかりは、許してくれよ……」

ヘージェルと、鐘人は二人で牛井屋に向かっている。重複した二十八日の対処については、二人だけの内緒になっている。彼らは、『織星彦姫』にこのように記入した。

「重複してしまった二十八日を、四年に一回くる『閏年』の二十九日、ということにしてほしい」

つまり鐘人とヘージェルは、重複した二十八日を、二十九日として暦に存在しうるように常識改変したのだ。約二千年の歴史の中で、一年だけ日にちが増えるのは不自然だと考えた彼らは、四年に一回『潤ループ』を使用することにより、暦上に二十九日が存在するというつじつま合わせを行うということにした。『閏年』という言葉は、『潤ループ』に使用されている潤うという漢字の部首を取ったものを採用し、無事人々の常識内に『閏年』を入り込ませることができた。

ヘージェルは自分のスマホに表示されている二月二十九日という表示や、牛井屋で行われている肉の日を見て、ありのままの現実、今日起こったことを受け止めることにした。

我々の世界において四年に一度訪れる『閏年』は、実はこのようにして誕生したのである。

フリードリヒ戦記／ランス・フォン・ボーター
iv世

フリードリヒ戦記／ランス・フォン・ポーターiv世

フリードリヒ戦記

ランス・フォン・ポーターiv世

夜の闇。影を溶かし合わせたような漆黒は、辺りの森の陰を際立たせる。

「よし、ここまでは順調だな」

「これで家に帰れるんだよな。ああ、よかったあ」

後ろから気の抜けた声が響く。ニールスの野郎だ。

「気を緩めるなよ。城を出るまで、手前の蚊の鳴くように静かな声とやらが何度足を引っ張ったか思い出せ」

振り返って、豪胆な顔立ちをした大男へ声を掛ける。ポロポロの布切れを服代わりに腰に巻き付け、使い古した革靴をつっかけている。腰に差した剣がなければ、おそらく身分を悟られることはないだろう。背後には、城というよりは砦に近い山城がまだ大きく見えていた。距離としては馬で走れば一分とかわらない。

「おいおい、神経を張りすぎだぜポア。確かに俺らは脱走兵。見つかったら殺される。でもよ、たかが俺たち二人逃げたとして、魔法使いはおろか、追手一人差し向けることもあるまいよ」

がははと笑う。村の宴を何度と湧き立たせたその笑い声も、この場においては神経を苛立たせる要素だ。

「ふざけるな。いいか、この領主は良識がありで、庭に奴隷を這いずらせて鞭打ちにするのが日課だというお方だ。虫けらとて見逃さんかもしれん。それに俺たちはあの秘密を知っているんだぞ」

ふと、城の方が光った。松明の光だった。

「しまった、走れ」

叫ぶ。駆ける。脇の木々が、ものすごい速さで後ろへ引きずられていく。道は舗装などない山道。凹凸が擦り減った靴の足を取る。

「あっちだ、追え」

こだまする。奴らはどうやら馬に乗っているようだ。土を蹴り上げる音が、だんだんと近づいてくる。

「このままでは追い付かれるな」

「ははは、訓練をもう少しさばらなければ、もっと足も速かったかもな」

ニールスは息をせえせえ切らしながら冗談を飛ばしている。生来の調子なのだろうが、命がけでも変わらないというのが呆れたところだ。

「冗談を言っている場合か」

蹄の音はもう耳のすぐ近くまで来ていた。

その時、野生の馬が二体、茂みから飛び出てきた。体はオリンプスの山々を思わせ、脚は丸太そのも

のだ。牧場の牛の毛づやに、らんらんとした宝玉が瞳として収まっている。

そのとき、

「いい馬だ。こいつに乗るぞ」

ニールスが吠えた。

「乗るって、綱もなしにか」

馬は猛獣。手綱も鞍も無く人間が敵う相手ではない。

「心配いらん。俺もお前も乗馬は得意なほうだった」

まったく理屈が通っていない。しかし、すぐそこまで敵が迫っているのだ。悠長なことを言っている場合ではないのも事実。

「分かった、飛び乗るぞ」

跳ねた。宙に浮いた体を、そのまま馬の背に持っていく、跨る。馬は悶え、自分の背中に取りついた異物を振り払おうと体を揺らす。土煙が舞う。体は上下左右に激しく打ち付けられ、馬をつかむ腕の力が抜けていく。

「ぐ、この、とりゃ」

嵐の中で、腰に据えてあった剣を抜き、馬の尻を切りつける。

「目が、目があ」

追ってきていた男たちの一人が呻いた。嘔き出した血液が目隠しになったらしい。

馬は咆哮して、走り出した。ニールスの方もうまくいっているようだ。奴らとの距離はどんどん離れ、やがて豆粒ほどの影しか見えなくなった。

「逃げきったな」

ニールスが安堵の声を漏らす。普段なら気が早いと怒鳴りつけるところだが、今回ばかりは別だ。

「ああ、村に帰ったら居酒屋へ行って、酒を腹一杯に流し込もう。何気にするな、俺の奢りだ」

「ははは、ポータが俺に奢るとは、明日が終末の日かもしれない」

まったく失礼な奴だ。笑いながら馬を走らせる。森の出口は近い。肩の力を緩めたその時。

「アイン・フリーレン」

地の底から呪詛が響いた。瞬間、闇の中に閃光が走った。ぞくりとするほどの極彩のそれは、水色の光球だった。光は俺たちの間を通過して、生い茂る木々の一本に当たった。

この世のものとは思えない光景が広がった。球が当たった木は、凍り付いた。今までそこに命としてあった樹木は、一拍の間もなく水細工に書き換えられた。

それは吐き気がするほど美しく、天上の女神の恐ろしさを持っていた。

「これが、魔法」

知識としては知っていた。おとぎ話としては聞いていた。戦術としては読めていた。だが、初めて目にした奇跡は、最も根源的な恐れを抱かせた。見通しのきかぬ闇、未知への恐れ。

「あああああああああああああああ」

声帯から、自分だけでも逃れようと這い出る叫び。許容する。でなければ、周りを覆う闇に取り込まれる幻影を払えない。

これがいけなかった。けたたましく耳元で騒がれ、馬がパニックになってしまった。暴れ回る。荒波に飲みこまれる。背を握っていられない。減速。致命的だ。

光の矢が飛んでくる。色とりどりの稲妻が暗黒の中を疾走する。

「くそ、くそ、走れ駄馬め、畜生、何で走らねえ」

遅い。紅い刃が追いつき、馬の脚部を掠める。猿叫と共に、馬の足が燃え上がった。

「奴らだ、殺せ」

殺人者の息遣いが聞こえてくる。不味い。このままでは殺される。

第二陣。再び雷光が迫り、

「ぐ、がぎ」

今度は俺の腹を抉った。

「く」

被弾した箇所を見る。土手っ腹には砲丸が丸ごと嵌る大きさの穴が開いていた。そこからは、赤黒い大河が流れ出していた。

「そが」

馬のケツを刺し、加速する。後ろの連中と距離が離れるが、それも一時的なこと。やがて追いつかれ、捕らえられ、この穴をぐりぐりと剣で弄ぶのだろう。このはらわたすべてが、磨り潰され切り刻まれる感覚。

血の気が引いてくる想像だが、そうでもしないと血が溢れて死んでしまう。大河は今も氾濫を続け、大地を赤に染め変えているのだから。

「まったく、根っから平民だ」

人生の終盤に差し掛かって冗談も冴えてきた。これなら最後の審判も乗り切れるだろう。

ニールスに視線を向ける。この時ばかりは奴の顔にも笑みがない。口を真一文字に結び、瞳で目の前に囁り付いている。俺はもう助からん。ならば、せめて奴だけでも逃がさなくては。

そう決心したとき、

「しょうがない。お前だけは生き残れ」

ニールスが馬をクルリと振り向かせた。

「何をやる、ニールス」

その役目は俺がやる。

「我こそは、ニールス。高慢にして偏見多き騎士と、それに付き従う愚か者共よ。虫けらの戦いぶり見せてくれる」

雄々しい唸り声と、蹄の音。それからしばらくして、氷の割れる音がした。

走った。走った。走った。ニールスは時間を稼いだ。だから走った。

走っているうちに森を抜けていた。奴らは振り切った。逃げ切ったのだ。

馬を降りて横になった。空を見上げる。月も出ていない、辺りには何もなく、ただ闇があるだけ。大河は溜まって池となり、この大地を覆いつくそうとしている。

俺はここで消えるのだ。それはもうどうしようもない、自然の摂理だ。だから何も思うことはないの

だが。せめてニールスの分の命は繋がなくては。

ふと、光った。松明の光だ。また奴らか。俺にはもう武器を取る力すら残っていないというに。近づいてきて、姿が見えた。どうやら奴らではないようだ。

光源の主は、端正な顔立ちの美青年だった。死に損なっているときに考えることでもないと思うが、考えざるを得なかった。彼の外見は、鍛えられた肉体と相まって天使のそれだった。瀟洒な金髪が、新月の晩だというのに輝いていた。身なりこそ汚れた布を一枚まとっているだけだったが、青い血の生まれであることは誰が見ても明らかだった。

「あるいは、ここが天界って奴かね」

そう思わせる存在感が、目の前の人間にはあった。

「怪我をしているのか、話すな、今手当てをする」

青年はそういうとしゃがみ込んで、血だまりの中に膝をついた。

「いけねえぜ、お貴族様が平民の血を浴びちゃ」

「血に青いも赤いも無い。気をしっかり保て」

目を見る。本気だ。

「あんた、名前は？」

「フリードリヒ・フォン・ロートリンゲン」

若者は、とんでもない名前を口にした。

「あんた、ロートリンゲン王家の遺児か」

まさか、幕引き前にそんな希少なものが見れるとは。観客としては随分な幸運だ。だが、これでニールスも無駄にはならん。

「あんたがロートリンゲン家の人間なら言うておくことがある。ステラ姫が、このビュッサンの城に囚われている」

「なんと」

驚いた様子だ。そうだろうな。ロートリンゲン家の人間はこの十年、姫の身柄が最重要の関心事だったはずだ。

「そなたの働き大儀である」

彼は深々と頭を下げた。金色の髪の毛の先が、血に濡れてその輝きを失った。

「いや、礼なら我が友ニールスへ。私は奴の、虫けらの誇りを見せつけただけです」

「そうか、ではその者に最大の礼を。ところで、其方の名は？」

俺のような者に名を聞くとは、貴族としては甘い男だな。答えてやりたいところだが、もう時間切れだ。やるべきこともすべてやったし、俺も天界で友と一杯やるとしよう。

俺は瞼を閉じ、薄れていく意識に身を任せた。

そうして、目の前の男は息絶えた。

「名も知れぬ旅の者よ。葬りたいところであるが、私は其方の宗派を知らぬ。ゆえに弔わぬが、祈りは捧げる。二つ無礼を働くが、許せよ」

目を瞑り、掌を合わせて祈る。彼の信じるものが、私のそれと同じとは限らないが、せめて我らが神の恩寵が、この善き心の持ち主に与えられますように。

祈り終えたら走る。あの者は傷を負っていた。あれは獣から受けるようなものではない。剣に刻まれていた紋章は公国のものだった。であれば、公国の脱走兵狩り部隊が迫っているということだ。

大地を蹴って、一陣の風となる。吹き抜けていった先に、ぼつぼつと家々が立ち並んでいた。我らが村であった。

「フリードリヒ様、どうなさいました」

女が、亜麻色の髪を揺らしながら駆け寄ってくる。矮躯に似合わぬ韋駄天は、エリーゼのものだ。

「火急である。お前は村長の元へ行き、公国の手勢が迫っていると伝えよ。しかる後、村長の指示に従って、身を隠せ」

「仰せのままに」

彼女は端正な顔立ちを凜と引き締め、頷いた。

走っているうちに村の中心である教会まで来ていた。その手前を右に曲がり、六軒目の家に入る。

「爺やおるか」

そこは我が住処であった。

「ここに」

藁も何も敷いていない、土くれだけの床の上に爺やは座っていた。顔中に皺が入り、体は猫のものである。体中の体毛すべてが綿毛となっているこの老人は、我が唯一の家臣であった。

「二つ話す。一つは、公国が迫っている」

「公国が。この隠し村が見つかったのですかな」

老人は皺だらけの臉を押し開けて、顔全体を紅潮させた。老爺がこのような顔をするところを見るのは、生を受けて初めてのことだ。

「いや、逃亡者狩りだ。ただ、近い。発見は免れん」

「左様でございますか。して、二つとは」

「ステラ姫が、ビュッサンの城に囚われている」

「確かでございますか、それは」

声が重くなる。それも無理なき事、姫の身は、王家とその臣の皆が案じていたことだ。

「逃亡者から聞いたのだ。罠であるかもしれないが、姫を取り返す他に道はない」

「私は、フリードリヒ様を後継に、とも思ったのですがな」

持っていた松明の炎が揺らめいた。

「私は側室の子。亡国を立て直すには、正統の血が必要だろう」

「左様ですな」

火はわずかの間揺らめき続け、また勢い良く燃え上がった。

「では私は村長と話をしまいいります。フリードリヒ様は、村外れのドミニクの家までお行きください」
「分かった」

二人して家を出た。

「では、ご武運を」

爺やは微笑んで、駆け出した。あの笑みは、私が幼子であった頃から変わらぬものだった。

ドミニクの家へ行くには村の外れから、山の方へ村一つ分登っていかねばならなかった。偏屈な老人で、自分は村人に嫌われて敵わないからと言って、このような僻地に籠っているのだった。実際には、村の者は皆、宴や祭りの場に出てこないことを寂しがりこそすれ、彼には好感を持っていた。

その家は、茂みの陰の中に隠してあった。人目を避ける彼の姿を、竹まいの中にもみることができた。

「ドミニク、入るぞ」

扉を開け、中に入る。と同時に、鼻腔を葉草の香りがくすぐった。壁には干し草や木の実が幾束も吊るしてある。そういえば、彼は製菓の名手であった。

「これはこれは、フリードリヒ様。お越しになるのはわかっておりました」

杖に体を持たれ掛けながら、ドミニクは返事をした。年齢は爺やより上だというのだが、老人らしいのはその髪の色ばかりで、肌には皺ひとつなく、体は引き締まってまっすぐだった。今も目を閉じているが、これは彼が盲人だからである。しかし、目が見えていても難しいことを、彼はすらすらとこなすことができた。

「失礼、不気味でしたかな」

「何度も言わせるな。其方を不気味に思う者は、この村にはおらぬ」

彼は盲人とは思えぬ働きをしたり、時々不思議な直感を働かせることがある。それがしばしば妬みや嫉み、あるいは解せぬ者の恐れを受けることがあったのだろう。だが、この村人は皆、そのために他者を傷つけることの無い者達だ。それは黄金であり、だからこそ彼にも分かち合いたい。

「これは失敬。さて、用向きについて話しますかな。何でも公国が迫っているとか」

さっそく、彼はその直感を働かせていた。

「其方は、私の頭の中を覗き込んでいるのかな」

「当たらずとも遠からずですな」

冗談でも魔力のこもった言葉として聞かせる力が、彼にはあった。

「ですが本題は二つ目でしょう。ステラ姫がとうとう見つかった」

全身の肌が泡立った。血の巡りが加速していき、心臓がドクリと脈打つ。目の前の老人は、一体どこまで見通しているのだろうか。彼の開いていない瞳が、狼の牙を私に突き立てる様を幻視し、震えた。

「左様だ、其方に隠しごとは出来ぬな」

「そう恐れずともよろしい。私はフリードリヒ様を取って食ったりは致しませんよ」

完敗だ。虚勢すら見破られるか。

「分かっているなら話が早い。姫を取り返すには力がある。其方の力を貸してほしい」
頭を下げる。

「おやめください。高貴なる身分の方が、私などに頭を下げますな」

盲人だというのに、私が頭を下げたことを察したらしい。

「では、力を貸してくれるか」

「私ごとき非力な老人に、何を求めですかな」

「とぼけずともよい。其方は、魔法使いなのであろう」

干し草を吊るしていた縄が、弾けて切れた。空間全体を静寂が包み込む。

「おわかりになりましたか」

老爺の声は、囚人のそれであった。

「そう考えなければ不可思議な点が多すぎるし、第一、この時に爺やが其方のところへ行くように言ったのだ。その程度の能力は持っているのが自然だ」

「ロートリンゲン家の人間には、隠し事ができませぬな」

ここへ来て初めて、彼の鷹揚な態度が変化していた。

「フリードリヒ様は、魔法を使う人間を見たことがおありで？」

「いやないが」

「では、どうして魔法を信じられるのです。世界の理から外れた現象を」

「どうやら私は試されているらしい。彼の見えざる瞳が、我が心の隅々まで覗き込んでいるだろうということは、疑いようもなかった。

「自らの知覚の限界が世界の限界ではない。寧ろ見聞きしたことも無い事柄ばかりが溢れているのだ。であるならば、私にとって魔法の存在は、海というものがこの世にあることと同じくらい確かだ」

「なるほど」

彼は恭しく頷いた。

「同じ家のお方に二度仕えるというのも奇縁なことだが、よろしいでしょう。このドミニク、誠心誠意をもってフリードリヒ様の杖となりました」

彼は傅き、私の手の甲に口づけをした。

「同じ家に二度、ということは、其方が」

「ええ、シリウス様の師は私です」

シリウス。

「兄上が仇討ちの旅に出てから七年も過ぎたのか」

シリウス・フォン・ロートリンゲン。唯一同じ母から生まれた兄弟で、優しい人だった。時折兄上のことを思い起こすのだが、怒りや悲しみに暮れる姿を浮かんだことはない。城の庭で、幼い私とおいかっけこして笑っている。そんな光景しか浮かばない人だった。

「従者としてエミールを伴って、二人ともあなたから魔法を学んだのだな」

シリウスは死んだ、と爺やから聞かされた。恐らくそれを知れたのもこのドミニクのためだろう。エミールは生きているのだろうか。勇敢で、実直で、頑固で、いつも喧嘩ばかりしていた。だが、私の志に最も近かった男。

「エミールは公国に寝返りました。とある男によって」

「馬鹿な、エミールだぞ」

奴は民の安寧を何よりも重んじてきた男だ。それが何故、侵略を働く公国に与するのか。

「心を惑わされたのですよ。彼を拐かした男は魔法を使うのです。言葉。人の野心と猜疑心を際限なく増幅させる、この世で最も恐ろしい魔法。あ奴めはそれを使いエミールを巻き取り、シリウス様を殺したのです」

「その者の名は」

「今はフレレーと名乗って、この旧王国領の新領主に収まっておるようです」

フレレー。兄と友を害した男で、王国を事実支配下におさめている男。

「その男を倒せば、王国を公国から取り戻せるのだな」

「左様でございますが、それを成すには、まず力をつけねばなりません」

「分かっている。まずは村を守り、しかる後に姫を取り返して修練を積む。フレレーと雌雄を決するのはその後だ」

言って、外へ出る。そう、まずは村の皆を守らなくては。

広がっていたのは、信じられない光景だった。村からは火柱が噴き上がり、辺り一面は地獄と化していた。

「答えよドミニク。何故だ。叫び声も、火の手の上がる音も私は聞いていない。第一、其方どこへ入っ
てからまだ数分と経っていない。だというのに何故、このような有様になる」

「詫びねばならぬことがあります。あの場所には魔法をかけておるのです。あの内の一分は、外での
半刻に相当するようにしてあったのです」

彼は冷然と言い捨てた。

「何故そのような事をした」

「魔法使いの気配を数人分、公国の軍勢の中に感じたのです。かような状況下で村に戻れば、フリード
リヒ様はこの老人と共にあの世逝きであったでしょうな」

その声はどこまでも冷たい。凍土に吹く北風だった。

「だが、そのために民を見捨てるなど
できないと言いかけた時、

「いい加減になさい。彼らは貴方様を匿ったその時から、今日を覚悟しておりました。命を賭してロー
トリンゲンに報いた臣を、貴方は主として否定するのですか」

杖が地面を叩く高い音が響いた。

村へ走る。ドミニクの言葉は正論だ。だからこそ我慢できない。彼の言葉でも、村人の行いにでもな
く、それを正しいと看過させる、己の弱さに腹が立つ。

辿り着いた先は、もはや面影を残していなかった。家々は燃え盛り、街道は村人の死体と血とで彩ら
れている。

駆ける。誰か生き残っていないか。望んでも無駄だ。行けば行くほど見知った顔の死体と出会う。マー
カス爺さんは、首と胸が泣き別れ。ローゼマリーは、乳房を切り取られて啞えさせられている。ルーク
坊やは、引きずり出された腸管で縛り首に。

「誰か、誰か生き残りはいないのか」

「う」

呻き声が出た。か細いが、確かな人間の声が上がっていた。

「誰か、生きているのだな」

その声を辿る。声の主はすぐそこで横たわっていた。生気が失われ、血と吐瀉物にまみれていたが、その垂麻色の髪は何人からとも彼女を隔てていた。

「エリーゼ、生きていたのか」

「フリードリヒ様、なぜ、ここへ」

瞳はどこか遠くを見ているようだった。恐らく、もう目も見えていないのだろう。ただ、声と気配で私を察したのだ。

「もう話すな。今助ける」

「公国は」

「退いた。だから、安心して力を抜け」

言うと、彼女は笑みを浮かべた。

「言い遣す、ことが」

「後で幾らでも聞く。今は気をしっかり持て」

彼女は首を横へ振った。

「女が、心細け、れば、抱き、しめ、て、口づ、けを。ねえやの、さいごのいつけ」

抱きかかえて、口づけをする。腕の中のもの、凍っていくのが分かる。エリーゼは息絶えたのだ。疾走する。

「爺や、じいやはおらぬか」

村は壊滅した。こうなっては爺やと合流し、一刻も早くステラ姫救出に向かわねばならない。

しばらく走って、爺やを見つけることができた。

「大儀であった」

爺やは胸を剣で貫かれ、民家の外壁に打ち付けられていた。その体からは夥しい糞尿と血液が垂れ流されていたが、老人の顔は晴れやかだった。

「済まぬが、借り受ける」

爺やから剣を引き抜く。支えを失った身体はそのまま落下し、血だまりの中につつ伏せの格好となった。

「其方らは強き臣であった。ならば、私もそれに見合う強き主となろう」

いつまでも感傷には浸れない。まだ近くに公国軍が潜んでいるかもしれない以上、一刻も早くこの場を去るべきだろう。

「おい、こっちに生き残りがいるぞ」

が、遅かった。一人の公国兵が、声を張り上げて後方に報告している。

「本当だろうなオイゲン。貴様の報告はいつも正確さに欠ける」

その声と呼ばれて、もう一人やって来ていた。

「ハインツ、手前みたいな奴を何とか知ってるか、臆病者さ。そんな奴がいるから残敵掃討なんぞを任される。な、マーク」

「お前ら、真面目にやれよ。ここの連中は手ごわいぞ」

奥にはまた別の男もいるようである。

「ん、どうやら真のようだな」

「手傷を負っていない。気を引き締めろよ」

後から来た二名は私を認めると、後ろに下がって剣を構えた。

「お前さん、名は」

先頭の男が呼びかける。痩せていて力の無さそうに見えるが、視線はこちらに向けたまま動かない。戦える兵だということは瞭然であった。

「フリードリヒ」

「ふーん。お前、平民って感じじゃねえ。お前さんの首を取れば、俺たち三人めでたく騎士の仲間入りかもな」

男は剣を抜き、下段に構えた。

「無益な殺生はせぬ。公国へ帰れ」

「いいのかフリードリヒ。俺の下で亜麻色の髪の女が泣いてたぜ。フリードリヒ、フリードリヒってな」
敵へ向かって跳ぶ。

「あらよっと」

奴は下段の剣をそのまま横に薙いだ。その下を潜って避ける。

「やッ」

真上に剣を振り上げ、相手の腕を切り飛ばす。

「がッ」

「はッ」

小手先で剣を半回転させ、そのまま喉を刺し貫く。血液の噴水と共に、オイゲンと呼ばれていた男は物言わぬ肉塊と化した。

「オイゲンをやったのか、悪魔め」

ハインツと呼ばれていた兵が、こちらに跳んでくる。獲物は上段に構えられていた。

「くッ」

「ぬッ」

振り下ろされる刃を剣で受け止める。火花が散る。敵を見る。相手は大柄で、その肉体は鍛え上げられている。力押しでは分が悪い。

「せいッ」

腹を蹴って吹き飛ばす。そこまでの間合いは取れないが、切り合いに持ち込めばこちらが優位。

踏み出す。

「なッ」

が、ここで不覚を取った。踏み出した先の足場は、血でぬかるんで泥のようになっていた。滑って転び、尻餅をついた。

それは致命的だった。

「貰った」

敵の剣が振り下ろされる。防御は間に合わない。もはや死を待つのみである。その時、

「ファイエル」

赤い閃光が走り、敵の男は勢い良く燃え上がった。

「ドミニク」

「やれやれ、まったく世話の焼ける主ですな」

ドミニクが追いついてくれたようだ。

「助かった、礼を言う」

「それより、どうするのですかな」

彼が杖で指した方向には、うづくまる若い兵士の姿があった。

「殺さないでくれ、俺には家族がいるんだ。父さんと母さんと、い、妹がいて」

剣を振り上げて構える。

「やめろ、殺すな。俺には家族がいるんだ、家族が」

若者と目を合わせる。怯え切った目は、しかし決定的な輝きを失っていないようだった。

「行け、私の気が変わらぬ内に」

「あ、ありがとよ」

結局、最後の一人は逃がしてやった。

村を見る。荒れ果てて、燃え盛り、在りし日を忘れてしまったようなその地の光景を。

「フリードリヒ様」

呼びかける声は、心なしか柔らかい。

「ドミニク、私は強くなれるか」

「与える喜びと失う悲しみを知る者こそ、強き者です」

鴉が鳴いた。陽はまだ昇って来ぬようだった。

つづく。

未熟の果実／小笠生依

未熟の果実 / 小笠生依

未熟の果実

小笠生依

ファーストキスの味なんて、もう覚えていない。触れ合った時の彼の吐息と唇を強引に押し付けて当たる前歯の感触が、ただぼんやりと口元に残っているだけだった。

私は、異性に対して好意を抱いてこなかった。きっと、両親のせいだ。喧嘩三昧とかそういうことではない。むしろ、そっちの方が良かったかもしれない。

同じ屋根の下に住む私たち家族は、赤の他人同士のようであった。私の前で会話のない両親、私の前で時折父の愚痴を漏らす陰湿な母、娘に対して何か教育を施すわけでもなくただお金を稼いでくるだけのおじさんと化した父。

ああ、愛なんてこんな粗末なものなのかと私は年若しにして、理想を打ち砕いた。そのくせ母は「あんたも人並みに恋愛をやって家族を作りなさい」なんて言うのが、これまた滑稽だった。「娘である私に、あんな家族像を見せておいて何を言ってるんだ」と吐き捨てたいと思ったが、根っからの臆病のせいで、それはできなかった。

そんな私にも彼はこれまで二度出来た。一人目は中学生の頃、何となくの雰囲気ですり合ってみる。「くらいの軽いノリで始まったことなのだが、早々に「別に好きじゃなかった」と切り捨てられた。人生が変わる予感がして浮かれていた私が馬鹿らしく思えてきた。それ以来、元来の引っ込み思案も相まって、私は人との関わりを恐れるようになった。

高校に入って以来、私はクラスの輪に入ることはなかった。中学からの友達がいる別クラスに入り浸り、体育祭や学外行事は積極的に休んだ。そんな私を見かねた担任から何度も面談の場を持ちかけられ、私をクラスの一員にさせてやろうと尽力してくれた。でも、私はそれを拒んだ。どうせ誰も私を受け入れてくれない。そんな根拠の無い確信があった。

三年生になっても、私のクラスでのスタンスは変わらなかった。人との時間を削り、自由な時間を過ごしてきたおかげで、私は学力もそこに付き、現役は安泰と言えるところまで来ていた。

私が二人目の彼氏になる男と出会ったのは、その年の夏のことだった。あいにく塾が休みの日で、学校で勉強しようと普段の教室に来たところ、男女数名が大きな木版を前に何か作業をしているところだっ

た。そういえば、夏休み明けの文化祭に向けてクラス制作の展示品を作ると言っていたな。受験生にとって最も大切な夏休みをそんなものに費やすなんて、苦勞なものだと思った。

「あのー、大川さんだよな？ 勉強してるところ申し訳ないんだけど、こっち人手が足りなくてさー。少し手伝ってくれない？」

突然、一人の男子が私に声をかけてきた。確か名前は本村とか言ったはず。「勉強するんで」と一言断ろうと思ったが、対人慣れしていない私には、そんなことは言えなかった。

本村くんはよく話す人だった。私だけでなく他の人にも話を振って、ちゃんとそれに耳を傾けてリアクションする姿は嫌いじゃなかった。

帰り際、そそくさと教室を後にしようとする私に本村くんは一言、

「明日からもここでやってるからさ、勉強の息抜きついでに来てよ」

と笑いながら私に伝えた。その時、胸に残った感触の正体が私には分からなかった。

次の日、教室に入るとクラスメイトは本村くん含め3人しかいなかった。

「あつ、大川さん来てくれたんだ！ ありがとう、人が集まらなくて困ってたんだよな」

そんなこと言われたら、断ることもできないじゃないかと思っただが、クラスの人たちに迎え入れられる状況に喜びを覚えていることも否定できなかった。

それから、私は毎日教室に通い続けた。本村くんたち三人はいつもいるメンバーになって、他のクラスメイトは代わる代わる顔を出すくらいになった。だから私たち四人はそだけで独自のグループを作るようになった。制作だけじゃなく勉強もみんなでしたし、雑談もしたりした。後から知ったことだが、本村くんは普段私の斜め後ろの席だったらしい。ここで会って話すまで、そのことにすら気づけなかったなんて、いかに自分が人との関わりを絶っていたかがよく分かった。

その日は私と本村くんだけだった。他の二人は用事があったて来れないらしく、作業は休みにして勉強だけをするにしていた。ふとした流れで恋バナが始まった。

「俺、前付き合ってた彼女がいてね……」

何気なく過去を振り返る本村くんの隣で、心がギュッと締め付けられる感覚があった。別に他人の、もう終わった恋なのだから、どうでもいい話なのだ。なのに、そんな話を聞くのが辛かった。それが嫉妬

や焦りであるということを、私はその時気づいていなかった。

それは雨の日だった。普段自転車で通学している本村くんは、珍しく電車で帰ることにしたようで、私は初めて彼と帰ることになった。以来、特に何か言うでもなく、2人で帰ることが自然になっていった。2人とも駅前の別の塾に通っていたこともあって、そこまで本村くんが、自転車を押しながら二人で歩くようになった。本村くんは、相変わらず人の話をよく聞く人で、きつと私でない誰かとうなって同じ態度なはずだ。だけど、その帰りの時間だけは彼を自分だけのものにできるのが少し嬉しかった。

夏休みも終わり、通常の学校生活が始まった。私たちは一緒にいることが多かった。教室で勉強をし、閉まる時間に帰り、一緒に歩いて帰る。半年前まではクラスの誰かとうなるだなんて、想像もつかなかった。

帰り道の途中、公園で休もうと本村くんが提案した。その日の彼はいつになくソワソワした様子だった。しばらくベンチで休んで、行こうかと立ち上がったときに彼は唐突にこちらを見ていった。

「好きです」

それは、私が家族にも昔の恋人にも言われたことなかった言葉だった。その時になってようやく気づいた。愛を冷笑する私が、本当は愛を求めていたことを。それを伝えてくれるのが本村くん。本当に良かった。私は静かに頷いた。

退屈に思えた私の日々は、どんどん色がついていくようだった。私を肯定してくれる存在がいると分かっているだけで、私は朝起きるのが楽しくなった。付き合いの長い友達からも「光^み希^き、明るくなったよね」と言われるようになった。

付き合ってから分かったことだが、本村くんはスキンシップを好む人だった。初めのうちこそ緊張していたものの、徐々に頻度が増えるようになった。私は別に嫌ではなかった。肌を介して伝わってくる彼の体温が心地良かった。

ファーストキスは放課後の教室だった。他の学生が帰り、人気が無くなった場所で私たちは一つになった。私を抱擁する本村くんの腕の締めまりが少し強くなった。それは一瞬にして永遠のような幸せな時間だった。口を離し見つめ合っていると、本村くんが恥ずかしそうに笑った。その笑顔を独り占めしたくて、私はもう一度彼の口に近づいた。

それから私たちは毎日人目につかないところになった。と言っても接吻と抱擁に留まるところだった。その先に進む勇氣は私たちにはまだなかった。本村くんは以前にも増して、それを求めるようになった。彼のその気持ちは分かる。相手との触れ合いは葉のようなもので、触れてない時の方が不安

で押しつぶされそうだった。

しかし、同時に私は本村くんにとって、そういう肉欲の対象でしかないのではないかと思い始めた。究極的に相手は誰でも良くて、たまたま気が合った私だったのではないかと思った。だが、本村くんをそういう疑念の目で見るのはとても心苦しいことだった。だから、そういう考えの柵から解放されるためにも、私も目先の欲に溺れることにした。

ある時から、本村くんは人との関わりを避けるようになった。休み時間ごとにどこかに出ていき、放課後も真っ先に帰るようになった。私はそこに過去の自分が見えた。そうか、本村くんも一緒だったんだ。彼が人に見せる優しさは、自己防衛のためであったのだと、思えてきた。

それでも何とか彼を引き留めて、二人きりの時間を作るようにはした。しかし、彼はどこことなく元気がないというか、出会う前くらいによそよそしさを見せるようになった。

その日も私たちは人目を憚って接吻をした。初めての頃の面影はない、ただの欲のぶつけ合いのような触れ合いだった。

数日後、私は本村くんに別れを切り出された。

「何かさ、もう分からなくなったんだ」

告白されたのと、同じ公園で私たちは向かい合っている。

「人を好きになることができなくなった」

本村くんは自分自身に言い聞かせるようにそう言ってきた。きつと、しばらく前から私に対する愛は冷めていたのだろう。十数年貯めてきた性欲の吐き出しだけで何とか繋ぎ留められていたのかもしれない。これが他の誰かなら、呼びとめる一言を出せたのかもしれないが、私の中の臆病は無情にもそれを妨げた。

それから私たちは別の大学に進んだ。元々別の志望大学だったのが、めでたく二人ともそこに受かり、私たちは完全に離れ離れになった。彼は同窓会にも顔を出さなかった。もう私の人生に、彼が現れることがないのだと確信した。

今はもう彼の顔も声も忘れかけている。脳裏に浮かぶ蜃気楼は、私の春の終わりと同時に消えかけているようだった。ただ、あの日交わした不器用なファーストキスの前歯の感触だけが、私の中に最後まで残っていた。

冷笑
／
杜若

冷笑／杜若

冷笑

杜若

ひゅうひゅうと吹き荒れる透明な刃で肌身を切り裂かれながら、森の中で足場の悪い凍った道をザクザクと踏み進めていく。手の先はどこかに置いてきてしまった感じがする。ポケットの中に眠るほのかに温かい希望の灯りを握りしめて、私は約束の場所へと向かう。それは、赤き月の下に佇むと言われる都市伝説の店、満月亭だ。

きっかけは、一人の少年を見かけたことであった。

オカルト雑誌の記者を務める私は、直感に訴えかけるネタに飢えていた。科学と技術の発展によってオカルトネタは冷笑される対象となり、未開拓の浪漫はどんどん失われてしまった。ミステリーサークルは人為的な悪戯と証明されたり、スプーンを曲げる超能力はただの手法であったことが暴かれたり、人間は全てに合理的な答えを創造し続けている。リスクよりも安牌な選択肢を求め、ただ時代の流れに逆らおうともしない意志を持たない大衆によって形成されたこの社会は、よもや政府の陰謀かとも言うべき由々しき事態であるが、これを唱えれば忽ち陰謀論者とレッテルを張られて一生笑いものになってしまう。どうにかしてこの浪漫の無い現代社会に、一筋の光を見つきたい。そう思い日夜必死に町を徘徊していた私に、神様は希望の光を与えてくれた。

歳は高校生あたりと見える、少し血色の悪いやつれた少年が、立ち入り禁止のテープが張られた山奥に何食わぬ顔で足を踏み入っていたのだ。私はとっさに止めようと思ったが、その瞬間の光景を私は今でも鮮明に覚えている。

消えたのだ。体がテープにふれた瞬間、彼の体はしゅん、と消えたのだ。見間違えかと思った。しかし、頬をつねると皮膚の内側から強めの反発を食らったので、安堵した私はそのテープに恐る恐る、触れた。だが、私の体には何も変化はなかった。何故。やはり少年は私が創り出したイマジナリーな存在であったのか。結局その日、数時間その場に張りこんだが少年の姿は現れず、夜明けが近づいてきた為、私とはとぼとぼと自宅に帰った。

翌朝早朝。某N大学図書館3階。私は郷土資料、とりわけあの山、新芙蓉山の伝承について片っ端から調べ上げた。机には次々と表紙が剥げた本が積み上がり、時々目がしらをもみほぐしながら、ひたすら紙をめくり続けた。

どれだけ読みふけただろうか。閉館30分前のアナウンスが流れ、学生たちが帰路に就く中、私はま

だ紙をめくり続けていた。もう本の冊数は数えるのやめて、ひたすら文字だけを追い続けた。しかし目的の情報は一向に見つからない。今日は諦めようとペットボトルに入ったコーヒーを飲んだその時。パタッ。

ある見開き一頁が開かれ、そこには大きな満月と共に新芙蓉山と書かれた山、そして建物らしき絵と共に、しゃれこうべを持った妖艶な美青年の絵が描かれていた。埃臭い匂いが脳に強烈なパルスを送り付けるが、私は関係なしにその本を眼前に持ってきて、一字一字舐めるかのように読み込んだ。

「●捌年睦月某日我遂ニ極楽浄土ヲ見ツケタリ。之即チ天下絶品ノ御餐ナリ。黒キ月ト白キ月重ナル時、幾万ノ民二道ハ開カレタリ。其ノ道ノ先ニ二店在リケリ。中ニタグイマレナル貌モツ男在リケリ。男曰ク、店ノ名ヲ満月亭ト言フナリ。但シ、男曰ク、之本来通ジ…」

この先も文字が書いてあったが生憎閉館時間は迫っている。借りる時間もなかったので仕方なく図書館を後にした。サラッと目を通したただけなので、記録してあるのは今の部分のみである。しかし大いに収穫を得ることは出来た。天下絶品の飯が食べれる店、満月亭。一体どんな料理が出てくるのだろうか。竜宮城で出されたご馳走は絵にも描けない美味しさと言うが、この満月亭もそうなのだろうか。

家に帰った私は、殴り書きで書き写した文面とにらめっこを繰り返していた。黒き月と白き月。月は黄色く見えるはずだからいったい何を指しているのだろうか。そしてそれが重なる時とは、いや、そもそも月は一つしかないのに何故二つも記述があるのだろうか。古の記録だから何か間違っている可能性が大いにありそうだが。

いくら考えても納得がいく答えが思い浮かばなかった私は、知り合いの学者である月田壮介に解読を依頼した。なんでも彼はタイムマシンから乗って来た別世界人らしく、その証拠に、現代の技術では到底製造不可能な、人間の心を持った少女型ロボット「アスピス」（本来はプログラムに過ぎなかったが、ある時感情を司る神経回路がショートし調査を行った所、神経回路が自立して動作を行い始めたという）を連れてくる。そんな彼は、かつて少年時代に現職の総理大臣を倒すために暗号解読を行った（オカルト好きの私でも何を言っているのかさっぱり分からない）というので、今回依頼を行った。

翌日。朝。

ブルルル。

「もしもし」

「どうも。月田です。暗号の件、解き終わったのでご連絡を」

「ええ。さてさてそれはどんなことでしたかね」

「日食」

「日食？ 今、あの？」

「ええ。あの日食です。白き月は太陽、黒き月は影になっている月だったようです」

「はあ、成程。となると日食の日に新芙蓉山に登ればいい、と。いやぁありがとうございますございましたお陰様で何とか」

「：私が電話させていただいたのはもう一つ理由がありましたね」

「と、いいですよ」

「日食の日に、新芙蓉山へ上るのは、やめた方がいい」

「はい？ なぁに言ってるんですか、ははっ、そりゃあないでしょう」

「貴方は、我が国における日食がどういふものか、ご存じないのですか」

「ご存じないですね」

「儀式が行われ、光は遮られ、帝は慎まれた、其れが日食」

「何が言いたいんですか」

「馬鹿な真似はおよしなさい。月は、静かだが、じっと貴方の命を狙っているのです」

「あのねえ、こちらオカルト雑誌の記者やらしてもらってるんですよ、上等ってのもんです、お気遣いありがとうございます、其れではまた」

ガチャッ。

テレビをつける。どこのテレビ局も、明日の日食の話題で持ち切りだった。

翌日。日食二〇分前。新芙蓉山。

明け方に日食が起こるとの予想を見た私は、新芙蓉山の立ち入り禁止テープが張り巡らされた近くのベンチに座っていた。雪国の真冬の寒さというものは凄まじく、日が差しているのに冷気は冷たいままである。皮膚や血管が収縮しているのがしつかりと感じ取れる。雪が沢山振ったのだろうか、辺り一面銀世界で地面は全く見えない。しつかり着込んで時計をちらちらとみる私の顔に、風で運ばれてきた空から雲の贈り物がふわりとぶつかる。これがクリスマスならばとてもロマンティックでセンチメンタルに感じるのだろうか、真っ暗でしんと静まり返ったここではかえって不気味に感じる。不意に体がブルブルと震え、背中を誰かに撫でられた感触がしたが、周りを見回しても雪に覆われた木々が佇んでいるだけであった。ぱっと時計を見る。日食まであと三秒、二秒、一秒。零。

空を見上げる。「黒き月」が「白き月」に近づいていく。うっすらと辺りを照らしていた光が失われていく。そして、重なる。

「黒き月」と「白き月」は、今、重なり、光の環と変貌した。

途端、環は回り、回り、回って、光線を放つ。

光線は山を照らす。

山は、霧に包まれた。

私は息を飲むしかなかった。よもや、この現代にこんな超常現象が存在するとは。やはり、浪漫は、あったのだ。私が求めていたユートピアは、そこにあったのだ。ひゅうひゅうと吹き荒れる透明な刃で肌身を切り裂かれながら、私は森の中で足場の悪い凍った道をザクザクと踏み進めていく。吹雪の勢いのお陰で顔を上にあげることが出来ない。しかし私は諦めない。ユートピアを目指して進み続ける。

どれだけ歩いただろうか。吹雪が収まった。店は見えるだろうか。そんな好奇心を抱きながら顔を上げた私の心は、すぐに恐怖で埋め尽くされた。

赤い。大きい。そして、赤い。空に浮かぶのは、鮮血に濡れた赤い月だった。空に浮かぶ赤き月は、洋風であり和風な雰囲気を醸し出すレストランの上に佇んでいた。恐らくあれが満月亭だろう。どうみても極楽浄土ではない。一体どこをどう見たら極楽浄土に見えるのか。これでは極楽というより、地獄、そのものだ。死というものを視覚してまじまじと見せつけられている気がする。

満月亭は目線の先にぼつんとある。しかし、遠い。かなりの距離がある。とてつもなく長い坂を上らなくてはならぬそうだ。

と、なにやら駅のようなものが見えてきた。山の中に駅とはそんな馬鹿なと思うが、赤い月がある時点で今更である。駅の構内らしき所に入ると、トンネルの奥からガタゴトと音が近づいてきて来た。

ポーツ。

間違いない。SL機関車。もうこの世に現存するものはほとんどないはずの、列車。塗装は剥げてはいないものの、ところどころ傷が目立ち、黒ずみ、錆びれている。列車の先頭から降りてきたのは、鴉の仮面をつけていた背の低い男だった。名札が胸ポケットについていて、「かむばねら」と書かれている。

「新きさらぎ駅発、満月亭行き列車、ばせり四五九号は間もなく発車いたします。ご利用になられる方はご乗車下さい。」

私はもう不安や恐怖よりも、好奇心の方が勝っていた。こんなオカルトまみれの出来事に自分が出会うことができるなんて！ ああ、生きていてよかった。心からそう思った。

私は、列車に足を踏み入れた。

その瞬間、体がふわっとして、何か大切なことを忘れた感覚を得たが、体の異常は全く無かった。中に入って驚いた。私以外にも人がいた。老人がやや少し多いが、他に若い女や子供も一定数いる。皆揃いも揃って無表情なのが気になる。私以外にこのオカルトを体験している者がいると思うとなんとも残念な気持ちになるが、同時にこれを理解して楽しめているのは私だけだと思うとなんとも得意げな感情が胸の中から湧いて出てくるのであった。他の客はどこどこ止まる別の駅で降り、終点まで乗っていたのは私だけであった。列車から降り、私はついに満月亭前へとたどり着いたのだった。

粉雪がひらりひらりと舞い落ちるなか、満月亭はただひっそりと、しかしどっしりと佇んでいた。いつの間にか鴉の少年は消えていたが、満月亭を前にしてはただの奇妙な童などどうでもよかった。絶品料理が食べられるこの店。果たしてどんな内装をしているのか。

唾をゴクリと飲みこみ、少し震える手をはたいてから、ドアを開けた。

「いらっしやいませ、ようこそ満月亭へ」

信じられなかった。否、やはりか、とも言うべきだったか。私を出迎えたのは、あの日以来行方が分かっていたいなかった、やつれた少年であった。以前よりやつれ具合がマシになっているのは、賄をきちんとも

らっているからだろう。首から下げているネームプレートには、「副店長大月文姫【おおつきあやめ】」と書かれている。そして会計場で用品の手入れを行っている、絶世の美青年とも言うべき男が店長だろうか。瑠璃色で二重の目、筋の通った高い鼻、スモーキーローズの唇、まるでビスクドールかのような美しさ。何故だろうか、彼を見ると美しいのに、悪寒のようなものを感じる。目線が合いそうになった私は慌てて彼からやつれた少年の方に向きを直して、椅子に座った。

「ご注文はいかになりますか？」

「ええとそうだなあ、んん〜どうし、よう、か、な……あれ」メニューを探してははずなのに、なぜかある一品がどんだん脳内で膨らんでくる。すぐくぼ〜っとする。何だろうかこの感覚は。まるで、体が、細胞が、熱烈にこの一品を欲してのたうち回るかのような衝動は。

「……ハン」

「あ。済みません。ちょっと、聞き取れませんでしたので、もう一度おっしゃっていただけますか？」

「…チャーハンだ、チャーハン!! ニンニクと胡椒が効いた特製チャーハン一つ!」

「チャーハンですね、かしこまりました。しばらくお待ちください。…蛭さん、特製ニンニク胡椒チャーハン一人前お願いします」

私はチャーハンを頼んだ後、心にぽっかり穴が開いてしまった。このチャーハンは思い出したくなかった味なのに、なぜ私は頼んでしまったのだろうか。考えようとしても意識がぼーっとして思考が定まらない。

「文姫、ちょっと急用をお願いできませんか。倉庫の備品と在庫の確認を。その間この方は私が接客します」
背中から先ほどの吹雪に似た凍てつきをヒリヒリと感じる。いつの間にか私の後ろには店長らしき美青年が立っていた。「分かりました。…それにしても、望月さんが接客をされるなんて珍しいですね」

「ふふ、偶には私もしてみたいものですから」

やつれている少年は奥へと消えていき、私の前には燕尾服を着こなした望月という男が現れた。目が合う。澄んだ瑠璃の瞳には一点の曇りもない。綺麗だ。いや、綺麗すぎる。綺麗すぎている。元来人の目には人間の欲望が何かしら渦巻いている。貪食、淫蕩、強欲、怒り、悲しみ、倦怠、虚栄、高慢。彼の目は、それは神が創り出した廉価の存在人間より生み出されたことだと雲の上から突きつけている、私はそう感じた。

「あなたは、まだ来るべき人ではなかった。胸が痛みます」

「何故です。ここは、日食の日に誰にでも開かれるユートピアなのです」

「ユートピアというのは、理想であるからユートピアなのです。存在してしまったら、それはユートピアではないのです」

「ではここはディストピアなんですか」

「ここには、何もありません。ただ、最後の晩餐をするだけ」

「最後の晩餐、はははご冗談を。私はここにいるじゃありませんか」

「そうです、貴方の御霊はここにいます。あなたがそうです」

「そうですよ何をおっしゃるんだか、は、はは」

「少し、私の話を聞いてくれませんか」

「はい、なんででしょうか」

「これは、『あなたの知らないおとぎ話』として」

「へえ」

一人の女の子がいました。それはそれは孤独で、親からも、周りからも、運命からも愛されていない女の子でした。病弱だったのです。生まれたその瞬間から、鎖で縛られていたのです。病弱ですから、外に出ることもできず、ただ、家の中で大人からまやかしと欺瞞にみちた将来を夢見る日々でした。

彼女には、唯一理解者がいました。それは、とても綺麗なビスクドールでした。いつもそばにいて、彼女の色々な話を唯々微笑みながら聞いていました。彼女にとって、その人形は、いつしか人形を超えた存在になっていました。

ある満月の夜でした。彼女の容態は急変しました。家には医者駆け付け、家族が見守る中、少女の意識は朦朧としていました。

死神は、気が付けばその場にいました。ぼんやりと、実体を持たず、その場に呼ばれた役割を果たそうとしました。彼女の蠟燭はあと少しで溶け切ろうとしてもですから、死神はそれを吹いて消さねばなりませんでした。彼女に近づいたとき、死神は彼女と目が合いました。その時の死神は目を持たない存在でしたから、そのようなことはあるわけなのですが、たしかに、彼女の曇りのない目は死神を捉えています。その時彼女は言いました。

「お人形さんが、迎えに来てくれた。やっぱり、あなたは私の白馬の王子だったのね。」彼女の死生観は、それはそれは非常に情緒が豊かでした。家から出られなかったわけですから、親からも自分からも童謡や物語について沢山触れたわけです。死の世界は、美しい花畑が広がり、小鳥たちは囁り、木漏れ日の差すレストランで、王子様と紅茶を飲むことが出来る。彼女には、他の人間とは違う何かがありました。彼女の想いは、恐らく神様に届いたのかもしれない。彼女の蠟燭を消し終えた死神は、彼女の家の鏡を見ました。そこには、彼女の持っていたビスクドールにとてもよく似た人間が立っていました。

以来死神は、彼女の意志を受けて、死の世界を新しく作り上げ、死者がくつろげるレストランをすることにしました。そして、その入り口には、死者を迎える窓口として、客と最後の晚餐を楽しむ喫茶店を作ることにしたのでした。

「…」

「かつては醜悪な姿に描かれ、人々から忌避され続けながらも、無慈悲に灯を消していた死神の心を動かしたのは、一人の健気な少女だったということです。死のイメージが少女の中では綺麗なお人形さんだったこと、そして、少女の想いが神様に届いたこと。それが、死神に奇跡を起こした…あまりにも奇跡的な話で信じられないと思われませんが、もし、そのようなことがあったら、それは凄く、素敵なことですよ」

「…ええ」

「でも、この話、凄く美談に聞こえるでしょうか？」

「そうじゃないんですか」

「死は、簡単に触れようとしてはいけません。死を望む先にあるのは、まごうこと無き破滅です。大衆が死を望んだ時、死もこちらを覗いてきます。どうしても逃れられない旅路の終着点を逃れようとしても無駄ですが、だからといって先を急いでもいけません。急いで仕事を仕損じますから」

「はあ」

「……どこかの世界では、自らの命を犠牲に、絶対に逃れられなかった破滅の運命を変えた少年もいると聞きました。その魂は冥界と現世の門を封じる鎖となつていますが、大衆が再び破滅を願うなら、その鎖は壊れてしまうでしょう」

「私たちは、生きねば。ですかね」

「ええ」

「お待ちせしました。特製チャーハンです」

望月の話が終わった後、私の眼前に大蒜と胡椒の香りが漂うチャーハンが差し出された。このチャーハンは、私が最も好きで、最も嫌いな料理だ。理由は明確である。酷く学校でいじめられている私を勇気づけようと、今は亡き母親が作ってくれていたチャーハンだからである。

私がオカルト雑誌を教室内で読んでいれば、たちまち笑いものにされ雑誌を取り上げられ、取り返そうとするといじめっ子たちは私を突き飛ばし、雑誌を破り捨てて冷笑するばかりだった。いい年してそんなものを信じているのかと、空想を抱きすぎている、夢見がちすぎだと。そんな私を母親だけは応援してくれた。まだ見ぬ世界があると、浪漫がこの世界には眠っていると、母親は同情してくれた。希死念慮を抱いたこともあったが、どうしても母親の顔が浮かんできて、決断できなかった。だからこそ、このチャーハンは、生きるきっかけになった料理であり、死をフラッシュバックさせる料理なのだ。だから、もし金輪際料理が食べられないのであれば、私は恐らくこのチャーハンを注文していたはずだ。

「いただきます」

「…」

無心でチャーハンを味わっていた。チャーハンの米粒を噛み締めた瞬間に、少年時代に通っていたアーケード街の並び、社会人になってから上司にこき使われて忙しかった日々、そしていつまでも追い続けていたオカルト雑誌の記事、生きてきた中で見てきたあらゆる光景が、蘇ってきた。すごい勢いで流れていく。

これが、走馬灯か。

「あなたは、まだここに来るべきではなかった」望月は私をじっと見つめる。

「この山は、日食の日のみ、死者以外にも道が開かれます。ですが、死者以外には体への負担が大きく、生者を入り込ませないために見た目も地獄のようにおどろおどしいようにします。それでも、貴方はこ

の山に入ってきてしまった。それがいけなかった。貴方の体は、山に入って限界を迎えてしまったのです。死者のみを迎えるあの列車があなたの前に現れたのも、そういうことです」

「私は、もう」

私がそう項垂れると、望月はチャーハンを食べ終えた食器を片付けて、私の前に来た。

「…本来、ここには死者以外は来てはいけません。貴方は、謂わば招かれざる客です。そんなお客様には、お帰りになって戴く必要があります。こちらへ」

私は望月に連れられて、店の奥へと連れられた。彼の後ろを歩くと、幻惑させるかのような甘い香りが鼻腔を埋め尽くした。

ドアを開けると、床には大きな魔法陣がかかれ、蠟燭が間隔をあけて置かれている。非常に幻想的で、呪術的な雰囲気醸し出している。

「あなたには、確認しなければなりません」望月は黒のジャケットを脱ぐと丁寧に畳み、少し黄ばんでいる机の上に置いた。

途端、望月の体が青い光に包まれたかと思うと、異形の怪物に姿を変えた。顔は羊の骨に変形し赤く目が光っている。体は人間の体のようで白いシャツに黒いズボンを履いているが、手足は獣のようになり、皮膚も紺青と化した。後ろには、刃先が光る大きな鎌を背負っている。

「貴方を現世へ送ることは可能です。ですが、もし現世に蘇れば、今回のような安らぎの死を迎えることはできなくなります。生きる辛さを、十分に味わうこととなります。それでも、あなたは生きることを選ぶのですか？」

声は、あの冷たいようで、包み込む温かさを感じる望月のままだった。

「…もし死ぬことを選べば？」

「そうすれば、このまま貴方は安らいだまま冥界へ向かうことが出来ますが」

「…そうか」

「私は死を司る者ですが、皆に死んでほしいわけではないのです。ただ、皆に静かに蠟燭の火を消してあげたいだけなのです。」

「ないな」

「え？」

「ない。浪漫がない。このまま死んだんじゃ浪漫がない。生きてこの身がズタボロになるようなスリルが、まだ見ぬオカルトを探す浪漫が、死んだらない」

「では、生きるというのですか」

「人生は浪漫、なんでね。チャーハンを食べてて思い出した」

「…そうですか」

望月は黙った後、私を改めてみると、私の肩に手をおいた。

「私に貴方の決断を止めれる権利は、今はありません。ですから現世にお送りします。でも忘れないで。死は、私は、必ず貴方を迎えに行きますから」

「それまでに最高の土産話を用意しておけばいいんでしょう？ ははは、見てろ」

「…ふふふ、またお会いする時、楽しみにしております。それでは、また」

怪物になった望月は冷たく、でもどこか私に期待するかのよう微笑みながら、魔法陣によって私を現世へ送り返したのだった。

数か月後。

「本番5秒前！ 5, 4, 3, …。」

「はい、今週もはじまりました、『今会いたい人』のコーナー。本日は日本のオカルト研究会に新たな風穴を空けた、地獄からの生還者、半田哲郎さんにお越しただいております。半田さん、お願いします」

「ええ、宜しくお願いします」

「半田さんと言えば、元々はオカルト雑誌の記者だったそうですが、そこから研究者になるまでには大変な苦労があったとか」

「ええそうですね。いやあ私はですね、なんと一回死にかけているんですね。あれは日食の日のことでした。冬の山に登った私は遭難して凍死しかけたんですね。そして、しかこの目で地獄をみてきたんですが、まあその地獄がですね、特に酷かった。あんなもん見せられたら、死にたいなんて思う人はまずいなくなるでしょうな。簡単に死にたいなんて思うもんじゃないんです。死にかけて地獄にいた時、私の中に声が響いてきましたね。「お前は本当に死んでいいのか?」と。その時々思い出して、自分の人生に未練があったものですから、まだまだ！ と思って生きようとしたらば、目が覚めて気づくと近くの小屋にいますよ、誰かが温かい布団と食料を置いてくれたようですよ、そんなこんなで私は地獄から舞い戻ってきたわけです」

「SNSでも現在、半田さんは地獄か舞い戻って来た男として大バズりを巻き起こし、若者の間でも人気を博していますね」

「ええ、有り難いもんです」

「なにか、半田さんなりの見解はあるんでしょうか」

「浪漫ですな」

「浪漫?」

「今、皆浪漫に飢えているんです。なんでもかんでも頭でっかちに考えすぎて、冷たくあしらってる。それじゃあ、身を守っているだけで何もできませんよ。虎穴に入らずんば虎子を得ずってね。人生は浪漫ですよ。死ぬまでに、ネッシーでも、宇宙人でも、徳川埋蔵金でも、土産話を見つけてみましょうよ。一回きりの旅路、浪漫を求めていきましょや」

「半田さんらしい見解、ありがとうございます。それでは本日のコーナーは以上です。」

また来」

ピッ。

「望月さん、貴方がテレビを見るなんて珍しいですね。なにかあったんですか?」

「…いえ。何もありませんよ、文姫」

望月は温かい笑みを口元に浮かべていたのだった。

二〇二六 お題作品「映」

二〇二六 お題作品「映」

二〇二六 お題作品「映」

網目／杜若

網目／杜若

網目

杜若

「見えぬけれどもあるんだよ 見えぬものでもあるんだよ」

普段から、僕たちは何かを見ている。何も見えない瞬間はない。瞳を閉じて、終わりのない暗闇がすぐに包みこんできて、それを否が応でも見てしまう。見ていない時は、ないのである。

一人のしがたない大学生である僕、海紫電をはじめとする僕たちが見ようとするのは、何も物体だけではない。見えないものを見ようとする。例えば、最近よくSNSで目にする考察である。考察は、鑑賞する側が、自分たちに隠している、あるいは隠されていると思うものについて、ああだこうだと考え、見つけ出し、かたちを浮き彫りにさせようとする行為である。考察は、謂わば見えないものを見ようとする行為だと言えよう。尤も、見えないではなく、そもそも「もの」がない場合もざらにあるのだが、そのことに異を唱える者が最近多く見受けられ、僕は驚きを隠せない。

話を戻すと、僕たちは見えるものを見ようとするだけではなく、意味やメッセージといった見えないものも見ようとする。瞳に映るものだけでは、僕たちは形成されていないのである。

そんなことを寝巻姿でぼーっと考えていたのだが、そうなるどふと一つの疑問がその時の僕の脳内によぎった。ものを確かに僕たちは見ているが、見えるもの、見えているものを意識的には見ようとはしていない。見えているものを、そのままで見ようとしていなくて、そのものの別の姿を見ようとはしていない。ならば、見ることを意識的に働かせてみれば、何かが見えるのではないだろうか。普段見えない何か、見えるのではないだろうか。

僕の心の中に静かな、しかし確かな火が起きていた。眼鏡をクリーナーで掃除してから、その日の僕は寝たのだった。

近くのスーパーで食料品の買い出しをした傍ら、桜の花が満開だったので辺りを散策した。遠くの山々は春霞なのか薄ぼんやりと輪郭を漂わせている。大学に行くまでの道には少し木々が生い茂っているところがあった、そこには見事にピンクのアーチが出来上がっていた。桜の花弁と言うのは、非常に薄くて、ひらひらと舞い落ちる様子は紙吹雪よりも非常に耽美である。これに趣深さを感じた私たちの先祖というのは、やはりどこかで繋がっているような気がしてならなかったのである。

いつもの自分なら、というか普通ならば、恐らく木に咲き誇る桜を見て、綺麗だなとか、桜餅が食べたくなるなどか、そんなことを思うはずだった。だが今日の自分は視界がいつもより澄んで見えていた

からか、見えていないところも見えていた。足元である。

アスファルトの上にはすでに散ってしまった桜の花弁がちぎれたり、黒ずんでいたりして地面に張り付いている。上では優しく優雅に輝く桜の花弁も、地面では見るも残酷な姿になっている。たったひと時の為に時間をかけて綺麗な花弁を作り上げても、輝けるのは、ほんの一瞬。かつてある総理大臣が、パッと咲いてパッと散る、政治家もそれが美しい、と発言していたことがあった。短く、太く生きる。それが生を持つ者としての理想形ということなのだろう。

だがどうだろう。それは本当にそうなのだろうか。ずっと長い間、美しかったら、其れはそれでいいんじゃないだろうか。スポーツ選手に例えれば、死ぬまで（あるいは引退するまで）常に全盛期だと考えるならば、それはそれでいいような気がしてくる。プロ野球を長く見ていると、かつて球団を引っ張っていたスター選手が、ベテラン扱いとなるにつれて打球の速度が遅くなったり、守備の動きにポロが出たりといった衰えが顕著になっているのを見る人が多い。やはりそれはそれで残酷というか、一つの時代の終わりを感ずるものである。

恐らく衰退があるからこそ、隆盛という言葉は成り立つというか、際立つというのがそちら側の言いにくいことなんだろう。闇無くして光無し。だが、そうだとっても衰退はイイことではないのだから、ない方がいいに決まっているのではないのか、何ていう風にも僕は感じるのである。

ベンチに座りながらアイスクリームをほお張ったら、前歯に少し染みて痛くなってしまった。帰り道にもやもやしていたのは、うまく自分で答えが出せないせいか、それか知覚過敏のせいなのか、結局どっちかは分からなかった。

翌日。少し用事があって電車に乗ることになった。電車の窓の眺めというのは、いつになってもワクワクする。高校で通学で電車をよく使うようになってからは、あまり新鮮さは無くなったものの、高速で過ぎ去る街並みの景色を見ると、自分が有能になった気分になるのである。なんだか大事な作戦会議に向かっているようだ。

もう言われ過ぎていることだし、いつの話をしているのだと言われそうだが、みんな席に座ったらスマホを弄っている。別に自分は何も有害性を言おうというのではない。むしろ自分こそスマホの時間は他人より多いので注意しなければならぬのだが、何が言いたいかと言うと、この時電車の空間には乗客より多くの人間がいる、存在していることである。綺麗に拭いてある眼鏡をつけて、じっと考えてみる。スマホの中には、自分だけに見えて、非常に繋がっている空間が存在している。誰もかれもスマホを持つようになったこの社会に訪れたのは、無意識がより集合した世界だった。空間が共有されて、僕たちは段々溶け合っていく。骨身が電脳空間に溶けていき、自他境界が曖昧になり、そして一つになる、そんな気がする。個人を尊重する教育が行われている社会でこの現状なのはなんともシニカルだけでも、皆薄々気づいていて、ちょっとした抵抗の表れでもあるんじゃないかななんて思ってもいる。だからこそ、一人でいれる時間は貴重にしているのかもしれない。

電車がガタゴトと揺れ出す。噂によると、電車の揺れというのは僕たちが胎内にいた時の母親の胎動に似ているから、眠くなるらしい。母なる大地が鉄の人工物と酷似しているのは、現代といった所か。窓を覗くと見える田園風景は、底の見える水面がきらきらと光を放っていたのだった。

用事を済ませて帰宅しようと、家までの帰路を歩いていた時、空は紫色に染まっていた。電柱には大量の鴉が止まっては、がらがあと鳴き叫んでいる。鴉、と言う字に何故牙という漢字が使われるのかと言うと、一説には、がらがあと鳴くことから、が、と読む牙をへんに持ってきていると言われている。鳩のへんは鳩がクックと鳴くから九なのだとか。本当だとしたら興味深いものである。しかし、とにかくこは鴉が多い。集合体恐怖症の人は、飛び去って行く鳥の群れをみたらきつと尋麻疹を起こしてしまうだろう。なぜこんなにも鴉がいるのかよく分からない。単位を落とした人間が鴉にでもなっているのだろうか。

鴉は大変縁起が良いとされる生き物である。古事記によれば特に八咫鳥は神の使いとして有名で、神武天皇を勝利に導いたとされる。神の歓迎といった吉兆として存在が扱われることが多いが、現代では不吉なイメージを強く持たれていることも多い。なんとなく死のイメージを持っている人もいるのではないだろうか。ペストや黒死病が流行った時に使われたマスクが鴉のくちばしに似ていることから来ているんじゃないかと個人的には思っている。

人間の作った歴史によってただ生きていただけなのにこうも色々と勝手なイメージを作られてしまっはたまったもんじゃないだろう、まあこれも決めつけかもしれないが。

「お前も大変だな。」
道端で佇む一匹の鴉にそう呼び掛けてみた。

「ガアガア」

一瞬目が合ったかと思うと、すぐに夕焼け空の向こうに飛んで行ってしまった。一瞬の隙に、僕はピストルで心臓を撃ち抜かれた気がした。僕は鴉でないように、鴉も僕ではない。お前には、お前の道があるのだ。

僕は僕の帰路に戻った。

帰宅して部屋着に着替えて、コンビニで買った冷凍食品の軟骨のから揚げをレンジで温めながら、あらかじめ炊いておいたご飯を茶碗によそって、居間のテーブルに置く。整理が苦手な自分にとっては、とりあえず置くスペースさえあれば十分なので、積みあがった文庫本をスライドさせる。積読を早くなくさなきゃという自分と、積みあがる本こそ美しいと囁く自分がいる。そんな僕の中には心の中にある得体の知らない黒い塊によって、黄色い爆弾を置く、ことは出来ずテレビのリモコンを置いたのだった。最近ではテレビも見なくなりました。元々テレビっ子だった私は、幼いころからテレビに齧りついてはひたすら教育番組を見る日々だった。何しろあの頃はスマホもゲームもろくに無かったころだったから、簡単に娯楽を見ることも得ることも出来なかったのである。だからこそ、無限の可能性を見せてくれるテレビはかつての自分にとって相棒とも言うべき存在だった。それが今では家に帰っても無言を貫き通すようになってしまった。時の流れは残酷である。

久しぶりに何か見ようとテレビをつけたら、日曜の夜だったのであの国民的アニメが放送されていた。『ちびまる子ちゃん』である。日本の日曜夕方のお茶の間を代表する番組と言って差し支えないだろう。この後には『サザエさん』が続き、日曜が終わってしまうことに哀愁を覚え憂鬱な状態になってしまうことを一説ではサザエさん症候群などと言うようで、このアニメの影響力を強く物語っている。

さて、ちびまる子ちゃんのだが、どうせ見るなら真剣に見てみようかと、数年ぶりにまじまじと見ることにした。汚れた眼鏡をすっかり吹いて、見ることにした。

見終わった時に抱いた感想としては、これは元祖冷笑のアニメではないかと思った。ちびまる子ちゃんの主人公、まる子だが、とんでもなく冷笑なのである。ここまで小学生でひねくれている人間がいるだろうか。トホホ：あたしゃあこりごりだね等のセリフで代表されるように、まる子は常に物事を一歩置いて、他人事のように見ているのである。そして、常に諦めの観念が彼女に取りついているのである。小学3年生の女兒にしては、あまりにませている。これを日曜の家族の団欒の時間に放送しているというのはなかなか興味深い。日本人の心にはどこかうっすらと冷笑の種が眠っていて、それはこのちびまる子ちゃんによって蒔かれていたのではないだろうか。まる子以外にもどのキャラクターには基本抜けているところがある。変人たちの生活を我々は見せられているのである。おもしろおかしい話として日曜の夜にこれを放送しているのだから、冷笑文化は日本からは無くならないだろう。勿論子供向けと云うか、家庭アニメにここまでむきになって意味付けをしている方が問題なのは承知しているが敢えて言わせてもらおう。ちびまる子ちゃんは冷笑の総本山である。

風呂に入り、寢床について、真っ暗な天井を見つめながら今日の出来事を思い出す。思えば、意識的に見ようとするれば何か興味深いことが分かるかもと言う事で始めた今日だったが、なんだかどれもすごく大事かと言われればそうでもないのだが、かといって何もなかったという風にはしづらいような結果だった。ただやはり思ったのは、僕たちが出会うすべてのモノというのは球だということである。球であろうとなかろうと、見えている、考えている部分は一面に過ぎない。見ようとした時に見える面がある。球の裏側は持ち上げないと見えないのである。しんと静まった辺りのことを、目を閉じて想像する。電柱が張り巡らされ、線路が敷かれ、地下には水道管に下水管、海底には海底ケーブル、そして我々人にはネットという道が敷かれ……。網である。私たちは、網に囚われているのである。あまりに大きな網に。球がたくさん集まり、線となって、網目がつくられるのである。ちよっと寒気がしたので、眼鏡をしまった。汚れた指紋が少しいた。

いつかあなたの隣で
／李藻桃藻桃野内

いつかあなたの隣で / 李藻桃藻桃野内

いつかあなたの隣で

すももももものうち
李藻桃藻桃野内

「お願い！ 兄貴のこと……、いや有馬ありまさんのこと、教えてほしいんです！」

N大学附属高校二年生の泡閉悠あわとじ・ゆうは、突然呼ばれた自分の相手の名前に反応し、ゆっくりと後ろを振り向く。すると目の前にいたのは、悠のよく知る女の子だった。

「おお、泉いずみちゃんじゃないか」

悠の目の前にいるのは、同じくN大学附属高校一年の不逃泉にげん、いずみである。泉は、「泡と記憶」というお笑いコンビを組む目森有馬めもり、ありまと悠の後輩だ。大きめの兎の耳のような赤いリボンをつけており、ショートヘアの金髪と相性が抜群である。背が小さいながらも、リボンのおかげで貫録があり、後輩とは思えない。顔もかわいらしく、アーモンドのような目が輝いている。

「どうした？ いつも有馬と仲良く一緒にいるじゃないか。喧嘩でもしたのか？」

悠がふとした疑問を呈する。すると泉は、急に顔を赤らめてもじもじする。

「じ……、じじ、実は……悠さん。私、あに……、有馬ありまさんのことが……。好きになっちゃったんです……！」

悠は目を丸くして口をあぐり開ける。悠にとっては驚くべき事態だ。悠は何とか平常心を取り戻し、泉に聞く。

「え……？ お前ら、まだ付き合ってたの……？」

辺りに気まずい沈黙が流れる。悠と泉の間の情報に齟齬があるようだ。

「なな!! 何を言うんですか悠さん！ 私と兄貴が付き合ってるように見えますか!!」

泉は顔を赤らめてまんざらでもなさそうだ。悠は少々あきれながら、自分の記憶を少々思い返してみることにした。

*

小学五年生で「泡と記憶」のコンビを結成した悠と有馬は、学校の文化祭でネタを披露した。悠のマシンガンのように速く連発されるギャグと、有馬のクールで流暢なツッコミは評判がよく、学校中で知らぬものはいない有名コンビとなったのだ。「泡と記憶」がデビューした後のある日。悠はいつものように放課後のネタ作りをするために、有馬のことを教室で待っていた。ガラリと無機質な音が教室に響き、有馬が現れる。

「おう、待たせたな」

すると悠はきょとんとした顔で言う。

「その子……、誰？」

有馬の腕には、背の低い女の子がくっついていた。大きなリボンが顔と同じくらいの高さで、ぴよんぴよんと自由にはねている。

「この子、四年生の泉ちゃんっていうんだ。なんか突然ついてきて、ここまで来ちゃったんだよ」
すると勇気を振り絞った様子で、泉は言う。

『泡と記憶』が発表したの、見てました！　すごく、かっこよかったです！　」

悠は少々照れてしまった。笑わせたい相手を笑わすことはできなかったとはいえ、自分たちの漫才を面白いと思ってくれた人がいる。しかも「泡と記憶」のことをかっこいいと言ってくれた。まんざらでもなさそうな悠を横目に、泉は言う。

「ほんとうにかっこよかったです！　有馬さん！　あんなにすらすらと、スタイリッシュにツッコみしていく姿！　憧れです！　有馬さん……、いや、兄貴と呼ばせてください！　これからよろしく願いましたます！」

悠はすっかりおぼろげな顔になった。どうやら悠のことは眼中にないらしい。悠は、せっかく自分のファンができたと思ったのに、ちょっとがっかりしたのだった。

*

悠は記憶の世界に飛び込んでいた。すると突然、泉の声によって現実に戻された。

「ずっと一緒に私達、いたんですよ……。悠さんがいるときでも、いないときでも兄貴は私と仲良くしてくれました。でも中学生のころから、一緒にいるのがなんとなく恥ずかしくなってきたんです……。でも兄貴との関係を崩したくないから、その気持ちを抑えて、一緒に遊んでもらっていたんです。高校も兄貴の行くところを狙って、勉強を頑張りました。そしたら最近気づいたんです」

悠は、顔を下に向けて泉の話を黙って聞いている。

「私は……、兄貴……、有馬さんのことが、本当に好きなんです」

悠は誰かの本気の恋愛を茶化すようなことをしない。まじめに頷きながら、泉に話を促す。泉は今にも泣いてしまいそうになりながら言う。

「でも、私……。私、分かんないんです。兄貴に告白していいかどうか。フラれたら、もう兄貴ともとの関係には戻れなくなります。悠さんとも疎遠になるかも……。って考えると怖くて一歩を踏み出せないです。怖くて、なにもできません……」

悠はじっと考える。

「私……。どうすればいいんでしょうか？」

泉は声を震わせながら言う。少々の沈黙の後、悠は答える。

「告白が成功するかどうか、俺にだってわからない。どうすれば……。なんて言えないな。でも、自分の心にウソをついちゃいけない。俺なんか頼らず、自分で決めるがいいさ」

泉は不安そうに、不満そうにうなずく。悠はその様子を見かねて、こそこそと彼女に言う。

「前、俺はある博士に絡まれたことがある。そいつは、わけわからん発明をしてる怪しいやつだが、俺の悩みを解決しようとしてくれたんだ。名前は安里鐘人^{あんりなるひと}。N大学で研究職に就いているらしい。ためしに行ってみたらいいかも……」

放課後になると、N大学附属高校から多くの生徒が校門へ向かう。しかし、悠と泉はN大学の校門をくぐろうとしていた。高校生が大学内に入ってくるのが珍しいのか、多くの大学生が彼女らのことを見つめていた。

「なんで俺までここに来るんだよ……」

「だって……その安里って人、明らかに怪しいじゃないですか……。実験台にされそうになったら、助けにきてくださいよ……」

「泉ちゃんを助けにくるのは、有馬が適任だろう……」

ぼそつと言った悠の言葉は、泉には聞こえなかった。二人で大学の感じたことのない雰囲気狼狽していると、校舎のはじにあった小さな研究室へ到着した。悠は実際に会ったことがあるため、怪しまれる可能性がある。そのため泉が一人で行くことになった。

「し、失礼します……」

おそるおそるドアを開けると、泉が来るタイミングが分かっていたかのように男の人が立っている。大きめの白衣なのか、両手が隠れてしまっている。童顔だが、眼の下にあるクマのおかげで年齢が分かりづらくなっている。

「こんにちは。お嬢さん。私は安里鐘人だ。ちょうどいいところへきたね。さあ、その黒いソファに座っておくれ」

泉は、安里博士が指をさした弾力のある黒いソファに座ると、机の上には花の髪飾りが置いてある。あまり出来は良くなく、一瞬で偽物だと分かった。すると安里博士は、ニヤリと笑って言う。

「これは私が発明した、『映造花』だ。ふふ、何が何だかわからなそうだね。この発明品は、対峙した人間の脳内のニューロンを……（中略）……、というわけだ。つまり相手の考えていることが、この髪飾りの中心部からの映像でわかりやすく表示されるといわけなのさ。ははっ、私、またすごいものを作ってしまったな……」

泉は、突然繰り出された難しい説明を全く理解できなかった。しかし要点のみは理解できる。相手の考えることを読める、つまりは読心術ができるようになるというのだ。ぼーっと発明品を見つめる泉を、安里博士は促すかのような目で見る。まるで、着けてみると言わんとしているかのようである。泉は、おそるおそる「映造花」をつけてみる。すると泉は衝撃を受けた。目の前にいる安里博士の四方八方に、ピンク色の四角いテキストボックスが浮かんでいる。白を基調とした枠の黒い文字が、大きめに表示されている。まるで恋愛ゲームの画面を見ているかのようだ。おそらく左上からどんどん読んでいくのだろう。

「『どうだい。』『しっかり見えているだろう？』『いい感じだな？』『もし見えているんだったらさっそく外に出ていきなさい。』『安心しな、お代はいらない。』」

泉はびっくりしつつも、発明品の効果を実感した。安里博士にお辞儀をしてお礼を言い、外に出ていった。外にいる悠は、落ち着いた様子で泉のことを待っている。

「悠さん……、また栗江先輩のこと考えてたんですか……？」

悠は自分自身の考えを読まれ、口をあぐりと開けて驚いている。泉はいたずらっ子のような笑顔で、悠に笑いかけた。

数日後、泉はN県の大きなショッピングモールである「リバーサイド万秋」の入り口で待ち合わせをしていた。首元にフリルのついた白いブラウスに、濃い青のデニムを着て、当たり前障りのないおしゃれっぽさを演出する。もちろん頭には「映造花」をつけている。「リバーサイド万秋」は、毎日大混雑である。そのため多くの人の考えていることがなだれ込んでくるのではないかと、泉は心配していた。だがそこはよくできているようで、遠くにいる人はテキストボックスが小さく表示されていて気にならない。

「おい、泉」
名前を呼ばれた泉が振り向くと、有馬が歩いてきているのが見える。黒のトレーナーとスラックスに身を包んでおり、あまりおしゃれには気を使っていないようだ。泉はドキドキしながら有馬の周りを見る。すると、テキストボックスがいくつか浮かんでいる。

『なんか今日の泉、おしゃれだな』『朝飯食べてないから腹減ってるが……』『今日のリバ万、混んでるんだよなあ。』

泉はつい笑みをこぼしそうになる。泉のファッションをほめてくれている。出だしは上々である。

「どうも、兄貴！ 突然ですが、さっそくご飯でもどうですか？ 私お腹すいてて。フードコートで軽めに食べましょうよ！」

有馬は、少々驚いていた。泉と自分の考えが一緒だったからだ。そして嬉しそうに首を縦に振ってくれた。

「いいね。行こうぜ」

『泉、気が利くじゃないか。』『俺と同じこと考えてるなんて。』

泉はテキストボックスに表示された文字を見て、手ごたえを実感した。泉の作戦は有馬の心を読み、まるで有馬と泉の気が合っているかのように見せかける。一日楽しんでもらい、その上で有馬の反応を見つつ、ちようどよさそうな時に告白するというものだった。

「ふふ、兄貴……。私のこと、見くびらないでくださいよ……」

泉と有馬はフードコートでたこ焼きを食べ終わった。もちろん有馬が、心の中でたこ焼きを食べたいと言っていたのであった。

「兄貴、ゲームセンター行きませんか？ クレーンゲーム、一緒にやりましょ！」

泉の提案に、有馬は嬉しそうに言う。

「まじか、いいね！ クレーンゲーム、好きなんだよなあ。」

泉が有馬の周りのテキストボックスをちらりと見る。

『泉と気が合うなあ』『気を使わなくてもいいし』『楽しいなあ』

泉はデートがうまくいっていることを確信した。今日は無理でも何回も繰り返せば、いつかはチャンスがやってくるはずだ。これで告白は失敗せずに済む。泉がニコニコしながら前を向くと、たまたま

誰かのテキストボックスが目に入った。

『おかあさん、どこ？』

泉はこのテキストボックスを見逃すことができなかった。立ち止まって後ろを見てみると、小さい女の子がぎよるぎよると周りを見渡している。迷子だ。混雑する「リバーサイド万秋」ではしよっちゅう迷子を知らせる放送が流れている。

「おい、泉。どうした？」

有馬に呼ばれて、泉ははっとする。泉は有馬と一緒にデートに来たのだ。有馬を放っておくわけにはいかない。ましてや完璧なデートプランが霧消してしまう。こんなにたくさん人がいるし、誰かが助けしてくれるだろう。大丈夫だ。有馬の方に振り向こうとした泉の目に、女の子のテキストボックスが、否が応でも入ってきた。

『やびし』『わい……』

泉はその文字を見て、急に記憶がよみがえってくる。

*

泉は小学四年生の時に、引越しをすることになった。友達も誰もいない、場所も馴染みが無い。そんな中に急に閉じ込められてしまった。新しい小学校に転校したのは、二学期の初日であった。すでに四年間をともにした学年、そして一学期を過ごしたクラスのメンバーに全くなじめず一人で孤立してしまっていた。

そんな中、文化祭が行われた。夏休みからの展示の準備は行われていたらしい。泉は参加をしてはいるものの、心のどこかで孤立感を感じていた。さびしくて、怖い。そんな毎日を泉は過ごさなければならなかった。

文化祭当日の昼、ステージ発表があると聞き、泉は体育館へ向かった。ステージ発表の途中、二人の男子生徒がマイクの前に現れた。『泡と記憶』、悠と有馬だった。体育館にいる人が、悠が行う怒涛のボケで笑っている。しかし泉の瞳には、ステージの光に照らされた目森有馬【めもり・ありま】の姿が映っていた。

有馬は今、誰にも注目されていないのかも知れない。悠のギャグに、押されてしまっているから。でも彼は全力で漫才をしている。誰にも注目されなくなつて、彼はやるんだろう。自分だって、ネタを作っているだろうし、何回も練習をしているはずだ。ちやほやされたいに決まってる。しかし有馬は、そんなそぶりを少しも見せずに、自分の役割を全うしているのだ。

泉は、そんな有馬にあこがれていた。泉も、有馬みたいになりたかった。

*

「ねえ。どうしたの？ 大丈夫？」

泉は、迷子の女の子と視線を合わせるためにしゃがむ。「映造花」を取り、女の子の思考を先取りして怖がらせることのないようにする。

「わたしがいるから、大丈夫だよ。一緒にお母さんを探そう」

にこりと泉は笑う。女の子は安心したのか、泉に抱き着いてきてしまった。そのまま抱きあげ、一緒に迷子センターへと向かった。

お母さんが女の子を迎えに来た後、泉は「映造花」をつけなおす。しかしどうしても困っている人が目につくようになってしまう。お店の場所がわからないおばちゃんや、ほしいものを伝えたい外国の人、多発する迷子など、いろいろな人を泉は助けにいった。そしてついにデートは進まずに、帰る時間になってしまった。バス停で泉と有馬は待っている。夕陽が彼ら二人を同じく照らす。たまたま誰もいずに、二人だけの空間だ。

「ごめんなさい、兄貴。兄貴のこと、あんまり構っていられなかったです……。せっかく来てくれたのに……。本当にすみません。」

泉は「映造花」を外す。有馬の心の声を聞くのが怖かったのだ。しかし有馬は優しく笑みを浮かべる。

「いや、泉、えらいじゃないか。あんなにたくさんの人を助けて。なかなかできることじゃねえぜ。しかもすぐ困ってる人を見つけられて、ほんとに周りに気を遣ってるんだなあ。」

泉の心にぐさりと何かが刺さる。少々考えたうえで、泉は決心して言う。

「兄貴。私が気を遣ってるわけではないんです。私は、この花を使っただけです。これは、相手の心を読むことができる道具なんです。なんでこれを使ってるかは言えませんが……。私は卑怯者なんです。人の心を勝手に読んだうえに、デートで兄貴をないがしろにしてしまったんです。天罰ですよ。兄貴、こんな私のことを嫌になりましたよね……。」

すると有馬は眼を大きくして驚いた様子だ。そして有馬は大きな声で笑いだした。

「なんですか！　兄貴、何笑ってるんですか！」

「そういえば前、栗江もなんかおかしなことになってたんだよ！　もしかして、あの時も栗江か悠が変な道具使ってたのか！？」　すべてつながったぜ。確かに泉、ちょっとおかしいくらいに、人助けしてたもんな。」

泉は怒られたり、失望されると思っていたが、予想外の反応にどんな感情よりも恥ずかしさを覚えてしまった。赤面しすぎて、有馬の顔を見ることができない。すると有馬は泉のことを見つめながら言う。

「まあ、でも自分を優先せずに、困った誰かのことを助けるなんて、仮に道具を使っただとしてもすごいことだ。見直したぜ、泉。」

泉は少々照れてしまう。しかし納得いっていなさそうに言う。

「でも、今回のお出かけでは、目標が達成できませんでしたので……。次こそは、絶対に達成して見せます！　次もまた行きましょうね！　兄貴！」

有馬はきよとした顔をする。すると有馬は何かを理解したかのように、優しく泉に言う。

「……泉、その道具で、俺の心を読んでみたらどうだ？」

泉は恐怖で顔を青くしながら言う。

「いやいやいやいや！　絶対怒ってるじゃないですか！　もう人の心を読むのはこりこりですよ……！」

泉は、バス停の近くで腕を振りながら有馬から遠ざかる。有馬は、肩をすくめながら泉を見つめていた。泉の望み通りになる日は、そう遠くないのかもしれない。

季節性映病

What you reflect isn't everything. / 井

上哲也

季節性映病 what you reflect is n't everything. /井上哲也

季節性映病 What you reflect is n't everything.

「これは、季節性映（うつ）病の症状ですね」
医師が告げたのは聞いたこともない病名だった。

「聞いたことねえな」

「まあ、一般にはあまり知られていませんからねえ」

「はあ、それで何なんだ。その季節性映病って奴は」

「フランク・カフカの変身をお読みになったことは？」

「何じゃそりゃ。洋物のビデオか、そうじゃなきゃ知らんよ」

「でしようねえ」

医者 of 奴は眼鏡をくいと上げた。

「季節性映というものはですね、その発病者の容姿、声、服装、その他諸々の身体的特徴が全くの他人の物として、他者に認識されるという病気なんです」

「はあ、つまりどういうことだ？」

「ああ、分からないですよ」

また眼鏡を押し上げる。どうやら目の前の男には人を小馬鹿にするとき、口角の代わりとしてそれを
使う癖があるらしかった。

「お医者さんの職業病って奴か？」

「何です？」

「分からんなら、貴様には関係ないことだ」

「そうですか」

「それでですね、まあ簡単に言いますと、私たちから見るあなたは別人の姿なのです」
「いまいち、理解に結びつかない説明だ。」

「別人ってなんだ、誰かの姿と入れ替わってんのか？」

「確か、そういう映画を昔見たような記憶がある。」

「そういうことです。季節性映で映し出される姿はほとんどの症例で元人物が確認されています。まあ、
あなたが見ただろう映画と異なるのは、元人物の姿はそのままという点ですがね」

語りながら、眼鏡に手をかけようとする。

「おい、不愉快だからやめてくれないか」

「目ざといです」

しかし、分かってきた。要は季節性映病にかかったAという人間の他所様から見た姿は、Bという別の奴のものになる。ただし、Bの姿形はそのままというわけだ。

「厄介な病気だな。…ところで念のため聞くが、俺はお前にどう見えてるんだ？」

「ティーンエイジャーの女の子ですね。近くの高校の制服を着ていますよ」

やはりか。パチ屋の店員がラリってたわけじゃなく、本当に俺のほうが女子高生になっちゃったってことか。

「そういうことになりますねえ」

さらりと言う。おいおい、薬か何かないもんなのかね。

「無いですね。季節性映は治療法が確立してないんです。ただ季節性と付いていることから分かるように、びったり三か月で自然回復します」

裏返せば三か月このままということじゃないか。

「はい、家族や恋人はいますか？」

いや、はいじゃないが。

「親父とお袋はお前さんみたいな医者でね。仕事第一の性根が気に入らなかつたから中学で家出して、後は知らねえ。女は働けてうるさいんで昨日別れた」

「ご友人は？」

「馬鹿言うな、女とみれば頭がピンク一色になる連中だ」

どんな目に合うか知れたもんじゃない。

「なるほど…。まあ、ならいいじゃないですか。せっかくの三か月楽しく暮らしてみてもは」

奴はカルテを書き上げると、

「ではお気をつけて。診察料は受付でね」

眼鏡を持ち上げながら出口を指し示した。

アパートへと戻る道は、新築一軒家の立ち並ぶ住宅街に面している。両脇に生えた木々は冬に備え葉を落としているようで、傍からは枯れ木に見える。もしかしたら、木には自分たちなりの見え方があるのかもしれないが。

「この街にもドブ臭くない場所があるもんだな」

普段はドヤの方を歩いていくのだが、女性として歩くには危険だろう。

「さて、これからどうするか」

元々ヒモだ。仕事なんぞはないが向かっているアパートだって女のものだ。元の姿でも怪しいのに今行っても確実に入れない。かといって友人知人は論外だ。となるとホテル暮らしとなるわけだが。

「金が無え」

パチ屋にも入れん身の上なれば稼ぐ当てもない。

「待てよ、この状況は使えるか？」

そうだ、周りから俺が分からないのなら、犯罪だってやりたい放題。強盗もよしひったくりもよし、いっそ井上先輩のように営利誘拐を仕掛ける手もある…。

「駄目だな。三か月は長すぎるし、病院から足がつく」
打っ手なしだ。

「え、ねえ、もしかして、もしかして、やっぱりそうだ！」
途方に暮れていると、向こうから歩いてきた女が声をかけてきた。見れば、近所の高校の制服を着ているようだ。もしかしたら俺の見た目の知り合いかも…。

「よかった。生きてた…。もう、帰ってきたなら連絡ぐらいしなさいよ」
事態をつかめないうちに女の話は続いていく。

「って何よ、きょんとんとして。もしかして記憶喪失？ 親友の顔まで忘れちゃったわけ？」
よく分からんが、本当のことが分かる人間が増えても困る。ここは話を合わせよう！

「いやいや、忘れるわけねえだろ」

「え、あんたそんな男っぽい話し方だっけ」

女はこちらを値踏みするように眺めている。

「…まあ、いろいろあったのよね」

かと思うと勝手に納得します。うまく呑み込めないが何とか切り抜けられそう。

「そういえば、私の名前ってなんだっけ」

取り敢えず、ガワについての情報を集めておこう。

「何だっけて、自分の名前も忘れたの？ 色川武子（いろかわたけこ）でしょ、色川武子！ まったく、別人とすり替わったみたいね、今日のアンタ」

実的に射た推察だ。

「まあでもショックでいろいろあるか」

「ちょっとさっきからいろいろって何よ」

「あんたね、自分が何日間行方不明になったと思ってんのよ！ その辺ちゃんと考えなさいよね！」

「行方不明？」

なんてこった。俺の外見はとんでもない厄介事を抱え込んでいたらしい。

「あんたね、とぼけないでよ…。まあ、いいわ。学校行きましょ」

ん、待てよ、学校？

「ちょっとなんで俺…じゃなくて私が学校なんていかなきゃいけないのさ」

「あんたこそ何言ってるの。そりゃだいたいぶ遅刻だけど、学生の本分は勉強でしょ」

そうか、俺は今高校生なのだ。であれば、学校へも行って当然だと思われるわけか。しかし、公的機関はまずい。身元をごまかすにも限度がある。

「ごめん、ちょっと腹痛を思い出したから！」
言って、駆け出した。

「ちよっと！ ……こんなに足速かったかしら」

なんせ脚力は成人男性だからな。

「ふう、ここいらまでくれば問題なからう」

「うわ！」

走りに集中するあまり、目の前が見えていなかった。結果、前を歩く老婆と正面からぶつかったようだ。

「まったく、どこ見て歩いてるのさ。…お前さんは」

婆さんは俺を視界に認めると、じろじろと見回してきている。なんだか嫌な予感。

「…お前、まあいい。一緒に家に帰ろう」

しみじみと囁み締めるように婆さんが話す。

「あの一。どちらさんですか？」

「どちらさんってね。お前実の母親の顔さえ忘れちゃったってのかい」

「なんだって！」

ややこしいことになった。目の前の老人はなんと俺の表面の母親だという。まったく世間は狭い。

問題はさてどうするかだ。顔というか存在を知られた以上トンスラはできない。では正体を明かすか…、

いや、これはチャンスだ。元々衣食住に事欠く身の上。上手いこと成りすまして潜り込めれば不自由はない。

「…いや、会いたかったぜお母さん」

「…まあいいわ。んじゃ帰りましょ」

婆さんの後ろについて歩く。住宅街を抜けて、高台の方へと昇る坂道に差し掛かる。息の切れるような急坂だが、婆さんはすいすい登っていく。

「…速いね母さん」

「何言ってるんだよ。毎日通ってる道じゃないか、あんたも」

「そ、そうだね。うん、疲れてるのかなー、いろいろあったしね」

さらに登っていき、一軒の家の前で婆さんは足を止めた。隣家に比べて三倍はあろうかという広さ大きな邸宅である。

「んじゃ、入るよ」

「入るよって、ここが私の家？」

「どうやら本来の『私』はリッチガールだったようだ。」

「何言ってるんだい。十七年は住んでる実家に対してねえ」

「いやだなー母さん。ジョークだよジョーク。女子高生ジョーク」

「つまんねえこと言ってるで入んな！」

促され、中に入る。外見に反して中身はぱっと見4LDKといったところである。廊下があってその両脇の壁に四つドアがついていて、正面からキッチン兼ダイニングが見えている。

「あんた、ポケっと突っ立ってないでまず父さんに挨拶しなよ」
後ろから婆さんが怒鳴る。

「父さんたってどこにいるのさ」

「何言ってるの、居間だよ、居間」

「居間ってどこさ」

「右奥の部屋だよお、…あんたどうしたのさ」

あきれたように話す。これ以上怪しまれては厳しいな。

「ジョーク、女子高生ジョーク」

右奥のドアを開け、居間に入る。中は広々とした和室で、その奥に立派な位牌壇が置いてある。

「位牌壇…」

「さ、お父さんにただいまって言いな」

婆さんは位牌の前に座って手を合わせ始める。…おそらくであるが自分の娘が行方知れずの時、一人で毎日、親父さんに向けて拜んでいたんじゃないのか。…俺のお袋はどうだろう、もし親父がおっ死んじまっていたら、奴さんもこうしているんだろうか。丸く小さな背中…。

「さて、お前風呂炊けるから入ってきな」

「風呂って、わざわざ炊いといてくれたのか」

「当たり前だろうよ。いいから入ってきな」

「風呂はどこだよ」

「ダイニング前で右に曲がると奥にあるよ」

言われたとおりに行くと確かに風呂場があった。風呂桶の中には風呂がすっかり張ってあって、運のいいことに俺の好きな具合の熱々だ。

「湯に入るってのも久しいな、いつもシャワーだしな」

お湯から上がってダイニングの方へ行くと婆さんが待っていて、これまた大きなテーブルの上に料理がずらりと並んでいる。いったいこれは何なのか。

「何突っ立ってんだい。あんた腹減ってるだろ。たんとお食べよ」

「食べるって、俺、じゃなかった、私が？」

「当たり前だろ」

箸をつける。料理はそれぞれ濃い味付けで、口に合った。暖かい料理をふるまわれるのは久しぶりだろうか…。

「ありがとう、母さん」

「いいんだよ。お前が帰ってきたらと思ってたんだから」

帰ってきたら、か。俺はあくまでもあんたの娘じゃない。この歓待を受けるべき身分ではないのだが。

「そうだ、私ちょっと学校で嫌なことあってさ。登校したくないんだ三か月くらい」

であるがために、学校だのへ行くのは避けたい。といっても、高校生が三か月休みたいというのは不自然なのだが、

「…そうかい。んじゃ今日はもう寝な」

信じられない程あっさりと、誤魔化すことができた。

それから三か月の時が過ぎた。婆さんは不器用だが、娘への気遣いは相当だった。自分の親は当然婆さんとは似ても似つかぬはずだが、俺はこの婆さんに自分の両親を重ねていた。

だが、もう三か月経ってしまった。季節性映病の自然治癒。それは婆さんとの生活の終わりを意味していた。

「何か言えば未練になる」

黙って出ていくのがせめてもの筋だろう。また、一人きりで位牌に向かわせることになるが…。

「最後に、家を見返してから行くか」

ダイニングに立ち寄る。

「あれ、机の上に新聞が広げっぱなしじゃないか」

ふと、その記事の内容が気にかかった。日付は二か月前のものだった。

『女子高生誘拐殺人の主犯、井上容疑者未だ逃亡中。先日見つかった色川武子さん（17）の遺体からは井上容疑者のものとみられる体液が検出されており…』

頭が真っ白になった。この記事を読むに、婆さんは知っていたのだ。自分の娘はすでにこの世にいないことに。そして、

「お前が季節性映病だっことに気づいていた、かい」

後ろに婆さんが立っていた。

「気づいてたのか。悪かったな、騙してて」

「いいんだよ。私たちもお前さんを騙してたんだから。…入ってきてください」

言うと、部屋に一人の男が入ってきた。俺を診察した医者だった。

「あたしたちも季節性映だったんだよ」

二人の姿がみるみる変わっていく。そして現れた姿は。

「親父、お袋！」

俺の実際の両親だった。

「お前が家を出て行って、あたしたちは後悔した。どうして、お前さんにもっとかまってやれなかったんだらうって。せめてもう一度、お前と親子のつながりを持ちたいと思った。そうしたら、偶然にも転勤先の町に息子がいて、あたしたちが季節性映にかかったと同じくしてお父さんのところに季節性映病患者としてやってきた。これは運命だと思ったよ。それでこんな芝居を打った。死んじまった子には利用するみたいで悪いけれど、こんな手しか浮かばなかった」

語るお袋の姿は、この三か月の婆さんの背中を思い起こさせた。

「もう三か月だ、それでだ。お前さんにあたしたちと一緒に暮らしてくれとは言わない。ただ、最後にお前の本当の姿に戻るまで、待っておくれ」

「俺はへそ曲がりだからな。あんたの言うとおりにほしくないよ」

「そうかい」

お袋も、親父も肩をすくめて小さくなっていく。

「俺はあんたたちの言いつけは守らない。だから、あんたたちの腰がまっすぐじゃなくなって、自分でケツ拭けなくなって、灰になって坪の中に納まるまで、必ず近くで見といてやる」

「おまえ…」

二人の顔を見る。背負っていた重荷から解き放たれたような済んだ顔。彼らの瞳には、もう色川武子ではない本当の俺が映っているのだろう。俺からは見えないが、分かるのだ。

俺と彼らの間にある、目には映らない繋がりで。

魚影
夕立実

魚影
夕立実

魚影

夕立実

どうも眠れなくて、一旦起きて川へ行ってみることにした。家を出るととても綺麗な満月が出ていたの
で、川へはライトは持っていないかずに行くことにした。

川へは、一枚板で造られた木道の橋を渡っていく必要がある。橋は自分の背丈を優に超えるほどの高さ
の草むらの中を、真っ二つに切り分けるようにして架かっている。木の板は水気を吸って腐りかけてい
て、上を歩くたびにコォコォと橋が軋む音がして、密林の中の川をボートで下っているというような感
覚になる。

橋から落ちないように、橋が崩れ落ちないように慎重に進んでいくと、ジャングルみたいな草むらの中
から打って変わって、石がゴツゴツしている河川敷に出られる。ここで、木道は栈橋へと変化する。

満月の光が地上で分裂して、それが水面の波に投影されてゆらゆらと光っていた。

栈橋の先端部でしゃがみ込んで、真っ黒な水の下に手を浸す。川の水は冷たすぎず、ぬるすぎず、絶妙
な温度でもとても気持ちがいい。ついでに手のひらを走るナントカ線の溝に染み込んだ脂汗を、ゴシゴシ
両手の指で擦りながら洗い落とす。

川はほとんど平らなところを流れているはずだが、川からは滝壺の近くのようなザアザアという音が聞
こえる。この川は日本で一番長い川だから、川のせせらぎの音もトップクラスに大きいんだ。そう思っ
たその時、手首を持っていかれそうな強い衝撃が走った。

ニシキザメだ。ニシキザメが自分の両腕の手首にガブッと喰らい付いたのだ。紅白模様の鱗が、月の光
に照らされて毒々しく光っていた。

思わず尻餅をつきながら、釣竿を上げるようにして手首を上げて、なんとか手首から取っ払おうとする
が、流石に重すぎてどうしても手首が上がらない。下手したら本当に手首が持っていられるかもしれな
い。次に爪を立てて精一杯に口の中を引っ掻いてみようとしたが、舌と歯で指が完全に固定されていて
それもできなかった。

なんとか頑張って、顔を足で蹴っぼろうとした。何回か空振りするも、一発だけ運良く足がニシキザメ
の眼のあたりにヒットした。するとニシキザメは「グハッ！」という感じの顔をしながらどこかに逃げ
ていった。

手首を見ると、しっかりと歯形がついていた。手に残ったニシキザメの感触を川で洗い流そうとしたが、
あの感覚だけはどうしても残り続けてしまった。

家に帰ってもその感覚は残り続けていて、結局その晩はぐっすり眠ることができなかった。朝、起きて
見てみると、昨晚の痕が両手の手首にしっかりとついていた。噛まれたところは内出血をしてミミズ腫

れのようになっていて、何かで隠さないととても恥ずかしいような状態となっていた。でも、だからといってそこを何かしらで隠すのも、恥ずかしいことに変わりはない。朝ごはんを食べながらそんなことをいろいろと考えていたら、早速親にそのことがバレた。

「あんた、それどうしたの」

「囁まれちゃった、ニシキザメに」

「いっ」

「昨日の夜。寝れなかったから、川に行った時に」

「はあ、もうすぐニシキザメ漁師になる人間が？ 情けないわあ」

朝という時間は本当に大嫌いだ。昨日の清算と、今日の準備を同時に済ませないといけないから。あと、日の光が眩しくてうざいから。

味噌汁のお椀の底に溜まった味噌を箸で軽くかき混ぜて、ゆっくりとじっくりと味わいながら飲み干した。身支度をしたら歩いて仕事場まで行かなければならない。

仕事場は結構な山奥にあって、移動するだけでかなり体力を消耗してしまう。

「でもあんたももう少しで大人になって運転免許も取れるようになるんだから、それまでは我慢してよ」お母さんはいつもこう言うのだが、どうしてで私がかんな目に遭わないといけないのかと、言われるたびに頭にきてしまう。

ニシキザメは「日本一長い川に生息する、日本一大きな淡水魚」として有名で、この県のシンボルの一つにもなっている。二十一世紀の終わり頃、つまり今から大体一千年ほど前に、観賞用として育てられていたニシキゴイが野生化したのち、巨大化等の突然変異を重ねていったことでニシキザメは誕生した。されているが、詳しいことはまだまだ謎が多い。

私の役割は、ニシキザメが喰らう餌となるニシキゴイを育てること（なぜニシキザメが、本来同じ種であるはずのニシキゴイを捕食するのかは不明である）。ニシキゴイは四角形の田んぼみたいな池の中に、それぞれ成長の進度別に分けながら放して育てていて、それぞれの田んぼに適した餌を適量、決まった時間にやる、というのが私の仕事内容となっている。

私の家、というか私の住んでいる地域の家庭はほとんどがニシキジメ漁で生計を立てていて、慣習として「子どもたち」は小さい頃から家の養殖の仕事を手伝うことになっており、ある程度成熟したら大人になるための試練として「自分一人でニシキザメを捕らえる」というのを一種の通過儀礼のようなものとしてやらせるという慣習がある。

エラのあたりを銚でぶっ刺して捕える、ということだけは分かるけど、自信はない。

正直なところ、私はニシキザメ漁なんてやりたくない。めんどくさいし、危ないし、グロイから。ニシキザメだって痛いだろうし、私の心も傷ついてしまう。私のことは、私の自由にさせてほしい。

「君たちだってニシキザメに食べられたくないだろ？」

餌用のニシキゴイの養殖池のほとりで横になりながら片腕を池に沈めて、「おいでおいで」というような感じの手招きをしながら、そうニシキゴイに語りかけてみる。一匹、私の元に来てくれた。

「ニシキザメはなんで君たちを食べるんだろうな」

「あいつらの方が上だからだよ」

水の下に沈んだ手のひらの指を、ニシキゴイが無でながらそう言った。

「そっか」

寝返りを打って、ニシキゴイたちが泳いでいる池の方を見てみる。水面に眠そうな顔をした私が、ゆらゆら揺れながら反射して映っていた。さらにその下に、何も考えてなさそうな顔をしたニシキゴイがいた。そのコイは牛みたいなの白黒のぶち模様をしていて、時々口の中に空気を溜めてぷっくりとほっぺを膨らませながらこっちを見ていた。

この子たちはもうしばらくすればニシキザメの餌になる。それが少しかわいそうに思えるが、単に知性ある人間が勝手にエゴを押し付けているだけなのかもしれない。自分の置かれている境遇がいかに酷いかを知る余地もないだろうし、

「あんたたち、何も考えてなさそうだしね」

「いや、僕たちニシキゴイだって、ちゃんと考えるよ。今日は昨日よりもいい天気だな、とか」
「そうだよ」

「君は、ニシキザメの餌になるんだよ。それでもいいの？」

首を傾げながらこっちを見てきた。よく分かっているらしい。

「でもそれって、川に行けるってことでしょ？ 川に行けるならやっぱり行ってみたいよ」

「川なんてろくなくところじゃないよ。ニシキザメだっているし」

「でも、何事も経験でしょ。池の外がどうなってるか、ちょっとでいいから見てみたいんだ」

「そういうものなのか。」

「池の中で生涯を終えるなんて、やだよ」

「そういうものなのか？」

「池の方が、楽に過ごせて良いんじゃないの」

「楽だろうけど、人間の顔色を伺いながら生きないとだからね。逆らったら餌が貰えなくなっちゃうかもでしょ」

「へえ」

私はそんなことは微塵も考えたことがなかった。コイがまさかそこまで考える生き物だとは思っていなかったから。

もう一度寝返りを打って仰向けの体勢になる。視界いっぱい空が広がった。空は雲で覆われていて真っ白で、そのまま天空に落ちていってしまいうるさく感じた。そのままコイに尋ねる。

「じゃあ、池の中よりも川で過ごしたいってこと？」

「そりゃ、川の方が広いからね。人間の目も気にせずに過ごせるから」

理解ができなかった。どうして危険な方の生き方を選ぶんだろう？

「それでね、いつか僕もニシキザメみたいな立派なコイになるんだ。今に見ていなよ」

池に沈めている方の腕を引っ張られた。ふっと見ると大量のニシキゴイの群れが手のひらを啜って池の方に引き摺り込もうとしていた。それに気づいた瞬間にはもうすでに出遅れで、眼前に水面が迫ってきていた。そして思わず目を瞑った瞬間に、体全体がビクッと震えて、ふっと目が覚めた。

どうやら眠りに落ちかけていたらしかった。ニシキゴイが喋れる訳がなかった。意思だって持っている訳がない。

しかし危うく池に落ちかけていたのは事実だった。

「あんた、何寝てんの。もう」

いつの間にかお母さんが池に来ていた。

「あんた銚打ちの練習、ちゃんとしてるの？　もう明日なんだからね」

夢うつつで聞いていたのであまり脳には響かなかったが、重大なことを言われているというのは分かっていた。

「もういい年なんだから、後先のこととは自分で考えてね」

明日、私はニシキザメを殺して、大人になるのだ。

真っ暗になっていく池を後にして、お母さんと一緒に帰った。

別人になるような感じがした。大人になると、心境は変化するのだろうか。

風呂に浸かって考えながら、ふと風呂の水面に視線を落とした。池の水と違ってお湯は綺麗に透き通っていて、光は反射をすることなくそのまま水の中に吸い込まれていくだけで、水面に映るものは何一つ無かった。

一応、銚を投げる練習をしてみることにした。両手でエアアの銚を握りしめて、それを浴槽に勢いよく投げた。パシャッと飛沫を上げながら、波紋が浴槽いっぱい広がっていった。波紋は互いの波紋を打ち消し合って、ものの数秒で水面は元の静かな状態に戻っていった。これで本当にニシキザメを仕留められるのかは分からなかった。

この時、ふと手首の方に視線を動かすとニシキザメに噛まれてできたはずの手首の傷がいつの間にか治っていたことに気がついた。傷跡のあたりを強く押し当てても特に痛みは無く、どうやら完全に治っているようだった。

当日はいつもよりも数時間早く起こされた。朝ごはん。綺麗に濁った味噌汁を箸でかき混ぜながら、それを飲み干していく。お椀の内側の漆塗りのところに、私の顔の影が映っていた。

「ほら、漁師さんたちも待っているから早くしてね。まず池のコイのところに行かなきゃ」

そうして、言われるがままにお母さんとまずは池へと車で移動した。池までの道中は霧がかかっていた。車がなければ霧に飲み込まれてしまっただろう。

でこぼこ道に揺られながら、数十分かけて池に到着した。この池の中から、餌にするニシキゴイを何匹か選ばないといけない。

「なるべく派手なやつの方を選ぶんだよ」

と、コイを捕まえる用の網と箱を手渡された。

霧がかかった池に体を近づけて、コイを厳選する。水面に顔を近づけたその時だった。昨日会った牛みたいな模様のニシキゴイが再び私の前に現れた。

「おはよう、今日は早起きだね」

「うん。今日はニシキザメを仕留める日なんだ」

「へえ、すごい。頑張ってる」

昨日と同じように、そのコイはほっぺを膨らませながら何も考えてなさそうな目つきで私を見つめた。なぜ見つめてくるのかは分からない。

「そのコイは、ダメかな。もっと、紅白の派手なやつとかいない？」

そばにいたお母さんが言った。もっと一緒にいたかったが、「じゃあね」と軽く手を振ってそこを離れた。しばらく池の周りをぐるぐる回って、赤と白のぶち模様の個体や、赤、白、黒の模様がそれぞれ同じくらしい面積分入った個体、金魚みたいに真っ赤な個体などを数匹ほど回収した。

コイは生かしたまま餌にするので、活きがいいうちに川まで行かなければならない。この時には行きの時にかかったいた霧が晴れて、いつもの朝がやってきていた。

餌のコイが入った箱を抱えながら、先日ニシキザメに手首を噛まれた棧橋まで行くと、すでにお父さんとそのほかの漁師さんたち数人が舟に乗って待っていた。

お父さんはプロのニシキザメ漁師で、久しく会っていなかった。

「まあ、リラックスしなよ。別に死にやしないから」

私が思い詰めているのは、別にそういうことではなかった。

舟は私が乗るとすぐに動き出した。

舟は思ったよりも激しく揺れた。河川敷からは想像もできないほど、川の中心部の流れは激しいようだった。箱に入った餌のコイを預けると、漁師さんたちは手際良く釣り針を括り付けて、舟後方にそれを垂らした。コイは元気に舟の進む方向と同じ向きに泳いでいる。後はニシキザメがこのコイに喰らいつくのを待つだけだ。引き揚げは同乗している大人たちが協力してくれるので、言ってしまうは私の役割は「とどめを刺すこと」だけである。

「いいか、鉾は両手で引き揚げるまでずっと掴んだままでいるんだぞ。じゃないと逃げられるかもしれないからな」

「思いっきり刺すんだぞ。ニシキザメだって楽に逝きたいだろうからな」

大人たちにいろいろとアドバイスされながら、川底の方を見つめる。冷徹な目つきをした私が、ゆらゆら揺れながら映っている。この時の頭の中は「刺すこと」だけに集中していて、それ以外には何も無くなっていた。

突然だった。餌のコイの背後に茶色い靄が現れて数秒後、ニシキザメがニュッと現れて一口でそれに喰らい付いた。

「いま！」

その声と同時に鉾を投げた。水面に映っていた私を飛沫を立てながら貫き、その下のニシキザメへと一直線に向かっていた。その瞬間にサメは鉾の存在に気付き、視線を舟の方に向けた。サメと私は一瞬だけ目が合った。その目をめがけて、鉾の刃は進んでいった。

グシャッと、肉に刺さった音と水飛沫の音とが混ざった音が周囲に散らばった。

サメは銛の刺さったところを軸にして飛沫を上げながらぐるぐる蹴り始めて、それと同時に血の渦が一带に広がっていった。思わず舟から投げ出されそうになるのを必死に堪えながら、銛を強く握り続けた。サメか私のどちらかの心臓が、ぶるぶる激しく震えているのを感じた。

大人たちが少しずつ釣り糸を引っ張り上げていくと、赤と黒のぶち模様をしたニシキザメがやがて姿を現し始めた。私が投げた銛は、本来刺すべきエラからは少しだけずれて、眼球のあたりを半分ほどえぐるようにして刺さっていた。ニシキザメはびっくりしたような顔で、口をだらんと開けて血の涙を流しながらこちらを凝視していた。

ニシキザメの大きさは大体子供一人分ぐらい。よく見るとヒレをまだパタパタさせていて、なんとかまだ生きているようだった。

眼球のところは銛が刺さったことでぐちゃぐちゃになってしまっていて、そこから絶えず赤黒い涙を流し続けていた。やっぱりグロい。

「痛くない？」

「痛いけど、大丈夫」

ゆっくりと呻くようにニシキザメが言った。

傷跡をさらに近づいて見ると、引きつったような笑みをしている私が涙に反射して映っているのが見えた。

「さて、ニシキザメを一人で捕えられたことだし、これで一人前の大人だね。おめでとー」

大人たちから軽い拍手が起こり、祝福された。一応、これで私も大人になったのだ。実感はなかった。

サメは終始、私の方を見つめていた。

パレキドリア／星屑なつき

パレキドリア / 星屑なつき

パレキドリア
星屑なつき

ガラス張りの風除室を抜けると、痛いほどに冷たい風が頬を刺す。

胸郭を満たす、冬の爽やかで冷酷な香り。一面に広がるは雪に覆われた白の世界。空はどこまでも重く、苦しい灰色で、陽が差そうとは到底思えない。

「ああ……」

路傍に散る、赤い点。

肩を竦めるようにして立つ木々の、枝葉に散る赤い実。その中に、見るのだ。その面影を、見るのだ。

新潟へ向かう列車は酷い混みようだった。

沖繩も返還された時分、線路も随分とマシになって、座席に座っている者を振り飛ばさんとするあの暴力的な揺れも今や昔のことである。

「お兄さん、ここよろしいか？」

年の頃は四十余りか、下駄履きに二重回しの紳士は、俺の返事を聞くが早いか真ん前の座席にドサッと腰を下ろす。新聞の上の隙間から盗み見るところによると、なるほど着物の仕立ても丁寧で、古風な出で立ちも勘案するかどうかやら相当良い家の人間らしい。

「お前さんも湯治かい」

紳士は車窓から視線を外さず、独り言でも言うような調子でそう聞いた。

顔ごと窓を見ているのに、その瞳は手前に広がる田畑も悠然とそびえる山々も、そのいずれも映していない。

「ええ、まあ」

尋常でないその様子にギョッとしないでもなかったが、俺も人のことを言えた見た目ではない。良くて旅を好む放浪人、悪くすれば気の触れた浮浪者である。

「そうかい。お前さん、若そうに見えるがどこが悪いんだい」

紳士は煙草でも蒸すように細く深呼吸をする。

どこことなく青黒く瘦けた頬が、その男が湯治に出た理由を物語っている。

「ちょっと、大きな怪我をしまして」

「戦争かね」

そうだと行ってしまえば、簡単なことだ。

復員でなくとも戦争によって大きな怪我を負い、湯治に通う者は珍しくない。そもそも生き汚い人生だったのだ。今更正直に生きようとも思わない。

ただ、この一点に関してだけは、偽りを言うてはならない。わけもなく、そう思うのだ。

「いえ、誤って包丁が刺さってしまったんです。こう……ズブリ、と」

自身の腹部を示し、まだ仄かに痛む傷を指でなぞる。

さすがの紳士もこれには驚きを禁じ得なかったようで、「へえ、包丁が刺さる、誤りで……ねえ」と口の中でモグモグと弄した。

「……ええ、ほんの誤りです。傷はそう深くもなかったんですがね、医者ってのがこれまた用心深い生きもんなんだな、『何があるかわかりゃせんぞ』と言うので半年余り入院しておりました」

何も訊いてくれるな、口を挟んでくれるなど、いつもどもって仕方のない口が滑る滑る。

「そうかい、そうかい。それで湯治かい」

呆気にとられた様子の紳士に、これ以上深入りしてくれるなど、俯くように頷いてみせる。

そんな俺の内心を知ってか知らずか、気まずそうにインバの襟を掻き合わせ、紳士は独りごちるように「俺は心臓が駄目でね。まあどんなに効能があるか知らんが気休めみたいなものさ」と零した。

「雪国は良い。空も地面も白だ。何もかもが、重っ苦しい、淀んだ白をしている」

俺は彼の目に何が映っているのか、ようやく分かったような気がした。

湯治先に喜綿荘を選んだのは、全くの偶然であった。

あのインバの紳士はちょっと見でわかるほどの高級旅館へ消えて行き、列車内でのあの空気を思えば間違っても同じ旅館に泊まる気にはなれなかった。まあ無論、高級旅館で湯治をするほどの持ち合わせも無いが。

「あんれ、ジョーちゃん。出歩いていて良いのかい」

「ああ、砂岡屋の旦那。いやね、今日は気分が良いし、こもりきりで寝てばかりいるのもかえって身体に悪いと医者も言っていたから」

立ち並ぶまんじゅう屋の軒先で、どこぞの旅館の羽織姿が親しげに話し込んでいる。目と鼻の先の光景のはずが、どうにもどこか遠い異国の出来事を見せられているように思えてふわふわと地に足がつかない感覚に襲われる。

特に下調べもせずに飛び出してきたので、行く宛などあるはずもない。仕方なく湯けむりで霞む視界をふらふらと歩いていると、さつきから暗い白をしていた空がたちまちに黒くなった。

「なんでえ、冬だつてがんに夕立でねえか」

まんじゅう屋の主人が気の抜けた声を上げ、石畳の地面はパタパタと音を立て始める。

途端にまだふさがりきらない傷がジリジリと痛み始める。

いけない、天気が悪くなると痛みが増すのを忘れていた。

「うっ……ああ、ぐっ」

身を切られるような痛みにたまらなくなり、裾の濡れるのも構わずにその場にしゃがみ込む。

「あの……だって旦那、ほらあんなとこで……じゃないかい」

「……ジョーちゃんいけねえ、いいよ俺が」

キンキンとした耳鳴りの中で、さっきのまんじゅう屋の話し声がする。

雨粒は石畳にまだら模様を作っていく。まだらはすぐに空と同じ暗い灰色になった。

パタパタと落ちる雨。重なる、草履の石畳に擦れる音。

「なあ。ほらあんた、なあってば。どうしたんだい」

大きくなる耳鳴り。

まんじゅう屋の声。

うるさい。うるさい。

「なあって」

背中に触れる誰かの手。

そこで、意識がプツリと切れた。

気づけば、東京の自宅を歩いている。

霧がかかった灰色の空気を、鉛のように重たい脚を引きずって裂いていく。

頭蓋の中一杯に、男とも女ともつかぬくぐもった声が響き渡っていた。

「殺さねば気が済まぬ」

「あの快楽を味わわねば生きてゆかれぬ」

俺がかような声を聞くのはこの日ばかりでなかった。思えば、生まれたその日からこの声の主は俺と共にあったのではないか。

「誰でも良い、殺めるのだ」

「その生命を奪うのだ」

はた、と気がついた。

「塵殺せねばならぬのだ！」

共にあったも何も。この声は。

俺の声ではないか。

「はっ！ ああ……ああ、ああ……」

身体を揺すぶるような酷い目眩の中、薄暗い空間を切り裂くように、天井を走る大きな梁が視界を二分している。

俺の自宅は戦後に掘って建てた安アパートであるから、かくのごとき立派な梁など通っているわけがない。すると、ここは何処であろうか。実家は田舎の山奥にあるが、ただ古いばかりのあばら家で、ここまですべて大きな梁は無い。

こうなる前の一番新しい記憶を手繰ってみる。そうだ、俺はまんじゅう屋の前で動けなくなったのだったな。するとここは死後の世界か何かだろうか。まだ傷の塞がり切らないうちに遠出をしたのがいけないのかかもしれない。

にしても、静かだ。葉の擦れるような音が遠くでざわめいているだけで、人の気配もない。

これが死後の世界なら俺は喜んで死を受け入れようじゃないか。てっきり俺のような汚い人間は灼熱の地獄に墮ちるものとかばかり考えていたが、一遍死んでみぬと分からぬものだな。

「地獄の沙汰も金次第……ってか」

外套の内ポケットでかまぼこ板のようになった紙幣たちを思い出し、俺がこんな居心地好いところで死後を満喫できるのは袖元のおかげかと納得する。

その証拠に、閻魔とやらへ渡った愛しの原稿料はもう俺の胸元には無い。

おまけに、外套も無い。

あるのは、薄手の浴衣が一枚。

「えっ！」

金が無くなるのはまだ分かるが、初給料を切り詰めて手に入れた外套まで剥ぎ取られてはたまらない。思わず跳ね起きると、兵児帯の下に一文字に引かれた傷跡がキリリと痛んだ。

「お目覚めですか」

「うわっ！」

出し抜けに声が出たと思ったら、障子に人影がぬらりと映った。行儀よく正座したその影はスツと障子戸を開き、そして三つ指ついて姿を現した。

「越後温泉旅館・喜綿荘へ、ようこそおいでくださいました」

恭しくお辞儀をしたソレが、ゆらりと顔を上げる。

雪のように白い肌、とはこいつのことだ。ポマードも付けていない、切りそろえただけの短髪に、力仕事など知らぬと言いたげな細い指。年の頃なら二十かそこらの、温泉旅館の羽織を纏い、にへらと笑ってみせるこれが、「地獄の鬼」だとは誰も思えない。

「……すると俺は、生きていますか？」

「ええ。隣の医者も太鼓判を押したご存命ぶり」

なんと、俺は地獄行きを免れたのではないらしい。

生きているに越したことはなからうが、そこはかたなく口惜しい。

「ところで、湯治の方とお見受けしましたが、どこの湯治場を目指してらしたんです？」

「ああ、いやね……特に決めちゃいません。ろくすっぽ下調べもせずに来たもんですから」

「そこいらで突然倒れるほど塩梅が悪いのに……ですか？」

薄ら笑っているのに、皮肉を言っている風ではない。この青年は、本気で俺の無鉄砲さに呆れていやがるらしい。

「塩梅が悪くて倒れたわけじゃ、つか、まあ……悪いのは身体じゃねえんでね」

じゃあどこがと聞きたげな、何も知らない無垢な目。わざと俺の濁った視線をぶつけ、「ここだ」と言う代わりに頭を指先で突いた。

それで俺の事情をなんとなしに察したららしい青年は、またにへらと笑う。羽織の袖を抱き合わせて言うことには、「これも何かの縁とすれば、うちで湯治とごうのも悪い話ではございませんよ」だとか。

「……じゃあ、お言葉に甘えてご厄介になりましょうかね」

俺はこのいっとき、自分の惨めさをすっかり忘れ、また原稿料が作るかまぼこ板の薄さも同じく忘れ

ていたのである。

喜綿荘は、実に良い旅館である。

廊下には隙間風が吹き抜け、窓ガラスは一枚も割れていないが風もないのにガタピシと音を立てている。調度品も古めかしく、実用品ばかりで装飾が見当たらない。

ただ、湯が良い。濁りやとろみは無いがほんのりと硫黄が香り、入っていると体が芯からぼかぼかと温まってくる。人間の業に、じんわりと寄り添うような泉質なのだ。

俺はこういう旅館を、良い旅館だと思う。

「洞ヶ瀬さん。もうお風呂には入られましたか？」

浴場が続く渡り廊下を、向こうから彼が歩いてくる。

小柄な身体には大きすぎるような羽織をはためかせ、両手はちょうど蝶々結びの結び目のように、胴の中心へその下辺りできゅっと握られている。

そこで、挨拶をしようとして初めて、彼の名前を知らないことに思い当たった。

「ええ、とてもいい湯でした」

さて、名前を聞いたような気がするがという胸の重さを飲み下す。

「それは良かったです」

彼はゆらりと一礼し、はたはたと軽い足音を立てて浴場へ向かって歩いて行く。

「あの」

頭より先に、口が動いていた。

脂っ気の無い黒髪が、身体の軸に合わせてふわりと広がる。

「…名前、お聞きしましたっけね」

桜色の唇が、控えめに弧を描いた。

「ジョウ。『譲る』と書いて、ジョウです。喜綿譲」

「ゆずると書いて…」

素直に、綺麗な名前だと思った。

似合う、とも思った。

執拗なくらいに華奢な細腕、薄暗い渡り廊下に浮かび上がるような青白い頬に。つや消しの黒髪に。かところと笑う声に、三日月型を描く双眸に。

譲を構成する全てに対して、実に映える名前である、と。

「譲、さん」

「ええ。では、良い夜を。利市さん」

はたはたと音が、遠くなっていく。

渡り廊下の窓は相変わらずガタピシと賑やかしく、彼方から住しさを運んでくる。

隙間風が頬をぬるりと撫でて、俺はようやく、そこに立ちすくんでいたことに気がつくのである。

暖簾の向こうへ消えていった羽織の、染み入るような藍色を、とっくに見送っていたのだと思いつくのである。

「洞ヶ瀬さん。洞ヶ瀬さん…利市さん！」

数十年ぶりに下の名前で呼ばれ、閉じたり薄く開いたりを繰り返していたまぶたが半ば強いられるように持ち上がった。

「はいっ…なんでしょう」

応えた声が、不機嫌そうなのは自覚している。

ガラス戸を通して頬に注ぐ朝日と戯れ、まだ夢見心地でいたというのに。まだぼやけている視界を擦り、ふらふらと身体を起こす。綿入り布団から背が離れるこの感覚が、なんだか随分久しぶりなような気がした。

「朝餉をお持ちしました」

廊下側の障子戸が開き、譲が姿を現した。相変わらず、型にはまったように三つ指をつけて、うつむき加減で前髪を揺らしている。

「随分と、良くお休みになれたようで」

こてん、と首を傾けて笑って見せるその表情には、全くの皮肉が含まれていない。

「ええ。こんなに良く眠れたのは久しぶりですよ」

身体を起こしたときのあの懐かしさの正体は、泥濘に沈むように眠って磨きたての朝を迎えた爽快感だ。それなのに少し寂しいのは、ろくすっぽ眠れていなかったここ数年の、どんよりと曇ったような倦怠感がないせいだろう。そいつが隣にいないすきとした寂しさに、自分で言ってから気がつくのだから、あの倦怠感は随分と良い隣人だったのだろう。

「昨夜は夕餉を召し上がられませんでしたから、さぞお腹が空いておられるでしょう」

お膳をそっと押し進める指が、節くれ立って厭に細い。真っ白なその肌の色は、粉雪を纏った松の枝。木枯らしに身ぐるみを剥がされ、早晚折れるだろう淋しい冬の赤松だ。

「今朝はお寒うございますから、おつゆには糸鰯魚のすり身が入っておりますよ」

まだぼんやりとしている俺に替わってパカリと開かれた椀には、綿雲が浮かんでいる。

汁に口をつけるとほんのり甘く、すり身は舌の上でつるりと滑る。滑らかな塊を噛み砕くとふわりと甘みが広がった。なるほど、汁の甘みはすり身から出ているらしい。

「うまい」

「それは良うございました」

譲が花のように笑う。

こんなに美味しい飯は、生まれて初めてだろうなど、本気で思ってしまうほど。それほど、幸せだった。

幸せというものは、得てして長くは続かないものである。

殊に、俺のような人間にとっては泡沫の夢と同じか、それよりもっと儂いものだ。

『殺さねば、気が済まぬのだ』

頭の中で俺の声がこだまする。

視界がどくどくと、真っ赤に染まって脈打っている。

浴衣の帯を解けば、細身の女一人くらいなら絞殺出来るやもしれない。

『あの快楽を、味わわねば』

頭蓋の中が、風切りの轟音と蟬の羽音で溢れかえりそうだ。

あの、丈夫な細竹で組まれた衣紋掛けは、良い鈍器になるだろう。

『己が永らえるために、殺めねばならぬのだ』

剃刀で頸動脈を切り裂くか。万年筆とて先は鋭利だ。

湯呑み、急須、ガラス戸に、玉砂利。目に入る全てが、殺人の道具に見えてくる。どれを使っても、人を殺められる気がしてくる。

「まづい」

痺れるような鈍い痛みがしてガラス戸のけたたましい音が響き、足の裏に砂利を踏みつけるギシギシとした感覚がする。

苔むした大岩に手をかけたところで、袖がぐつと引かれる。身体が利かなくなる。

「利市さん」

耳元で、声があった。

澄んだ、神社の鈴の音のような、透明な声だ。

「利市さん」

「殺してしまうかもしれない」

ぞっとするほど冷たい手が、火照った頬を包む。

「今度こそ本当に…」

眼窩にはまったびいどろと目があった。

すぐに三日月型を成したそれに、揺れる前髪が影を落とす。

「ねーえ、お寒うございますから。お部屋に戻りましょうや」

暴れまわる呼吸を、収縮を繰り返す胸郭ごと抱きしめる細い腕。あばら骨が軋む感覚が、心の臓や胃の腑まで轟く。心地良い、不思議と温かい好い気持ちになる。

「ね、りいちさん」

耳の中でうわんうわんと鳴り響いていた声が、プツリと止まった。

導かれるままに縁側に腰掛けると、足が薄黒く汚れているのに気がついた。湯気の立つ手ぬぐいを持ってきた譲が、片足ずつ丁寧に砂を拭っていく。

「冷たかったでしょうに」

俺は、何を口走っただろう。

譲に、何を言ってしまっただろう。

「ああ、りょうちゃん、ちょっとごめんよ。お客様に浴衣の替えと晒し持ってきてくんないかね」
細いのによく通る声。

俺には絶対に見せない、崩れた話し方。

「はい只今」

遠くの廊下で返事がして、はたはたはたと羽音のように足音が響いた。

俺の中に彼奴が生まれて二十余年、親にすら知られずにいた秘密。誰にも知らせず、悟らせず、己の中だけで飼いならしてこの肉体ごと燃やし尽くされてしまおうと思っていた、秘密。俺はそれを、譲に知らせてしまったかもしれない。

俺の、人間の、最も醜い核の部分。

「利市さん、あまりご無理なさるから傷が開いてしまったんではないですか。浴衣に血が」
「えっ」

その一言に急に正気に戻り、慌てて帯を緩める。確かに帯の下になっているところが赤黒い土留色に染まっていた。

「お部屋でお召し替えを。お手伝いいたしますから」

縁側から上がり、飛び出した時のままの部屋へ戻ってくる。さっきより妙に明るくて、どうにも人なご殺すような雰囲気ではない。

「まずは帯を取りましょうか。擦れると痛いですからそっと……そうですね」

譲が汚れた兵児帯をくるくるとまとめる。良く考えたら、あんなもので人を絞殺できやしないだろう。相手の息の根が止まる前に千切れて吹っ飛ぶのがオチだ。

「ほら……パツクリ開いてるじゃありませんか。ガーンゼを当て直さない」と

俺の手荷物から大判のガーンゼを取り出し、その上から晒しを巻き付ける。一介の温泉旅館の息子のはずなのに、血を見ても驚かず、厭に手慣れている。

「それにしても大きな切り傷ですね。痛かったでしょう」

「いや……それが、あんまり良く覚えていなくて」

譲が首をかしげる。さらりとした前髪が眉の上で流れた。

「……気持ちのいい話じゃ、ねえんだけど。これは俺が自分で刺したんだ」

新しい浴衣の、糊の香りが鼻を抜ける。

「いつからかわかろんのだが、人を殺したいと思うようになって。探偵小説なんか書いて、自分が殺した気になって気を紛らわすつてのを何年かやってたんだけどさ。小説が売れるようになって、だんだん、それじゃ済まなくなった」

傷を避けて兵児帯をゆるく締めた譲は、湯呑みに温い茶を注ぐ。一息に飲み干すと、東京の自宅が目に浮かんだ。

「頭の中で、殺せ、殺せ、って。響くんだ、声が」

譲を見つめる。

怖がるでも、笑うでもなく。ただ、少し首をかしげてちょこんと座っている。

「ある時、料理をしてたら急に抑えられなくなって、手当たり次第に斬りつけてやりたくて仕方がなくなった。怖いんだ、誰かを殺してしまうかもしれないことが」

譲はにこりと微笑んで、俺の手をそっと握った。

「僕でよろしければ、いつでも斬りつけてくださって構いませんよ」

驚いて瞳を見つめる。何よりも澄んだ、真っ黒な瞳。

過去も未来も、そして現在すらも映っていない、井戸の底より深い黒。

「…怖く、ないのかい」

「何が怖いんですか。皆、頭のどこかで考えていることなのに」

細い指が、俺の不格好な手に絡まる。

やけに細い指の骨が、掌をえぐるように押し当てられる。

そうか。俺の隣に死があるように、この人の隣にも死があるのだ。指を絡めたこの距離よりもずっとずっと傍に、すり寄るようにして死が在るのだ。

「死ぬのより、生きているほうがずっと怖いことですから。ね、利市さん」

それに気がついてしまった俺は、譲の笑顔をまともに見られなかった。

少しして、譲は姿を見せなくなった。

食事の中居が持つてくるようになり、譲はどうしたのかと聞くこともできないまま、ただ空虚に数日が過ぎた。

「洞ヶ瀬様、東京からお電話が」

「は？ ああ、そう。東京ね」

東京と聞いて、すぐに察しがついた。出版社が原稿を催促しに電話を寄越したのだ。湯治に行くと言ったのに、たったの一ヶ月でもう居場所を突き止めたらしい。

「洞ヶ瀬ですが」

「洞ヶ瀬先生！ どこに行くのかも言わずにいなくなるから、有名な湯治場に片っ端から連絡して回って、それはもう大変だったんですから！」

開口一番、キンキンと金切り声を立てる担当者は、確かに苦勞したらしく恨み言を並べ立てる。

「別に探してくれとは一言も言ってない」

「こっちだって先生がどこにいても構いませんけどね！ 締め切り！ 守ってもらわんことには！」

馬鹿馬鹿しくて、俺は黒電話の受話器を思いっきり叩きつけた。

「すみません、野暮用でした。気晴らしに散歩へ出てきます」

愛想よく笑う受付の中居に会釈を返し、ガラス張りの風除室を抜ける。

表に広がる庭園を石畳に沿ってずっと歩いて行くと、俺の泊まっている別館が右手に現れる。

「そーいや、譲はいつも中居とは別の方角から来るな」

鬱蒼とした木々が影を作っているその方角に、行ってみようなどという気を起こしたのが、そもそも良くなかったのかもしれない。

「お…離れ、か」

離れと言うにはみすばらしいその小屋を、離れたかと思ひ込もうとした。

何かを隠すように庭の反対を向いて建てられていることに、気が付かなかったふりをした。

「…窓はついてるし、蔵じゃなさそうだ」

窓にはまった格子を、見なかったことにした。

「曇りにしちゃあ明るいな、空が白い」

真っ白な肌。痛々しいほどに細い指。色のない唇。分かっていただけなのに、考えないようにした。知らないことにした。

小屋の周りをぐるっと廻ると、大きなガラス窓が見える。

光に吸い寄せられる蛾のように、俺の足はふらふらと砂利を踏みしめ、窓へ進んでいく。

『殺せ』

頭の中に声が響く。

敷かれた煎餅布団と、枕に広がる短い黒髪。

『奴自身が、良いと言っていたではないか』

衝動にまかせて石を掴み、ガラス窓を叩き割る。

殊に鋭く尖った一片を握ると、手がぬるりと温かくなる。

難儀して体を起こした彼が、俺を見留てへらりと笑う。初めて出会ったあのとときと全く同じ笑顔を浮かべ、透明の凶器を握った俺を見る。

『こんな細い喉笛を掻き切るくらい、造作も無いことだ』

彼は細い体躯をくの字に折り曲げ、胸をひっくり返すように咳き込む。

はだけた浴衣に覗くあばらが、苦しい苦しいと叫ぶ。笛の鳴るような音とともにへこんでは膨らみ、息

も絶え絶え声も出ない彼の代わりに叫ぶ。

『やっておしまいよ。このまんま生きていたって、苦しいだけじゃあないか』

刹那、彼の口から赤が溢れる。

真っ白な肌が、点々と赤く汚れる。

「りいち、さん」

やっとこのことで絞り出したのは、酷く歪んでひしゃげた俺の名前で。

俺を見上げる目は冬の陽を浴びて艶やかに光り、眦に水晶が滑り落ちていく。

俺に向かって伸ばされる白い指を、そっと両手で包む。

「僕を、ころして」

「僕を、ころして」

俺は何も、聞かなかったことにした。

またのお越しを、と下げた頭をいつ上げるのか。

もうこの客は引き返しはしまいと油断して、ふっと顔を上げた中居だか女将だかの阿呆面を拝んでや

りたい。そうだ、適当なところで振り返ってやろう。

意地の悪い俺は、旅館と名のつくところを出るときいつもそう考える。今もそんな風に考えながら、風

除室のガラス戸を開ける。

夜の色をした薄布をするりとかけるように辺りが仄暗くなる。橙色をした夕日が彼方から這い上って

きて、色も影も、罪も、全ての輪郭をくっきりと浮かび上がらせる。

人間の心とおなじ色をした、薄暗い、薄暗い路。

人間の心とおなじ色をした、薄暗い、薄暗い路。

人間の心とおなじ色をした、薄暗い、薄暗い路。

頬を撫でる風は痛いくらいに冷たい。

さっき敷地へ入ってきたばかりの、神社を背負ったような金ピカの車を横目に、旅館の看板を掲げた門をくぐる。

「ああ…」

雪と露の重みに頭を垂れて、肩を竦めるように立つ南天は、いつの間にか咲かせた花に実をつけている。真っ白な残雪に落ちる、赤くて丸い南天。

振り返ると、俺を見送った中居はもう玄関にはいなかった。

paranemoia / 今泉まづる

paranemoia / 今泉とびら

paranemoia

今泉とびら

夏。私が定義するにはちょっと込み入りすぎている季節。そんなことを言ったら「夏、それは暑い。」くらいにしか表現できなくなってしまうが。そんな名前のバンドがあったな。

夏はエモい。最近は温暖化とかで物理的に打ち消されている気がするが。生命に溢れ、日差しが増し、色彩が濃くなるくせに、なんだか儂い。これには日本人特有の事情もあるう。夏休みとか、お盆とか、終戦とか。もう帰ってこないものに思いを馳せることが多く、それが魅力の一部ということも、否定はできない。それじゃあ失われた命をエモに回収してしまうよううで、夏にエモを感じる大勢の人への悪口みたいになってしまう。そういう不謹慎なエモを普遍的なものとする私のあくどさの話ということで、ここは一つ。それに、世間様への露悪に酔うのはなんとなくタチが悪い気がする。

うだうだこんなことを考えていられるのも、ちょうど暇だからだ。珍しく早めに起きられたのは、段々と高くなり始めた気温のせいもありそうだ。私は日課である未来予知のため、サイドテーブルの水晶玉に手をかざした。

ない。ここにあったはずの未来が、ない！ こ、これは！ 人間社会が熱的死する未来だ！

熱的死とは、エントロピー増大が頭打ちになり宇宙にもたらす平衡状態だ。宇宙が冷え込み、生命らしき構造が維持されるべくもない。そんな終末。

社会熱的死は、エモの増大が頭打ちになり社会にもたらす幸・不幸の平衡状態だ。感情が冷え込み、感動らしき構造が維持されるべくもない。

ここで「エモ」について言及しておこう。エモとは「emotional」な状態（ほとんど感動に近い）をもたらす外的世界の要素を指すスラングである、とここでは定義する。エモはもちろん主観的なものであるため、外的世界においてエモが増えるということは、内的世界がエモを感じ取るように変化したということである。

エモの増大はエモを見出す人間活動によって起きる。それは個人的な試みだったり、伝聞によるものだったりするだろう。意外にも、外的世界に多くのエモを見出すことは、「emotional」な状態の恒久化によって感情を冷え込ませた。

恐らく、科学技術の発展や社会システムの安定化による予測可能性の上昇も社会熱的死に貢献してしまっている。

多くのことが予測可能になった世界に訪れるのはただの懐古ではない。経験していないはずの未来への懐古、「postanemoia」だ。予測されてしまえば、あるのと、あったのと同じなのだ。それはまさしく、

私が未来予知を通して未来改変もできるのと同じ理屈で。未来に見出されるはずだったエモを発見することはエモの増大、そして頭打ちに寄与している。

……ええと、では、今最も幸・不幸の平衡状態に近いのは私では？ 私のなかに着々と育まれている達観は、経験した世界線の多さによる疑似的な感情の老化ではなく、未来に人類を席卷する感情の冷え込みなのでは。

マズい。そうとなれば早速未来を改変しなければ。私は早速、水晶を抱えて細かに世界線を移動することにした。

マズいマズい。ダメだった。世界にとっては数秒後、私は記憶を総動員して考え込んでいた。どうすればいい。やれることはやったぞ。私は思案した後、一人の同級生にラインを送った。一番話がわかるであろう奴に。

傾いた陽の差す空き教室で彼を待った。

「ごめん、遅れた！ オカ研案件だった？」

「未来がヤバイ」

「いつものことじゃん」

私にも名誉欲があるわけで、実際に行ってきた未来改変の話を文芸部誌にSFとして寄稿している。既に改変された未来について語っても誰もわからないので、基本的に未来に影響はないという寸法だ。彼も文芸部員の一人で、同学年であるため、ありがたいことに私の改変日誌を全部読んでくれているが、そのせいか私をオカルトマニア扱いしてくる。まあ、その方が未来への予想外の影響が少なくて助かるのだが。そういうわけで、作文能力のない私が廃部寸前の文芸部で何を書いても未来への影響は微々たるものなのだ。それが未来改変にも役立つ……かも知れないというのは、何の因果か。

「いやそれが、今日は結構マジのやつ。だから協力してほしい」

「まあ実際、僕まで巻き込むことってなかったもんね。で、具体的にはどうしたらいい？」

「この水晶に手をかざして、なるべく私の指示通り未来を改変してほしい。一応言っとくと、両親ともダイブしたけど破滅を回避できなかった。この異変——ラインでも説明した社会熱的死は私の両親が死んだ後に起こるから、というのも大きくて」

「お、やっぱり僕も未来に行けるってわけだね」

「そう、私と一緒に僕も私以外の人間もそれぞれ自らの未来に干渉できる。ただ、改変するならその未来の意志決定プロセスに私も関与することになる。まあでも、強制力はない。私と対立したら一旦私と共に内的世界に連行されるだけ。そこで君が決めればいい。本当は言うことを聞いてほしいけどね」

「ふんふん」

「ちゃんと聞いている？ 君とダイブすると私一人の時より未来の不確定要素が増えるの！ 一緒にダイブするくらいには結構信頼してるつもりなんだけだな」

「家族以外に相手がいらないだけじゃ？」

グサッ。

「と、とにかく、人類のためだから！」

「たしかに！」

「あと、ダイブすると入ってくる情報量が多いから、初ダイブだしキツかったら言って。すぐ戻れるかはわからない」

「おけ」

大丈夫か……？ 好奇心旺盛な彼はノってくれはしやすいが、そもそも「オカルト」を信じてくれないという問題もあり、やっぱり人選ミスったか？ ええい、ままよ！

「じゃあ、行くよ！」

二人で水晶に手をかざした。

夏を閉じ込めたような大広間。田園や丘陵、砂浜に山岳、果ては砂漠や干魃かんぱつした穀倉地帯までもが揃い踏みしているのに、どこにもない。これは夏だから。

俳句に代表されるようなエモコンテツ(失礼)には季節感が大切になるように、季節というものはこの国のエモに多大なる影響を与えている。しかし、この時代の日本に四季はない。そう、温暖化のせいである。

改変について彼と対立してしまったらしい。これは未来の私の心象風景だ。厄介なことに彼の姿がない。水晶を持ち込めたのは幸いだが、経験則的にはそれも殊更、厄介な事態の暗示に思える。

エモの熱的死、完全な平衡状態。それは人類を薄気味悪い夢心地に閉じ込めた。宇宙の熱的死は絶対零度にも近い低温をもたらすが、未来の人類にとっての気候、そしてエモの平均値はここにあるのだ。

暑くて酷くつまらない。これ以上ここにいってもどうなりもしないことが直感的にわかる。ぬるくて体力を奪うような空気が肺を満たす。早くここから出たいのに、出られる気がしない。

しかし、内的世界慣れしている私にとって、変化の糸口を探すのは容易なことだ。この夏に欠けている人工物の気配に集中すると、世界の側面に木の枝に区切られた正方形の領域を見つけた。ここで合っているはずだ。するりとそこまで意識を延ばした。

ぬめり気のあるダイブのような味わったことのない感覚の後、また景色が変わった。

ヤニで汚れたような黄色が広がった。それは視界の果て、曲がり角までムラなく同じ色だったのでこの色はヤニのせいではないだろうが。私は窓のような額縁のような縁取りから抜け出してきたらしい。向こうに見えるのは夏でしかないのに、それがどちらなのか私には判別がつかなかった。

曲がり角を素直に曲がると、玩具が散乱した子ども部屋があった。玩具はさっきまで遊ばれていたように思えるが、誰の姿もないし、心象風景特有のNPCもない。取り敢えず子ども部屋からもう一つ続いているらしい廊下に行ってみるべきだろう。

うん、位置関係的にそんな気はしていたが、これはさっきの廊下だ。夏の額縁はなくなっていた。つまり、目的地はここかこの先だ。うだるような廊下、一転、エアコンが効いて涼しい子ども部屋。この子供部屋をコップとするならば、取っ手のように廊下がついている構造になっている。

どこを見て回っても先程の夏の額縁のような変化はない。四方を黄色の褪せた壁紙が囲む廊下と、それを曲がった先にある子ども部屋の天井に張り付く子ども騙しな青空の絵。壁を殴ってみても痛いだけ

だ。人面の太陽が空から笑いかけてくるのが不愉快だ。

空？　そうか、精密に知覚してみるとわかるが、これは心象世界の本物の空なんだ。雲一つ動かなくてつまらなくて不気味な青をしたこれが。この壁の先を見てみるべきだろう。ただ、跳んでみても壁の上端、空に届きそうにない。

もう一度部屋を見渡してみる。なるほど、ギミックタイプの心象風景とは遊び心があって彼らしい。私は強度の足りないおもちゃ箱に部屋中の玩具を詰めて蓋をした。これでっ！

思い切りジャンプして、壁と手頃な雲を掴んだ。雲に揉まれながら、ようやく部屋を脱した。

強風の吹く屋上に、真白な細い階段が鎮座している。空は相変わらず趣味の悪いクレヨンで塗りつぶされたようだ。

階段の前にいるのは、彼だ。彼だとわかった。いつの間にか、私も老いていた。とはいえ未来ではよく見てきた姿だ。晩年の姿として。

未来でも交友関係が続いているので彼の動向は知っているが、彼はその才と精神の不安定さ、社会への不適応などからどうしたって作家になっている。名誉なことだろうがしかし、それ故に傍目には幸せな人生を歩めていないように見えた。老年期、自ら生涯を終えていることから、そう推察された。人類の存亡の如何を優先しつつ、私もなるべく手を尽くしてきたが、どうしてもその道のりさえ変えられなかった。

さて、事態を飲み込めてきた。

「話し合おう、君も本当はそれを望んでいるはずだ」

「いいんだ、僕はこれで。それが、僕の作品を待ち望む読者のためだし、社会のためでもあるなら誇らしい。君も本当はそれを望んでいるはずだ」

「私がそれを望んでいない証拠を君も見てきたら」

要するに、私たちは何故だか彼が幸せになる世界線に迷い込んでしまったらしい。そしてそれは、私たちの視点からは社会熱的死の原因に数えられるわけだ。

幸・不幸を数値化し、その平衡状態を算出すると、それは不幸になる。人類は幸せになるようには設計されていなかった。それは未来を明るくしようという貪欲な成長を生んできたものだが、未来が予想可能になってしまえば、その限りではなく、ある種の諦観や退屈さが人類に蔓延した。

本来の未来——彼が幸せになれない世界線で、彼は「熱的死」シナリオにおける、宇宙の膨張によりエントロピーは増大し続けるだろうという反論に注目した。彼が言うには「世界」の膨張、つまりグローバルリズムや人口爆発に相当するものが社会熱的死の回避にも必要だ、とした。つまり宇宙開発だ。しかし、異星文明が穏健とは限らない。

永久にぬるい不幸に浸るか、人類の存亡をかけたギャンブルに出るか。彼は人類に大きな選択を迫ることになる。そして、後者を選ぶように働きかけた、はずだった。

彼が不幸であることが、社会熱的死の回避法を提案し、推進できるほどの彼の発言力の強化、才能の開花を促した。天才とは不幸かつ孤高であるべき、みたいな俗説が、少なくとも彼の未来においては確かにそうであったわけだ。

幸せになった彼も依然として作家であったが、そのような発想に至るほど社会派でなくなってしまった。そしてそちらはそちらで大衆にとつての「希望」になってしまったことが問題らしい。特に、彼の「価値」とは、流通量ではなく煩雑さで決定されるべきだ」という提言は、切実だったのかも知れないが、現実には後半部分を見捨てられて量産品を高騰させる口実にされ、量産化されたエモを受容する世論へと繋がってしまった。「ナンバーワンでなくていい、オンリーワンですらなくていい、実際そうなのだから」、そういう妥協みたくないものが「希望」の顔をして世界を動かし始めたとき、彼はその一端を担ってしまった。……というのが彼の弁だが、私にはその分析の正確さがわからない。何故なら私には致命的に文学の才が欠けているからだ。同じ未来を見たはずなのに、同じ原因を見出せなかった。しかしなるほど、それが私や両親では未来を変えられなかった理由かも知れない。

「まず、落ち着いて聞いてほしい。君は悪くない。私が悪かった。君は今、情報を流し込まれすぎて混乱している」

「聞かない。見てきたんだから知ってる。僕たちの間で前提は共有されている」

私も人類を救いたくてここにいるわけだが、それはひいては自分の幸福のためでもあるわけだ。ここまで自己犠牲精神があるとは。思えば、私は水晶に慣れすぎてしまったのかも知れない。未来を変える責任みたいなものに、無頓着に生きてきていた。しかし、それだけが私が彼の人生の改変に手をかけた理由ではない。

「それで、君は幸せになりたくないの？ 社会熱的死はどうせ何十年も先に起きるんだぞ」

「少なくとも、僕の幸せは君に定義されるもんじゃない」

そう言って彼は屋上の端に向かった。

「言っておくけど、ここで落下しても虚無に落ちるだけだ。死ねないぞ」

「うん。だから悪いけど、今から変えに行く。戻す、の間違いかもだけど」

階段の頂上に扉が開いた。それは彼の決心のように無辜だった。内的世界における扉の役割は、私が一番知っている。

「ふーん」

ところで、実は先述の「内的世界での他人の未来改変意志決定プロセスに私の強制力はない」というのは、少し嘘を混ぜてある。本当は、私も内的世界のルール内で干渉できる。例えば、

このようにっ！

「待て〜！」

「は？ あ！」

彼も直感的に何かを感じ取ったようだった。そう、ゴールがその扉なら、壊せばいい。壊さないにしたって、阻めばいい。

それが、唐突なジジイとババアの飽くなき鬼ごっこが始まりだった。

こっちは水晶があるんだぞ！ 何度だって、未来を変えてみせる！ そんなセリフを吐く余裕もない全身全霊のかっこは、曲がりなりにも人類の未来を左右しようとしていた。

水晶を抱えながら何度も階段を駆け上がる。何度も内的世界での位置座標を戻す。追いつかない。追

いつく未来が見えない。でも、どうしてだろう。この未来が変わえられると、信じて疑えないのは。

あ。あったじゃないか、一つだけ。まだ試していない方法が。そう気づいた私は、この飽くなき鬼ごっこスタート地点まで戻って、水晶を放り出した。これまでの人生で最も洗練されて無駄のない動作で。本当は惜しくて、なるべく優しく。振り返りはしなかった。一番大切なものを知っているから。

最後の直線レーンを意志の力という名の馬鹿力で駆け抜けた。ドアノブに手をかけた彼を、もう塞がっていない両手でありったけの力を込めて後ろに倒した。バックハグ、というよりジャーマンスープレックスだ。火事場の馬鹿力とは恐ろしいもので、彼は完全に逆さまになった。それを支えられるはずもなく、二人とも階段から転げ落ちた。マズい、虚無に落ちてしまう！

ところで、火事場の馬鹿力というのはひらめきにも影響するらしい。私はとっさにひびの入った水晶に手を伸ばした。彼もそうしていた。強風に煽られてこちらへ転がる水晶には二人の必死の形相が映った。それは、ロマンティックとは言い難く。

ふっ、と意識が仄暗い教室に戻る。まだ離人感が残る体で、さっさと水晶を壊そうとした。そうするまでもなかったらしい、水晶は弾けるように霧散した。花火のような大きく鼓動する音に続いた、ぱらぱらという残骸を思わせる音は、予知への未練がましい思いが砕け散る様を思わせて、今は心地良い。

「綺麗だ」

彼もすぐ起きたようだった。水晶の破片の煌めきは儂く綺麗で。

「……ハハハ、違う違う！」

彼は一人で笑い始めた。

「君のことだよ」

「それはっ！ 告白と受け取っていいやつ？」

「もちろん」

「それなら……君を一生幸せにします！」

社会熱的死までと言わず、そう、今からでも社会熱的死を防いで。

「早いよ!？」

夏。輝く季節に。

はゆる日々に
／ 田村美結

はゆる日々に／田村美結

はゆる日々に

田村美結

色褪せたスクリーンに、黒いしみが一つ。

映画館の赤い椅子は、すっかり縫い目がほつれてしまっている。木でできた肘置きは、年月によってできた艶がほんのりと光を照り返している。

階段に溜まった綿埃が、微かな空気の流れにひらひらと揺れた。

誰もいない、寂れた小さなシアター。まるで、時間の流れに取り残されてしまったような、そんな空間だった。

そんなシアターの中に、映写機がぼつりと佇んでいる。黒く、古びた映写機だ。そのローラーには、綺麗なフィルムが取り付けられている。この空間の中で、そのフィルムだけがどこか異質だった。少しだけ新しく、けれどそれが異質で。薄暗い、寂れたシアターの中、それはどこかちぐはぐで、浮いていた。ふと、鈍い光が差し込んだ。埃が舞って、ちらちらと煌めいた。ぎい、と蝶番が軋む音がする。金属同士が擦れ合う、高くて、か細くて、それでも少し耳障りな音。

ぼやけた影が、スクリーンに映る。こつ、こつという、固いもの同士がぶつかる音。腰の曲がった、小さな人影。杖をついた老翁だ。顔に、手に幾つも刻まれた皺は、長い時の流れの表れ。このシアターと同じように、老いている。

傷跡で引き攣れた手を杖の持ち手に重ね、老翁はシアターの中へと足を進める。スクリーンにほのかに映る影が、その歩みに合わせて揺れる。

ふと、シアターが明るくなる。スクリーンに映る影が濃くなった。すぐにそれは、フレームの外に消える。

映写機の隣に、老翁は腰掛けていた。杖を己の傍に置いて、映画館の赤い椅子ではなく、どこにでもありふれた木の椅子に腰を下ろしている。天然のオーク材は、長く使い込むほどにその色合いが深くなっていく。

この空間にあるものはみな、老いているのだ。

光に焼けてすっかり白さを失った、黄ばんで汚れたスクリーン。

縫い目がほつれて中身がわずかに垣間見える、赤い椅子。

使い込まれて艶が浮いた、オーク材の手すり椅子。

掃除が行き届かず、床に薄く溜まった埃。

塗装が剥げ、錆も僅かに浮いた黒い映写機。

シアター内を照らす、ときおり瞬く明かり。

皺としみが、そして古い傷跡が深く刻まれた、節くれだった手。

全て、老いている。否、ただ一つのを除いて、この空間は老いている。映写機に取り付けられた、どこか新しいフィルム。ただ、それだけが若い。

この老翁は、かつては兵隊であった。赤紙に従い、故郷を発ち、兵隊としてお国のために戦った。異国の地で、多くのものを見た。見知らぬ植物。見知らぬ空。見知らぬ海。見知らぬ人々。

そして、多くのものを知った。戦場で砲撃に晒されることへの恐怖。銃を撃つ反動。人を殺す感覚。戦友の死。人の身体が、壊れるところ。

たくさんの戦友を失った。出撃を繰り返すたびに、見知った顔が消えていた。音と声が混じる。血と土が混じる。生と死が混じる。己と他の境界が、薄くなっていく。

死への恐怖が、大気に溶け出ていくようだった。常に己の周りに纏わり付いているのに、その存在は、どこかはっきりとしない。心の中にかつていたはずの感情が、どこか遠いところにあった。

恐怖だけではない。あらゆる感情が、感覚が、自分の皮膚から、あらゆる器官から溶け出していた。滲み出て、己の周りを揺蕩っていた。薄絹のように視界を、音を、あらゆる感覚を霞ませていた。

それは今思えば、きっと自分の正気を守る術だったのだろう。

砲弾の音を、死という感覚を、血の色を、煙の匂いを、その姿を、曖昧にさせる術。

恐怖に狂った人間を知っている。友の狂う姿を、目の前で見た。狂乱、恐慌。その先に待っていたのは、いつだって死だった。

死を恐れていた。いつか訪れるかもしれない、狂う日を恐れていた。怒声に怯えていた。砲撃に怯えていた。血煙に怯えていた。

怪我の痛みが、ここが現実であることをいつだって突き付けていた。己を現実に固定していた。

それでも逃げ出すことはしなかった。否、できなかった。逃げ出せば、死ぬより辛い目に遭うと知っていた。故郷に残してきた家族の憂き目を考えれば、逃げ出すことなどできなかった。

時の流れすら曖昧になっていく中、ただいつか訪れるその日を、死を、恐れることしかできなかった。戦争が終わったのは、日本が負けたのは、そんな時だった。

老翁は、復員兵であった。

やっこの思いでふるさどに帰ってきた時、そこはすっかり様変わりしていた。

街は焼け、路地には身寄りのない子どもが屯している。

多くの人間が死んだらしい。それだけを、知っていた。

幸い、老いた両親は無事だった。戦火を逃れた田舎の農村で、戦地へと旅立っていた息子を待っていた。自分はきっと、恵まれていたのだろう。彼は、そう思った。戦地から、生きて帰ってくるのができた。

五体満足で、命を持ち帰ることができた。生きて帰って、詰られることもなかった。両親が生きていた。

東京にいたいと一家は、今も行方知れずだという。戦友の一人が、日本は負けたのに生きて帰ってきたことを責められ、家を出たという話も、風の噂に聞いた。反対に、帰ってきてみれば妻子が物言わぬ骸となっていた戦友がいた。大怪我を負って帰国した親友が、傷口からの感染症が元で死んだ。

自分はきっと、恵まれていたのだ。

そのうちに見合いをした。両親の知り合いの娘だという。気立てのいい、優しい女だった。年も近く、

話しやすく、居心地が良かった。生まれ育った場所は違うが、知らない土地の話を聞くのは面白かった。一緒にいて楽しかった。自分の世界を、広げてくれるような相手だった。

そして己は夫となり、娘は妻となった。

やがて子をもうけた。息子が一人、娘が二人。三人とも、元気な子供だった。子を育てることの大変さを知った。戦後日本の、まだ復興しきっていない不安定な社会の中、必死に働いた。子と妻を養い、生きていくには、金が必要だった。

息子とはよく言い争いをした。娘には、嫌われるような時期もあった。

それなりに、月並みに、仲のいい家族であったと思う。それで十分、恵まれていたと思う。

やがて、末の子供が巣立った。老いた夫婦は、また二人に戻った。今までずっと賑やかだった家は、また静かに戻った。

それからまた、少しの年月が経った。歳月の表れとして、夫婦には皺が刻まれた。目が霞むようになり、耳は遠くなった。身体は言うことを聞かなくなり、衰えを主張するようになった。

老翁には、ある夢があった。

その男は、映画が好きだった。戦前の幼い時分、親戚に連れられて一度だけ観に行った、ある映画。戦争の最中、その記憶も己の正気を保つ縁になっていた。

モノクロのフィルム。静かで薄暗い部屋。どこか違う世界から聞こえてくるような音声。役者の表情。その全てが、かつての少年の琴線に触れた。心を揺さぶった。

その親戚は、出兵先で戦死したと聞いた。いつか自分で映画を作りたいと言っていたのを、今でも覚えてる。

彼の映画を上映することはできなかったけれど、彼が好いていた映画を弔いに流したいと思った。日本中に散り散りになった戦友が、会いに来られるような場所を作りたいと思った。

そうして、老いた男は、この古びた映画館を買ったのだ。

妻は止めなかった。ただ一言「私も趣味にお金を使います」と言っただけだった。その日以来夫婦の家には、巣立った子供の代わりに、毛糸で編まれた小さなぬいぐるみが増えるようになった。

建物は小さく古く、交通の便も決して良くはなく、故に破格の値段で自らのものとすることができた。この空間は老翁にとって、ある意味では終着点であったのだろう。

戦火の中を生き延び、故郷に帰っては、戦後の動乱の中を生き抜いて。その果てに訪れた、穏やかな余生。

あとは緩やかに、眠りに近付いていくだけ。

先に死んで行った友たちの顔も声も、もうはっきりとは覚えていない。ただ、名前と、彼らが語った言葉だけは、鮮明に記憶している。老いることもできなかった彼らが、かつて望んだことも。

また、蝶番の軋む音がした。柔らかく軽い足音がして、色褪せたスクリーンに、ぼんやりとした影が映る。老爺よりも一回り小さな影。

老爺の隣に、腰掛けた人影が一つ。白い髪は丁寧に結い上げられ、皺としみの刻まれた手には、毛糸玉と編み棒が入った籠がある。

老婆は、微笑んでいた。スクリーンを注視するでもなく、何か言葉を発するでもなく。ただ穏やかに

微笑んでいた。

老翁の手が動けば、スクリーンに映し出された映像が動く。

老婆の手が動けば、編み棒が毛糸を編み上げていく。

ゆったりとした時間が、流れていく。

老いた夫婦にとっては、映ゆるものとは、今この手の中にあるもの、この穏やかな暮らしであった。

ビリーヴメント／南快

ピリーヴメント / 南快

ピリーヴメント

南快

「もう少し右にずれてー。あー、そうそう。オッケー、そのままこっち振り向いて」
潮風に吹かれて、白いワンピースを揺らしながら、綾はこちらを見る。顔を隠す長い髪を直しながら、彼女は優しく微笑んだ。

カシヤツ

シャツター音とともに、撮影された画像が携帯の画面に表示される。祈るように覗き込んだその写真に、彼女は映っていなかった。そこには雲一つない空、ざらついた砂浜、果てしなく広い海しかなく、それらを背景にしてしまう主役がいなかった。

分かりきっていた事実で落胆しながら、俺は携帯をポケットにしまって海岸を後にした。

分かっていた……彼女はもう、いない。

1.

「あっ、せんぱーい！ 今日も海岸帰りですかー？」

大学へ戻ると、後輩の沖野に声を掛けられた。

「ああ、そうだよ。んで、今から研究室にでも行こうかなって思ってたところ」

「先輩最近頻繁に海行ってるらしいですよね？ 毎度何してんすかー？」

「まあ、ちょっとな……最近天気も良いし、気持ちも落ち着くというか」

「ついこの間まで雨でしたけど？」

「普段はおちゃらけた雰囲気なのにこういう時だけは鋭いものだ……」

「そ、そうだったな。まあ、ちょっと荒れてる海もたまには良いもんだぞ」

「そういえば、最近彼女さんどうしたんすか？ 前は一緒にいたのに最近は見かけませんけど」

思いがけない言葉に驚いて、つい俺は言葉を詰まらせてしまった。本人に悪気はないようだし、怒ることとできない。第一、俺は「そのこと」を沖野に伝えてないのだから。いつかは言わなくてはならないのだけど、変に気を遣われることに抵抗感があった。

「色々あってな……」

「ふーん、まあ、あんまり人のプライベートに踏み込むのは野暮なので、これ以上は何も聞かないでお

きますよ」

「ありがたい、理解のある後輩で助かるよ」

「へへっ、どうもです。あ、やっべ。先輩すみません、俺この後授業なんで、ここで失礼します」
 そう言って、沖野は急ぎ足でその場を去って行った。一人になってふと携帯を開く。

どれだけ沖野と俺が仲良かろうと、このことは話すわけにはいかない、このアプリのことだけは。俺はアイコンをタップし、アプリを起動する。しかし、画面は暗転したままで、しばらくすると文字が浮かんできた。

本日の使用時間の制限に到達しました。制限は翌日AM0:00にリセットされます。

俺は、すぐに携帯を閉じた。

2.

そのアプリが俺の携帯にインストールされていたのは大体1ヶ月くらい前だった。自分で入れた記憶はない。アイコンは白地に黄色いハートが描かれたシンプルなデザインで、名前は「Pseudo（シュードウ）」と言っらしい。怪しがりながらもアイコンをタップすると、突然画面が暗くなり、文字が浮かび上がった。

この度は、アプリ「Pseudo（シュードウ）」をダウンロードしていただきありがとうございます。本アプリは、大切な人と会えなくなり、苦しい思いをなさっているであろう方々の心を支えるためのものです。このアプリを使っている間だけでも、現実の辛さを忘れて、素敵な時間をお過ごしください。

アプリの使用までの手順

① あなたが会いたいと思っている相手の画像をアップロードし、呼びたい名前を登録してください。全体像が映っていれば、よりリアルなアバターを生成できます。

② あなたの声を録音させてください。下に表示されるマイクボタンをタップしたら、携帯に向かって「こんにちは。（使用者の名前）です」と話してください。大きな声ではっきりと発音してください。静かな環境での録音を推奨します。録音された声を判別してアバターが反応するようになります。

③ ②までの手順が完了しましたら、自動でアプリが再起動し、以降はアプリが自由に使えるようになります。外向きのカメラで映した風景に登録された相手のアバターが現れますので、沢山お声を掛けてあげてください。

※注意事項

① アバターはあなたの声には反応しますが、アバター自身から何かを発言することはありません。

② 一日に利用できる時間は30分までとなります。

③ 本アプリは……

会いたい大切な人、すぐさま俺の脳裏には彼女の姿が映し出される。内海綾。俺の恋人で、二か月前に死んだ……

大学2年の時に出会った俺たちは、すぐに意気投合し、1ヶ月もしないうちに恋人関係にまで発展した。もう互いの両親にも紹介したし、大きな喧嘩も無く仲良くやっていた。綾とは話していなかったけど、未来のこと、卒業後のことについても、最近は考えていた。ただ、その未来は永遠にやってこないものになってしまった。彼女は大学終わりの帰り道で、酒気帯び運転をしていた車にはねられた。俺が知らせを受けて病院に駆けつけた頃には、綾はすでにこの世を去っていた……

癒えない傷がさらに深まってしまった。彼女のことを考えない時は一遍もなかったし、未だにその死を認めていない自分がいるのも確かだった。

気づけば、このアプリに対する不信感は、綾への思いの強さによってかき消されていた。綾にもう一度会いたい。その一心で俺はアプリの設定を進め始めた。

アップロードする写真は海辺で撮ったものにした。俺と綾の最後の思い出だった。名前の欄に「ウツミ アヤ」と入力し、音声データを再生し、問題がないことを確認して次に進む。次の画面は真っ黒な背景の中にただ一つマイクのボタンがあるだけだった。それを押すとカウントダウンが始まった。数字が0になる時、俺はぐっと思を吸って気持ちを落ち着かせた。

「こんにちは。波木慎なみまことです」

俺は力を込めて録音完了のボタンを押した。

3

アプリを使う場所はアップロードした写真を撮ったのと同じ海にした。俺と綾が初めて二人で行った最後に二人で行った場所だった。大学の昼休みの時間にキャンパスを抜け出し、俺は海岸へ駆けていった。そこに綾が待っていると思うだけで、俺の気持ちはどんどん高揚していった。幸い昼間に来たおかげで、周りに人はほとんどいなかった。遠くの防波堤の上で釣りをしている人がちらほらいるくらいだった。俺は緊張しながらも携帯を上にあげた。手を当てなくても分かるくらい鼓動が早まっている。アプリが起動し、外カメラと連携される。暗かった画面の先に唐突に海が広がった。そして、画面の中心には綾が映っていた。

夢見心地だった。カメラを構えるその向こうには確かに綾がいた。アバター特有のヌルヌルとした動きが気になるが、その姿は、細部に至るまでが限りなく彼女に似ていた。いや、彼女そのものだった。

「あ、綾……」

思わず、声が漏れた。目元から何か頬を伝っていくのが分かる。晴れ渡った日の海辺で、綾は俺の声に反応して遅れて微笑んだ。少し微笑んだ後、彼女の顔からは笑顔が消え、ただ茫然とそこに立っているだけだった。何か話しかけなければと思い、俺はなんとか言葉紡ごうとした。

「なんだよ……急に俺の前からいなくなっちゃったかと思えば、急に画面の中に現れるし。ほんとに……ほんとに……」

自分でも何を言っているのか分からなかった。何かを言わなければならないという気持ちに駆られて自分でも整理のつかない気持ち溢れ出す。だって、仕方なかった。そこに綾がいるのだから。俺の声から泣いていると検知したのか、綾は心配そうな顔をこちらに向けてくる。

「ごめん、取り乱した。だからそんな顔をしないでくれ、笑ってよ」

そう言うとしばらく動かなかった綾が顔を緩めて、作られたような細まった目でこちらを見てきた。

それからしばらくは最近あったことを話した。大学のこと、バイトのこと、部活のこと。伝えたいことが多すぎて、でもその全てを伝えきれないことがもどかしかった。話を聞いている間、綾は楽しそうにしている、時折驚いたような表情も見せた。最初こそは、機械のように見えていた綾が徐々に彼女本人のように思えてきた。

楽しい時間はあっという間だった。「本日の使用時間は残り5分です」という通知が画面上部に届いたが、すぐに横にスワイプして、綾の方に意識を戻した。声をかけてなかったせいで、彼女は表情を失っていた。

「ごめん、綾。今日はもう時間みたい。明日からも会いにくるからさ。ここで待っててよ」

そういうと彼女は再び笑顔を見せた。今日一番の笑顔だった。

その日以降、俺は毎日海に行くことが日課になった。雨の日も風の日も、少し体調が芳しくない日も、そこに綾がいると思うと1日たりとも欠かすことはできなかった。

そうやって、俺の心に空いた穴はこれからもずっと幸せで埋められる、そう思っていた。

しばらく使っているうちに、このアプリには外の風景を映す機能はあるが、それを撮影する機能がないうことに気づいた。もし、この画面をそのまま、画像にすることができたら、綾はそこに残るのだろうか。そこで俺は妙案を思いついた。画面をスクリーンショットすれば、彼女は画面の中に映ったまま姿が保存されるのではなからうか。ものは試しと、俺は綾の写真を撮るように彼女を誘導することにした。

「もう少し右にずれてー。あー、そうそう。オッケー、そのままこっち振り向いて」

潮風に吹かれて、白いワンピースを揺らしながら、綾はこちらを見る。顔を隠す長い髪を直しながら、彼女は優しく微笑んだ。

カシャッ

シャッター音とともに、撮影された画像が携帯の画面に表示される。祈るように覗き込んだその写真に、彼女は映っていなかった。そこには雲一つない空、ざらついた砂浜、果てしなく広い海しかなく、それらを背景にしてしまう主役がいなかった。

分かりきっていた事実に落胆しながら、俺は携帯をポケットにしまって海岸を後にした。

分かっていた……彼女はもう、いない。

4

次の日いつものように午前の授業が終わるや否や俺は海へ向かい、アプリを起動した。が、アプリは起動することなく、画面は暗いままだった。システム障害でも起きたのかと不安に思いながら待っていると、しばらくして文字が浮かび上がってきた。

日頃より、本アプリのご利用ありがとうございます。この度、あなたのアプリ利用が使用期限に到達してしまったため、こちらの方から自動的にサービスを終了させていただきました。

「は？」

意味が理解できなかった。使用期限の説明なんてどこにもなかったはずだ。俺はすぐにネットで原因を調べて、アプリの公式サイトにヒットした。利用規約を探していると、それらしき文言を見つけた。

※注意事項

① ……

② ……

③ 本アプリは利用開始から49日間のみのご利用可能となりますので、ご了承ください。

完全に見落としていた。綾に会えるかもしれないということに浮かれてあまりしつかり読んでいなかった。唐突に訪れた孤独が、今まで会っていた綾が幻想だったことを痛感させる。昨日まで綾が映っていたスマホの画面には俺の顔が映っているだけだった。歪んでいて、ひどく醜い顔だった。

5

海からの帰り道、何度も電柱にぶつかりそうになった。赤信号なのに車道に出そうになった。いっそのこと、そのまま前に出て轢かれてしまえばいいと思った。人生の希望を根こそぎ奪われる、そんな感覚だった。

そんなフラフラとした足取りで大学に戻ると、授業終わりであろう沖野に会った。

「え、先輩、どうしたんすか？ 顔色悪いっすよ」

「大丈夫大丈夫……気にしなくていいぞ」

「いやいやいや、絶対大丈夫じゃないですって、そこで一旦休みましょう」

そう言って、沖野は俺の腕を強引に引っ張り側にあったベンチに座らせた。

「なあ、沖野。死んだ人に会える道具があったら使いたいか」

「そうっすねえ、そりゃ会いたくないって言ったら嘘になりますけど、俺はあんまり使いたくないっすねえ」

「そ、そうなのか？」

「いやだって、それって本物じゃないっすよね？」

「失礼だと思っすよ」

ああ……こいつは俺なんかよりよっぽど大人だった。俺には沖野のような「受け止める強さ」がなかったのだな。

「俺、受験期におばあちゃん亡くなって、家が近かったからいつも遊んでもらってただけにほんとに悲しくて、生きる気力を失ったんすよね。そしたらある日急にスマホに Pseudo? ってアプリが出てきて、先輩がさっき言ったみたいに、死んだ人に会えるよって言ってきたんすけど、俺怖かったんすよね。そういうのを使い出したら、もう現実に戻って来れなくなるような気がしたんすよ」

なんだか、自分が恥ずかしくて仕方がなかった。沖野はただ、自分の過去を語っているだけなのに、俺の弱った心をズタズタに切っているかのようだった。安直にこのアプリの話をこいつにしていなくて良かった。沖野のことだから、きっと人の価値観は否定しなくても、俺たちの関係は気まずくなっただけに違いない。

そうだった、たとえば綾がこの世からいなくなっても、俺の心の中からは消えていない。俺が忘れない限り彼女は消えてしまわない。俺はこれからも綾と共に生きていくのだ。

そそくさと携帯を取り出し、俺は Pseudo のアプリのアイコンを長押しする。微動するアイコンの右上に「E」のマークが現れた。それを押そうとする俺の指は震えていた。今俺がしようとしていることの重要さを俺はまだ把握しきれていなかった。固唾を飲んで、その指先に集中する。

そして、俺の指は画面に触れる……

指を離れた画面にもうアプリは無かった。これで良かったのだ。ふと、顔を上げると、白いワンピースを着た女性が遠くに立っているのが見えた。女性は俺から何か声をかけなくてもにこやかだった。人らしい自然な挙動をしていた。しばらくすると、彼女は両手を口の横に添えて、叫ぶ仕草をした。

「あ」「り」「が」「と」「う」「う」

俺には彼女がそう言っているように思えた。声は届いてこないから、本当は違うのかもしれない。だが、俺はそう言っているのだと信じている。

「なあ、沖野。腹減ったし飯食に行かねえか？　奢ってやるよ」

「え！？　良いんすか？　じゃあ、竹屋が良いっすねえ、今やってる期間限定の定食が気になってたんすよ」

さっきまでのシリアスさの影が見えないほどに元気になった沖野を見て、つい笑みがこぼれてしまった。やっぱりこいつはこれくらいの方が落ち着くな。ふとさっき女性のいた方を見るとそこにはもう白いワンプイスは無かった。

『ちぢらこそ』

そう心の中で囁いて、俺は歩き出した。

むつぎくん / 粘南

むつきくん / 釉南

むつきくん

釉南

むつきくんは3歳のときから柔道を習っています。毎週土曜日、お昼ご飯を食べた後に、二駅隣にある市民体育館で稽古します。

幼稚園に通っていたときは、いつもおばあちゃんが車で送り迎えをしてくれました。

でも、むつきくんが小学生になる春に、おばあちゃんは腰を痛めて入院してしまいました。お父さんとお母さんは土曜日も仕事があるので、むつきくんの送り迎えができません。

そこで春休みの間にお母さんと練習し、むつきくん一人で稽古場まで行くことになりました。

初めて一人で乗る電車に、むつきくんはたいそう緊張しました。駅のホームと電車の間にはまってしまわないか、切符をなくしてしまわないか、降りる駅を間違えてしまわないか、とても心配でした。

実際、むつきくんは去年の夏、家族みんなで夏祭りに出かけたときにホームと電車の間で足を挟んでけがをしてしまいました。そのためせっかくの夏祭りに行けなかったのです。その時むつきくんを引っ張ってくれたお父さんも、今日はいません。

しっかり足を上げて乗らないと。どきどきしながらゆっくり電車に乗りこもうとしました。

その時、電車に乗っていたお兄さんが降りてきました。そして、あわやぶつかりそうなどころでむつきくんを避けていきました。

ちょうどホームの枯れ葉を掃除していた駅員さんがむつきくんに、降りる人が優先だよと教えてくれました。むつきくんは入学式するとき、名前を呼ばれて返事を囁んでしまったときと同じ気持ちになりました。その後、切符は手に握りしめていましたし、降りる駅を間違えないようしっかり駅員さんの放送を聞いていたので、問題なく体育館に行くことができました。

その日もいからし先生はとっても厳しく、むつきくんは三回も怒られてしまいました。そのたびに柔道場を一周走らなければならないので、むつきくんはへとへとです。最後のお話も、いつもよりも伸びていました。

陽が沈む前には家に帰れるかな、なんて、帰りの電車で揺られながらぼうつとしていたせいでしょうか。窓の外を見ると知らない景色です。どうやら降りる駅を越してしまっただけみたい。

むつきくんは慌てて電車を降りました。この辺りは電車の本数が少ないので、早く引き返さないと帰れなくなってしまう。時刻表を探しましたがなかなかそれらしいものが見つかりません。知らない場所、誰もいないし明かりも少ないです。

むつきくんはどんどん不安になってきました。

はめていた腕時計を見ると、もう6時近くになっていました。そろそろお母さんが家に帰ってきているはず。

こんな時携帯さえあればよいのですが、むつきくんはまだ携帯電話をもっていないません。

もしかしたら帰れないかもしれない。そう考えてむつきくんの頭は真っ白になってしまいました。家の鍵を部屋に忘れたせいで中に入れなくなった時と同じ気持ちになりました。そのときはお隣のおばさんがお母さんに連絡をして、暫く家の中にお邪魔させてもらい事なきを得たのですが。

駅のホームで立ちすくんでいたら、改札の外に公衆電話のボックスが見えました。そうです、こういうときは公衆電話を使うように言われていました。

切符を通すところがなかったたので戸惑いましたが、とりあえず外に出ることにしました。

暗いなかそこだけぼんやり光っていて、少し気持ちが楽になりました。

受話器をとろうとして、電話のかけ方がわからないことに気づきました。お金を先に入れるのだったか、受話器が先だったか。お母さんは何といていたのでしょうか、思い出せません。お財布を開けたら、小銭は三十円しか入っていませんでした。三十円で足りるのでしょうか。むつきくんのあせる気持ちはどんどん大きくなっていきました。

十円玉を試しに差し込んでみたところ、コロンと返ってきました。貴重な一枚が無駄にならなかったことに安堵しつつ、受話器をとってもう一度硬貨を入れました。

お財布の中に入れてあったカードを見ながら慎重にお母さんの電話番号を押していきます。音が鳴らないし、家の固定電話みたいに番号が表示されるわけでもないのです、うまく押せているのかどうかわかりません。

…プルツ、プルツ、プルツと、途切れ途切れの音が流れてきました。

何秒経ったのでしょうか。時計を見ていたわけではないので正確な時間はわかりませんが、結構な時間がながれたはずですよ。むつきくんはお金が足りなくなるのが怖くなって、追加でもう一枚十円玉を差し込みました。

しばらくしても、お母さんが出る様子はありません。番号を間違えているのかもしれない。そう思うとかけなおしたい気持ちになりました。でも、今更かけなおしても、十円しか残っていません。むつきくんは泣き出したくなりました。

気づけばお金が不足したのでしよう。ブーツという音が耳に響きました。

もう一度電話すべきかな。でも、何分も電話をかけたんだし。すぐには出られないのかも。お母さんがかけなおしてくるのを待とうか。それか、少し時間を空けてからかけてみようかな。帰れなかったら、どうしよう。

時計を見て、ホームを見て、十円を見て、五分だけ待つことにしました。それ以上は、待てませんでした。そのまま電話ボックスの中で、長い長い五分を過ごしました。針が三周回った頃にはもう、早く十円玉を入れてしまいたくって仕方ありませんでした。

必死にその思いを堪えて、祈りながら電話機を見ていましたが、電話がかかってくることはありませんでした。

残りの十円を使ってもやはり、お母さんは電話に出ませんでした。ブーツと金額不足の知らせが聞こえて、いよいよ不安の波が膨れ上がってきました。

すると突然、電話の扉が開く音がしました。電車が来る音なんて、全く気づきませんでした。

なんとか扉が閉じる寸前に、電車に乗り込みました。電車は山の間を縫って進んでいき、トンネルに入りました。長いトンネルです。トンネルを抜ける前にひとときわ明るい場所があって、電車が停止しました。どうやら駅のホームがあるようです。

静けさはさっきの駅と同じですが、レンガ造りの豪華な駅で、どこか不気味な雰囲気がありました。むつきくんはふと、さっき通ってきた道にトンネルなどあったのだろうかと不安になりました。もしかしたらこの電車は逆向きの電車なのかもしれません。それに、先ほどから、電車が出発する気配はありません。

人が見えたような気がしたので、むつきくんは電車を降りることにしました。すると待ち構えていたかのように電車の扉が閉じ、電車は次の駅に行っていました。

むつきくんは人の見えた場所に向かい、ひどくがっかりしました。そこにあっただのは鏡でした。人に見えたのは、むつきくんが映っていたせいでした。大人が竹馬に乗ってのぞいても全身を映せそうな大きな鏡です。むつきくんは吸い寄せられるように鏡に近づきました。その時、うっかり小石に躓いてしまいました。鏡にぶつかる。そう思って目をつぶったむつきくんでしたが、衝撃はいつまで経っても訪れませんでした。それどころか、転びすらしませんでした。

目を開けたとき、むつきくんはさっきまでいた電話ボックスの中にいました。手には受話器が握られています。

「……プルッ、プッ、プルッ……」もしもし？

むつきくんのお母さんはすぐに車で迎えに来てくれました。それから、おばあちゃんが退院できること、これからなにかあったときのためにキッズ携帯を買ってくれることを教えてくれました。

この日以来、お母さんはなんだか優しくなりました。以前は仕事で疲れていたのか、むつきくんのおおばあちゃんにすべて任せていましたが、むつきくんの話聞いてくれるようになりました。

でも、少し変なのです。むつきくんは家族旅行をしたことがあります。それなのに家に帰ると、家族旅行の写真が飾ってありました。去年買った甚平を着て、りんご飴をなめているむつきくんの写真もありました。

変なのです。お母さんが、お母さんとは違うような気がするのです。

むつきくんはまた今度鏡のある駅に行ってみようと思いました。そうしなくてはならない気がしました。

奥付

奥付

奥付

案山子 二〇二五 冬号

著者：新潟大学文芸部

<https://puboo.jp/users/sindabungeibu>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二五（冬）

著 者 新潟大学文芸部

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
